

せっかく転生したので
最強の悪役を目指しま
す。

Z—ONE

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

平成29年、日本。

俺はいつもの日常を送っていた。

いつも通りに学校に行き、勉強して帰ってくる。

友達なんていないのでずっと一人。

そんな退屈な日常。

そんな日々は突然に終わる。

「君、死んじゃったんだよね」

「はっ。」

突然の死亡宣告。

転生の誘い。

俺はずっとやりたい事があつた。

「最強の悪役になりたい」

なら、やろうぜ。

前例？矛盾？知るかそんなん、すべて粉碎してやる。

俺のやりたいことをすべて詰め込んだらこうなつた、反省していたらいいね。

目次

プロローグ

process 0 転生するからには

やりたいことをやるよね? 1

ジュエルシード編

process 1 再開そして同居ま

での自然な流れ。 8

process 2 新装備! 『バグ

ヴァイザードライ』 14

process 3 初変身! 今こそ審

判の時…… 21

process 4 はやてとの休日!

わくわくのショッピングタイム!

30

process 5 武装解禁! 仮面ラ

イダークロノス レベルⅢ 37

process 6 同盟結成。暗躍す

るクロノスとプレシア・テスタロッサ

45

process 7 すれ違う心……な

のはとフェイト 52

process 8 下される判決! 無

情なる審判 61

process 9 明かされる真実!

フェイト戦意喪失…… 68

process 10 打ち砕かれた心

となのはの思い！ ————— 76

process11 フェイトの覚悟

！復活するアリシア・テスタロッサ

83

process12 最終決戦開始！

邂逅するアリシアとフェイト ————— 91

process13 裏切りのアリシ

ア！時の庭園の崩壊 ————— 98

process14 一時の別れと誓

い！クロノスのプレゼント ————— 105

process15 ぶつかる姉妹の

思い。フェイトVSアリシア！ ————— 112

process16 遊びに行こう！

友人とのエンカウント！ ————— 119

闇の書編

process17 リリカルなのは

二期開始！クロノスの作戦！ ————— 126

process18 謎の忍者集団襲

来！仮面ライダー風魔の影！ ————— 133

process19 三つの戦い！そ

れぞれの勝利は誰の手に……？ ————— 141

process20 闇の書復活準備

開始。政宗の暗躍。 ————— 149

process21 ヴィータ攻略作

戦！ 政宗の苦悩。 ————— 156

process22 政宗の休日。秘

	密の資金源。	162
	process 23 恭也VSなのは	168
	！ぶつかり合う信念！	
176	日常編01 政宗とヴィータの休日	
	process EX 本日はバレンタイン！ 第○次チョコレート戦争！	
181	process 24 第二回戦、開幕	
185	！ 恭也の覚悟となのはの思い……	
	process 25 大乱戦！ 守護騎士VSなのは・フェイトVS政宗組。	
193	process 26 恭也の離反。決戦！ 恭也VS政宗！	201
	process 27 訪れる戦いの日。政宗の策略。	208
213	日常編 政宗と八神家の最後の夜	
	process 28 はやてに明かされる真実。闇の書編、最終決戦開始！	
217	process 29 それぞれの敵に立ち向かえ！ 闇の書の目覚め！	
225		

	process 30	姉妹の決戦!		275
	フェイトVSアリア!	——		234
	process 31	政宗敗戦!?	最	
	強VS最強!	——		243
	process 32	闇の書戦第二ラ		
	ウンド開幕!	政宗、共闘の提案?		
253	process 33	正義と悪の共闘		
	!	八神はやてを救い出せ!	——	260
	process 34	闇の書の闇VS		
	政宗・なのは同盟!	勝利を掴むのは!?		
267	process 35	闇の書編、決着。		
	process 36	新章開幕。始動		
	する政宗の最後の計画。	——		282
	process 37	始まる戦い!イ		
	リス・政宗同盟結成。	——		289
	process 38	ラヴリカ&風魔		
	VSヴォルケンリッター!	——		295
	process 39	新たな敵、グラ		
	ファイト・バグスター参上!	——		301
	process 40	結成、新たな		
	同盟。イリスに秘められたモノ。			
	Reflection / Detonati	ion編		
	政宗の最終目標。	——		

process 46	シグナム vs グ		
vs 風魔	—	342	
process 45	アリサ&すずか	332	
process 44	最高神の力		
イト	—	326	
process 43	アリシアとフエ		
究極のパラドクス!	—	321	
process 42	アリシア覚醒!	314	
生。暗躍する影、政宗ともう一つ……			

process 47	ヴァイータ vs ラ		
ラファイト	—	351	
ヴァリカ	—	359	

プロローグ

process0 転生するからにはやりたいことをやるよね？

「解かるように説明しろ……」

状況説明

気づいたら知らない部屋に座らされている。

人がいない事に気づく。

出る為に椅子を立とうとする。

椅子に拘束されてることに気づく↑今ここ

「やあー！」

突然、少年が回転しながら上から落ちてきて両足で着地した。猫かな？

「初めまして！ 十六夜政宗君、ボクは君たちで言うところのく神様？ ってやつだよ」

俺をここに拘束してるであろう少年（自称：神）は笑顔で両手で身振り手振りをつけて話していた。

「それでえ、なんで君がここに居るかって言うのと君って死んじやったんだよね」
「……え!？」

突然の死亡宣告、記憶はないけど……

「いや、死んだときの記憶っている？」

「そんなシヨッキングな記憶は要らん」

「でしょ？ だから消しといたってわけ」

突然のこいついい奴説浮上。

「そして、君は転生することができのさ！」

「転生？」

「そう、アニメとかマンガとかラノベによくあるでしょ？」

こいつは何でこんなにこっちの文化に精通してるんだろう……

「しかも、普通な要望からチートな能力まで何でもありな特典が三つまで貰えちゃいます！」

自称：神は顔を近づけて指を三本立てながら、目を輝かせていた。

何でこいつこんな楽しそうなの？

「さてと、特典の前に転生する世界を決めようか♪」

少年が指をパチンツと鳴らすとどこからか巨大ルーレットが登場する。

「君のどかいねえ、どんだけ漫画とかラノベとかよんでるのさ暇人?」

うっせ。友達すくなかったたんだもん……

「この中からランダムです♪ レッツスタートオ♪」

素晴らしい終わるとルーレットが回転します。

そして、少しするとルーレットの矢印は……

「はーい! 君が転生するのは『魔法少女リリカルなのは』の世界に決定ー♪」

自称:神はくるつと一回転して両手を広げた。

「それで、特典は決まった?」

「ああ」

「なにがほしいのか教えてー」

俺は片手を上げて指で三を表す。

「まず、ゲームドライバーとデュアル系以外のガシャットを全種類くれ。ムテキもありで」

「仮面ライダークロニクルはクロノスに変身できるマスター版? プロトもいる?」

「プロトはマイティアクションXのだけでいい、クロニクルはクロノスをメインにするからマスターで」

「おっけー。それじゃあ、ゲームでも時間停止を発動できるように設定しとくから手順

は後で教えるね」

「了解」

「他には？」

「それじゃあ…」

俺は立てていた指を一本折りたたみ今度は二にする。

「他人に完璧に変身できる能力が欲しい」

「完璧とは？」

「俺がいつもの口調で話しても相手や他の人にはその変身した人物の声色や口調で聞こ

えるぐらい」

「いいよー♪」

最後にということで俺の指はたたまれて立っているのは一本になる。

「俺の詳しいプロフィールを設定する権利を貰う」

「別にいいけど…：珍しいね。本当なら魔力とかそういうのを欲しがるのに」

「郷に入って郷に従っては原作たちの方に分があるに決まっているだろうなら基本戦闘は相手の知らない技術が一番いい」

「確かにそうかもね。でも、指名手配されちゃったらどうするの？」

「そのための変装能力だ。それに俺は原作キャラと一緒に過ごしても悪役でいるつもり

だ」

「?……どゆこと?」

神はいまいち理解できなかったのか頭をかしげている。

「つまりだ、俺は原作キャラとの関りを持つ事が悪役であることに大いに役立つわけよ」

「ああ、つまり。檀社長みたいなもんか」

「そういうことさ」

何十年も追いつけ続けた相手が友達だったときの絶望の顔は楽しみだなあ……

「それって勝ち続けること前提だよね」

「クロノスにガシヤット組み合わせまで使って私が負けると?」

「ないな」

「せやろ」

関西弁になってしまった……失礼、なってしまった。

「それで、プロフィールの設定は?」

「ああ。ゆってもそんな難しいことじゃない俺を八神はやての幼馴染にして欲しいのよ」

「問題ないよ♪ それじゃあ、君は幻夢コーポレーションの息子にしとく?」

「しとくか♪」

「おっけー♪」

やばい、楽しくなってきた。

「一人きりにもしとく？その方が家に転がり込みやすいよ？」

「五歳くらいに両親他界させて、原作開始のころに十歳でこっちに戻ってきた設定にしとくか♪」

「おっけー、おっけー♪ それならゲームドライバー持ってても不思議じゃないね」

「こっちの記憶ってどの位消えるの？」

「ほとんど消えないよ」

「よし、それじゃあ転生してくれ。原作粉碎するぞー！」

「おー！」

俺たちは右手を上げて、決意表明と気合入れた。

「ああ。後、ゲームドライバーでのポーズ機能だけクロノス変身時にガシャットが刺さってる状態でレバーを戻すとポーズ、開くとリスタート。ガシャットを抜いてから閉じたら変身解除。ガシャットを追加で刺してから閉じて開くとレベルアップもとい武装追加ができるよ」

「おう、長々とご苦労さん。読者も話なげえとか思ってたろうよ」

「ボクもそう思う」

俺等は何処に向かっていつているのか解からない言葉を使った。
なんでか解からんがいわないといけない気がしたからね。

「さてと、それじゃあ転生するよ」

「おう」

「それでは魔法の世界にいつてらっしやい♪」

「行つてきまーす♪」

とつても神様と仲良くなれた気がします。

気が合う友達つてこういう関係なんだろうな……

白い光に包まれて、俺はリリカルなのはの世界に転生した。

ジュエルシード編

process 1 再開そして同居までの自然な流れ。

海鳴市、オフィス街のとあるホテルの一室、その部屋のベッドで俺は目を覚ました。

「……転生成功ってわけか」

枕元には携帯（ガラケー）が置かれていた。

原作の時代的にスマホはなかったのだろう。

携帯を開き、マップを開くと現在地が『海鳴市』となっていた。

部屋を見渡すとスーツケースが一つとアタッシユケースが二つ置かれていた。

「中はどうなってるのかなっ」と

スーツケースを開くとそこには着替えはもちろん歯ブラシやシャンプーまで日常品がたっぷり詰まっていた。

「ということはこのアタッシユケースは例のものかな？」

二つのアタッシユケースを開くと中身は予想通りだった。

一つはゲーマドライバーと仮面ライダークロニクルガシヤット。

もう一つは大量のガシヤットが入っていた。

「すげえな、作中登場はもちろんだがナムコ系とかも入ってる。レジエンド系にガンバライジングもあるあいつ（神）エグゼイドも完走済みかよ」

その圧倒的なラインナップに少し感動していた。あいつ（神）まじ最高だな。性能チェックをしたかったがこんなホテルの一室でするわけにもいかんしな。

俺は手早くチェックアウトの準備を済ませて、チェックアウトした。

「さてと、まずははやてに会わないとな……」

あの後（精神空間にて）、俺の友人（神）との入念な確認で現在は原作開始は明後日と
なっている。

今日の内に八神家に滑り込まねば。

俺の記憶が確かならはやては良く図書館に行っているはず。

「この海鳴市の図書館は一つ、そしてここからはそう遠くない。さっさと行くか」

現在は平日の朝11時、十分図書館は開いてるはず。

俺は足早に図書館に向かった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

海鳴図書館、海鳴市で唯一の図書館。

ちなみに転生以前は俺も良く図書館にはお世話になった。

やることなかったからね……自分で言ってる寂しくなってきた。

俺は本を探しているように装いつつはやてを探した。

すると小説コーナーで頑張つて本を取ろうとしているはやてを発見した。

車椅子から少し浮いていたが全然高さが足りてなかった。

俺はそっちに向かって行き、はやての取ろうとしていた本を取った。

「あつ……」

取ろうとしていた本が取られてはやては少し情けない声を上げた。

「はい、どうぞ」

俺はその本をはやてに手渡す。

はやてはそれを受け取った。

「あの、ありがとうございます……って、政宗くん？」

「うん、久しぶり。はやて」

「政宗くん、久しぶりやね。もう三、四年振りや」

「もうそんなになるかな？」

「なるよ……政宗くんがいなくなつてほんとに寂しかったんよ」

「ごめん」

はやては悲しそうな顔をしてしまった。

それもそうだ、友達が突然いなくなつて本当に一人ぼっちになったら寂しいに決まっ

てる。

俺もそうだったように……

「政宗くんはなんでこつちに戻ってきたん？」

はやてはまだ少しさびしそうだつたが少しうれしそうに聞いてきた。

「ああ、はやてと同じになつちやつた」

「同じ？」

「俺を育ててくれてたお婆ちゃんが死んじやつてき……」

「!?……ごめんな。そんなこと聞いて」

「いいよ、当然の質問だしさ」

はやてはまた悲しい表情になつて俯いてしまった。

そろそろ本題を振るか。

「ねえ、はやて」

「……なあに？」

「はやての家の近くに空き家つてないかな？」

「え……」

はやては顔を少し上げて不思議そうにこつちを見てきた。

「近くに住めれば一緒にいられるからさ」

「一緒にいてくれるん？」

「当たり前だろ？ 友達なんだからさ」

はやては少し考える仕草を取った、おそらく空き家の心当たりを探しているのだろう。

「うちの近くに空き家はないなあ」

「そうか……」

「政宗くん、あのな……」

はやては少しためらいがちに俺の顔を見て言った。

「政宗くんがいいなら、一緒にうちに住まへんか？」

「え？……」

よし来た。

「いいのか？」

「ええよ、政宗くんなら別に」

「そうか……」

現在ははやては車椅子に座っており、俺より目線が低いのだ。それで俺の顔を見ているということは当然上目遣いとなる。

正直に言おう、破壊力抜群だった……萌え死にそう……

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

「はい♪ これからよろしくお願ひします♪」

はやては満面の笑顔になった。

そんなに喜んでくれるとは思っていなかったので嬉しかった。

「それじゃあ、一度家に戻ろう。政宗くんの部屋や準備もせなあかんしな♪」

「そうだね、案内してくれる？」

「ええよー♪」

俺が車椅子の取っ手を持って車椅子を押す。

はやての案内ではやての自宅に向かった。

はやては家に帰るまでずっとご機嫌だった。

俺が居なかった頃の話もしてくれて、その間に俺以外の友達もできたらしい。

当然、アタッシュケースのことも聞かれたがうまく誤魔化して事なきを得た。

こうして俺は当初の目的通り、八神家の居候となることができた。

process 2 新装備！『バグヴァイザードライ』

二人で楽しい昔話をしながらの帰路を歩いていくと八神家に到着する。

「はい、到着やで」

「おう、それじゃあ。失礼します」

「ただいまー」

俺が扉を開いてはやての車椅子を押して中に入る。

八神家ははやて一人にしては広すぎる家だった。

「それじゃあ、政宗くんの部屋を決めよか」

「おう、何処なら開いてるの？」

八神家にははやてのためにエレベーターが取り付けられていた。

俺はそれを利用してはやての車椅子を押してエレベーターにおり、二階に上がって行く。

「この部屋は私の部屋やから、この向かいの部屋はどうや？」

はやては自分の部屋の向かい側の扉を指差す。

「いいかもね、そうしようかな」

「はい、是非そうしてな♪」

「そうしますよ」

俺は自分に割り当てられた部屋のドアを開ける。

部屋にはクローゼットやカーペットが敷かれていた。

「元々、この部屋は私のお父さんの部屋なんよ」

「別に気にしないさ、この部屋にする」

「はい、それじゃあ準備してや私は下で昼ごはんの準備をするな」

「おう」

はやては自分で車椅子を動かして一階に行ってしまった。

「さてと……」

俺は部屋に入ってドアを閉める。

スーツケースの中身をクローゼットやタンスに物を仕舞っていく。

そして、二つのアタッシュケースはひとまずベッド下に潜り込ませた。

「性能チェックは明後日の夜か」

ぶっつけ本番という形になるが仕方ないな……

俺もはやてに続き、一階に降りた。

その後ははやてと一緒にはやての作った昼ごはんを食べた。

はやての手料理は俺の予想よりずっとおいしくて驚いた。

「おいしいよ」といったら「ありがとう」といって笑みを浮かべた。

午後は一緒に図書館に行き、本を選んだ。

俺はほぼ、はやての付き添いになっていたが特に気にしなかった。

その日は特になが起きるでもなく二人とも眠りに着いた。

次の日も特に珍しいことが起きる事なく過ぎていった。

転生から三日目、今日は原作開始日であり、はやてが夜まで定期健診に行くので送っていく事になった。

二日前と同じように俺が車椅子を押しして病院に向かっていた。

その道中のこと。

「なあ、政宗くんのお父さんは有名なゲーム会社の社長さんやったんやろ？」

「まあね」

「それなら、社長は政宗くんじゃないんか？」

「ああ、それね」

俺の父の話題だった。

俺の父である檀黒也は大手ゲームメーカー『幻夢コーポレーション』の社長だった。

ならば、その座は息子である俺に継がれるべきなのだろうがそれは叶わなかった。

「父の遺書でき、社長は社内から優れた人間を選定することって書かれてたんだよ」
「そうなんやな……」

はやては少し俯いてしまった。

悲しい俺の過去に共感してくれているのだろう。

それは嬉しかった、でもはやての悲しい顔は見たくなかった。

「大丈夫だよ、そのおかげではやてと再開できたんだからさ」

「え……」

はやては笑顔でそういった俺に少し困ったような表情を浮かべた。

「俺は会社を引き継ぐよりこうしてはやてと居るほうがずっと楽しいよ」

「そうなんや……私も政宗くんが居た方がずっと楽しいで」

「ありがとう、はやて。心配してくれて」

「そんなことないよ」

俺とはやては微笑みあった。

そんな話をしていると病院に到着した。

「それじゃあ、行ってらっしゃい」

「うん! 帰りは送ってもらおうから心配せんでな」

「おう」

はやては自分で車椅子を動かして病院に向かっていった。

俺ははやてが見えなくなるまで手を振り続けてから家に戻った。

家に戻った俺は今日から始まる原作への介入を考えていた。

はやては午後の八時に帰ってくる。

午後八時ならクロノスの能力を駆使すればおそろく余裕で間に合う。

問題は場所だ、原作開始の場所を完全に忘れた。

それを特定するには魔力反応を探知する為の装置を作成する必要がある。

市販品ではまず、無理だろうな……

どうしたものかと考えていると。

《やあ、久しぶりだね。正宗くん》

「この声は神（俺の友）か？」

《うん、こないだぶりだね♪》

「おう、それでどうした」

《困ってるようだからさ、少しだけ手助けしようかなって》

「助かる」

《そんなこと言うなよ友達だろ》

「当然だろう」

オレはカミとトモダチになった。▼

《これあげる》

そういつて机に赤黒い色がメインカラーのバグヴァイザーが召喚される。

《それには魔力探知機能を搭載してあるし、チェーンソーモードとガンモードも使えてドライバーとしても機能する。名づけて……》

「名づけて?」

《バグヴァイザードライ!》

《なんとバグヴァイザードライはバグヴァイザーの能力がすべて引き継がれてまーす♪》

「そいつはすごい……」

バグヴァイザーの能力、バグスターウィルスの散布と培養。

死のデータの収集にバグスターの収納・捕獲。

うまく使えば目的である最強の悪役も夢ではない。

《兵士達を集めるのは大変だよ? 適合でもしたら》

「問題ない。数をこなせばいいだけのことだし、適合したら殺すかこちら側に引き込む」

神の心配など俺にはどうでもいいことだった。

《バグスターウィルスの生成には対応するプロトガシャットが必要だから渡しとくね》

親友（神）がそういうと俺の机にアタツシケースが一つ召喚される。

《これは予備ね。ないと困るときもあるだろうからね》

また新しいアタツシケースが召喚される。

二つのアタツシケースを開けると一つは全種類のプロトガシヤット。

もう一つは予備のバグヴァイザードライ二機だった。

《味方なり適合者なりにでもあげなよ♪》

「そうする」

《そんじゃーねー♪》

神との通信が切れた。

俺はバグヴァイザードライを手取る。

「予想以上にうまく行きそうだな……」

そうして俺はバグヴァイザードライを机に置き、今夜の対決に備えて作戦を立て始めた。

process 3 初変身!今こそ審判の時……

神からバグヴァイザードライを受け取った。その日の夜……

ピツ! とバグヴァイザードライパッドモードの画面に海鳴市のマップが表示され、赤い点が出現する。

現在地が緑の矢印で表示されており距離もわかった。少し遠いな……

「さて、行くか」

俺はゲームドライバーとバグヴァイザードライ、仮面ライダークロニクルガシャツを持って家を出る。

玄関先のスペースでゲームドライバーを装着する。

俺は右手に持った仮面ライダークロニクルガシャツの起動スイッチを押す。

《Kamen Rider Chronicle》

するとガシャットは俺の手を離れて、飛行しゲームドライバーの右側スロットの上で停止する。

「変身」

俺がレバーを持つとクロニクルガシャットがドライバーに装着される。

それと同時に俺は手に持ったレバーを勢い良く展開する。

背後に時計型のビジョンが俺の上に緑色の画面型ビジョンが投影される。

《ガシャット！ ガッチャーン！ レベルアップ！ 天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！ 今こそ時は極まれり！》

緑色の雷のような閃光とともに画面型ビジョンが俺の頭から足にかけて通過して閃光を放ち消滅する。

閃光が晴れると変化した姿が現われる。

俺は仮面ライダーダークノスに変身を完了する。

バグヴァイザードライは右手に装着する。

《ガッチャーン…》

「さあ、審判を始めよう」

俺は魔力反応の元に向かった。

◆ ◆ ◆

《Protection》

影のような生命体の突進はなのは桜色の障壁よって阻まれ、吹き飛ばされる。

影は三つに分裂して辺りの建物の屋根に着地する。

影は全速力で家の屋根を飛び移りながら逃走する。

それをなのはは飛行しながら追跡する。

「このままじゃ逃げられちゃうー!」

大技で仕留めようとなのはがレイジングハートに声をかけようとする……

ドゴンツ!という鈍い音が響く。

すると影たちが突然、一箇所に吹き飛ばされる。

なのはが影たちの進行方向だった場所を確認すると其処には、仮面ライダークロノスが立っていた……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

俺はポーズを使用し、影の怪物を三体とも蹴り飛ばした。

だが、影たちは起き上がる。

俺は目の前のなのはを無視して影に向かう。

俺が勢い良く地面に着地するとアスファルトの地面にクレーターができる。

「さあ、これより貴様らの運命をジャッジする。せいぜい足掻けよ!」

影の表情が恐怖に歪む、そして逆方向に逃走を図る。

「無駄なこと……」

俺はゲームマッドライバーのレバーを閉じる。

《Pause》

その機械音とともにすべての時間が停止する。

「さあ、それでは審判を執り行う」

俺は右手に装着したバグヴァイザードライのボタンを押す。

《キメワザ…》

その後、再びボタンを押す。

《Critical Judgment》

右手を払いながら、バグヴァイザードライから三発のエネルギー弾が放つ。

「貴様らは本日を持って絶版だ」

俺は影に背を向けて言い放ち、ドライバーのレバーを展開する。

《Restart》

停止していた時が動き出す。

三発のエネルギー弾は影たちに命中し、影たち一撃で消滅させる。

「さて、ジュエルシールドを回収するでしょう」

俺は振り返り、影たちの居た場所に移動しようとするが……

「待つてくださいい！」

いきなり背後から声がかけられる。

再び振り返るとそこにはなのはが居た。

バリアジャケットはいまだに展開されている。

「あなたは一体だれですか?」

「私か? 私の名は『仮面ライダークロノス』だ。覚えておきたまえ」

なのはは左手を差し出してくる。

「ジュエルシードを私に渡してくれませんか?」

「断る。君は他人の利益を横取りする気かね?」

俺はなのはの提案を拒絶する。

「困ります!」

なのはは困惑の表情でこちらを見ている。

「貴様らではこれを封印するだけだろうか? 私ならもつと有効に使える」

「有効に?」

なのはが首を傾げる。

「そうだ、封印するだけよりもずっと良いだろうか?」

なのはは俯いてしまう。

少ししてなのはが口を開く。

「じゃあ、一つ聞かせてください……」

「なにかね?」

なのは顔を上げる。

その顔にはさっきの迷いは消え失せていた。

「あなたはそれを使ってなにをするんですか？」

「……………」

俺はあえて何も言わなかった。

それによつて望んだ結果を待った。

なのはからは期待通りの答えが返ってきた。

「やっぱり、あなたにはそれは渡せません！ 返してもらいます！」

なのはがレイジングハートを構える。

「ふふふ……………ははっ……………」

「なにがおかしいんですか？」

「いや、さっきまで守られてばかりだった少女がずいぶん強気だなど思っただけさ」

「私のこと知ってるんですか？」

なのはは少し警戒を強めたようだ、顔が引き締まっている。

「ああ、高町なのは。小学三年生で九歳の少女。実家は喫茶店翠屋で……………つとこれくら

いにしておこうか」

なのはは驚いた表情を浮かべていた。

当然だ、知らない人が自分のプロフィールをここまで知ってたら俺もこうなる。

「なんで、そんなに知ってるんですか？」

「秘密だ」

「そろそろ、時間だ。失礼するよ」

俺はゲーマードライバーのレバーを閉じる。

《Pause》

再び時間が停止する。

「さてと……」

俺は影たちを葬った場所に移動する。

其処にはジュエルシードが一個落ちていた。

それを拾い上げて、なのはの方を向く。

「これはプレゼントだ。お返しは結構」

俺はバグヴァイザードライをチェーンソーモードにする。

《ガツチャーン…》

そして、ボタンを押す。

《キメワザ…》

再びボタンを押す。

《Critical Sacrifice》

俺は右手を縦に払う、するとチェーンソーの刃部分から丸鋸状のエネルギー弾が放たれる。

それは、なのはに衝突して反応は停止する。

「それでは、また会おう」

俺はそういつて自宅に帰還した。

◆◆◆◆◆

家に着いた俺はゲームドライバーのレバーを展開する。

《Restart》

停止していた時間が再開する。

俺はガシャットを引き抜いて、レバーを閉じる。

《ガッチョーン》

変身が解除され、俺は元の姿に戻る。

俺はさっさと部屋に戻ってゲームドライバーとガシャット、バグヴァイザードライを隠す。

時間を確認すると、時計は7時な5分を指していた。

「危なかったな……」

◆◆◆◆◆
「きゃああああっ!」

クロノスがポーズを解除すると、なのはにエネルギー弾の攻撃が放たれる。

なのははいきなりの攻撃に耐え切れずに地を転がり、バリアジャケットは解除される。

「なのはっ!」

何処かに隠れていたユーノがなのはに駆け寄る。

「ユーノくん……今のは?」

「ボクにも解からないよ。あんな攻撃、はじめて見た」

ユーノは辺りを見渡す。

「ジュエルシールドも持っていかれたし、クロノスも突然消えた……」

「そう……なんだ……」

「えっ! なのは!? なのはっ!」

なのはは気絶してしまった。

「仕方ないか、まだ慣れてないけど……」

その後、なのははユーノによって家に帰された。

次の日、この事件は犯人不明の事件として海鳴市に響き渡った。

process 4 はやてとの休日！わくわくのシヨツ
ピングタイム！

クロノスとなのはの初邂逅から早五日が経ち、俺はあれから二つのジュエルシードを回収し所持数は三つとなった。

今日は日曜日、原作どおりならまたジュエルシードが出現するはずだ。

「さて、この五日で十分にクロノスのデータは取れた。あとは……」

俺はアタツシケースを開く。

その中には無数のガシヤットが入っている。

その一つを手取る。

「武装との適合を確認しなければな……」

俺は薄く笑みを浮かべた。

今日も引導を渡してくれる……高町なのは。

「政宗ー！ 飯やよー！」

「解かったー！ 今行くー！」

俺は嬉々として一階のはやての元に向かった。



「ねえ、政宗は今日予定ある?」

はやては最近になって俺のことを『政宗』と呼び捨てにするようになった。

「特にないぞ、はやての頼み事なら他の予定は全てキャンセルするけどね」

「そんな悪いよ……」

「気にするな、俺のはやての優先順位は何者よりも高いよ」

俺が笑顔でそういうとはやては少し顔を赤くして俯いてしまった。

「それで、俺に何か言おうとしてなかった?」

「うっうんっ! えっとな」

はやては慌てて顔を上げて、話を再開した。

「今日、一緒に買い物でもどうかなって……」

「構わないよ」

困ったな……今日の戦闘をどうするか……

何とか抜け出そう。

「それじゃあ、これ食べたらいこうな!」

「うんうん」

それだけ言っただけで朝ごはんを済ませた。

◆◆◆◆◆
「はやて、まだかな」

俺は今一人で玄関先に立っていた。

朝ごはんを済ませた後にはやてが「ちよつと待ってて」といつて部屋に籠ってしまつたからだ。

その後に俺も懐にゲームドライバーとガシャットホルダーにガシャットを二本挿し、バグヴァイザードライも持っていた。

はやてが部屋に籠ってから既に十五分が経過している。

大丈夫だろうか……

「お待たせや」

はやての声が聞こえる。

「ああ、どうし……た……た……」

俺は驚きで声を失った。

なぜかと言うと朝ごはんの時は気の抜けたパーカー姿だったはやてが今は……

白のタンクトップタイプのワンピースを着ていた。

いつものお茶目な雰囲気ではなく清楚な雰囲気を漂わせる目の前の少女（幼馴染）に俺は見惚れてしまった。

「どうやらか……?」

「ああ……」

「やっぱり似合っていないんやろか……?」

はやては少し落ち込んでしまう。

それで俺は意識を取り戻した。

「いやっ! 見惚れて声が出なかつただけだから! 似合すぎて……」

「ほんまに?」

「うん! 本当に!」

「それなら良かった♪」

はやては満面の笑顔になった。

これがまた可愛いかった。

「それじゃあ、行こうか。いつも通り車椅子を押すよ」

「お願いな♪」

「おう」

そういつて俺とはやては近場のショッピングモールに向かった。

◆◆◆◆

「ショッピング♪ ショッピング♪」

はやては家をでてからずつと嬉しそうにしている。

「そんなにシヨツピングがしたいなら一人でも行けばいいのに」

「政宗と一緒がええの！」

「そう……」

語気の強いはやての一言に少し怯んでしまった。

「今日は一緒に楽しもうな♪」

「うん」

はやてはとても笑顔でそういった。

俺は途中でジュエルシードが出現することを危惧していた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「政宗と一緒にシヨツピングは楽しいなあ……♪」

午前中のシヨツピングを満喫した俺とはやてはシヨツピングモール内のカフェで休

息を取っていた。

はやてはドリンクを嬉しそうにストローで吸っている。

「はやてが楽しそうで嬉しいよ」

「うん♪ ほんとに楽しいよ♪」

はやては声を弾ませながら、大きく頷いた。

「午後はどうするの?」

「午後は一緒に本屋巡りはどうや?」

「いいかもね」

はやては笑顔を持って応答した。

カフェで食事を済ませ、午後の本屋巡りを開始した。

◆◆◆

本屋巡りを開始して、三件目に差し掛かった所でバグヴァイザードライに反応がある。

「どうしたん?」

「ああ、済まない。はやて先に行つてくれ、少し急用ができた」

「?……うん、わかった」

はやてと別れ、俺は人気の少ない路地裏に入る。

バグヴァイザードライを取り出すと画面に反応があつた。

強力な反応が二つ。

一つは停止しており、一つはそれに向かつていく。

高町なのはとジュエルシードだろう。

俺は隠し持っていたゲームマドライバーを取りだして装着する。

さらに仮面ライダークロニクルガシャットをホルダーから取り出す。
そして、そのまま起動ボタンを押す。

《Kamen Rider Chronicle》

俺の手を離れ、ガシャットは浮遊し、スロットの上に移動する。

「変身」

俺がレバーを握るとガシャットが挿入され、レバーを展開する。

《ガシャット！ ガッチャーン！ レベルアップ！ 天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！ 今こそ時は極まれり！》

仮面ライダークロニスに変身を完了をした俺は反応の元に向かった。

process 5 武装解禁!仮面ライダークロノス
レベル+III

反応をキャッチしてから数分が経って、俺も現場に到着する。

すると其処には既に交戦を開始した高町なのはとジュエルシードが居た。

「ほう、樹木型か……随分と根を張っている」

俺が到着した時にはもう既に広範囲に根を張っていた。

「さてと……」

俺は立っていた家の屋根から飛び降り、着地する。

するとなのはが音に気づき、こちらを見る。

「あなたはクロノス!」

「数日ぶりだな、高町なのは。このジュエルシードは私が貰う」

「そんな事はさせない!」

《Divine Shooter》

なのはがこちらに向かって攻撃してくる。

桜色の誘導弾が三発こちらに向かってくる。

俺は一度の回し蹴りですべて消滅させる。

「この程度か？ 拍子抜けだな」

俺は右手に装着しているバグヴァイザードライからビーム弾を放つ。

直線的な軌道を描き、ビーム弾は樹木型の本体を穿つ。

だが、たいしたダメージにはならなかったようですぐに再生した。

「やはり、この程度では無理か……」

俺はホルダーからガシヤットを一本引き抜く。

「本当に丁度いい、貴様には実験体になってもらおう」

俺は引き抜いたガシヤットの起動ボタンを押す。

《Shakariki Sports》

空中にゲームスタート画面が投影される。

タイトルは『シャカリキスポーツ』。

ジャンルはエクストリームスポーツゲーム。

すると、ゲーム画面から自転車が登場する。

「自転車!？」

突然出現した自転車になのはは面食らっていた。

シャカリキスポーツガシヤットを左スロットに挿入する。

《ガシヤット!》

「武装装着、レベル+III」

そういつて、俺はゲーマードライバーのレバーアクションを行う。

《ガツチャーン! レベルアップ! 天を掴めライダー! 刻めクロニクル! 今こそ時は極まれり! アガツチャ! シヤカリキ! シヤカリキ! バッド! バッド!

シヤカつと! リキつと! シヤカリキスポーツ!》

すると、ウインドウから出現した自転車が変形し、クロノスに装着される。

「これぞ、私にのみ与えられし力! 名づけて仮面ライダークロノススポーツクロニクルゲーマーレベル+III!」

俺は両手上げてを天を仰ぐ。

「さあ、貴様には実験体になつてもらおうか」

俺は右側の車輪を取り外し、樹木型に投擲する。

車輪はブーメランのような起動を描いて樹木型を切り裂く。

そして、そのまま俺の元に戻ってくる。

俺はそれを右手でキャッチした。

「ほう、この攻撃は有効か……ならば……」

「ダイバイーン……」

いつの間にかなのはがデバイス、レイジングハートに魔力が収束させていた。
「つち……」

それを見た俺は後方に大きく退避する。

「バスターアア!!!」

桜色の砲撃が樹木型を穿ち、一撃で消滅させる。

その余波がこちらに来るがなんとか持ちこたえる。

「なんとこの威力……」

俺は余波が止むとすぐに樹木型の消滅した地点に向かう。

そこにはやはり、ジュエルシードが転がっていた。

「頂くぞ」

俺はそれを回収する。

すると直ぐになのが飛んでくる。

「今度こそは返してもらいます」

「やってみるがいい」

なのはがレイジングハートを構え、俺が車輪を両手に取って構える。

「デバイスシューター!」

《Divine Shooter》

「シュートッ!」

桜色の弾丸が三発こちらに向かってくる。

「その攻撃では無理だと言ったぞ」

車輪を盾にその攻撃を受ける。

そのまま右手の車輪を投擲する。

車輪はなのに向かっていく。

「ていつ!」

なのははレイジングハートでそれを受ける。

「甘い」

俺は強く踏み込み、なのはに向かって飛び蹴りを放つ。

「っ!」

《Protection》

桜色の障壁がとび蹴りを受け止める。

「ふんっ!」

空中で停止した俺はそのまま空いていた左足でバリアを蹴り砕く。

「なっ!?!」

「この程度か?」

俺は右手でなのはの胸倉を掴み、投げて飛ばす。

なのはは勢いよく地面に叩きつけられる。

俺は近くに着地した。

「弱すぎる……この程度では私は絶対に倒せはしない」

俺はなのはを掴み上げる。

「あつ……つつう……」

「消えよ、目障りだ」

俺は満身創痍のなのはに回し蹴りを放つ。

「きゃああ!!」

なのはは建物に衝突する。

「さてと……」

俺はジュエルシードを眺める。

「これでジュエルシードが四つ……」

「これだけあればよかろう……」

「協力感謝するよ。高町なのは」

「そう言つて俺は立ち去ろうとする。」

「待て!」

誰かが俺を呼び止める。

振り向くと其処には一匹のフェレットがいた。

「クロノス、あなた一体何者なんだ？」

フェレットは悠長な日本語を話す。

「私は仮面ライダークロノスだ。それ以上でもそれ以下でもない」

「あなたの攻撃に魔法の類の反応は感じられなかった。一体なんなんだお前は……」

「それを話すほど私も暇ではない。消えよ」

バグヴァイザードライのビーム弾をフェレットに放つ。

そこにフェレットの姿はない。

「逃げたか……まあよかろう」

それだけ言って俺は立ち去った。

◆ ◆ ◆

「お待たせ！ はやて」

「遅いで、政宗。何処行ってたん？」

「ちよつと、色々」

「なんやそれ……」

はやては少し不機嫌そうに言った。

その後、一緒に居ることので何とか機嫌を直してくれた。
俺はそんなはやてとの休日を再会した。

process 6 同盟結成。暗躍するクロノスとプレシア・テストロッサ

樹木型との戦闘から数日後……

時の庭園……とある女性が主の時空船の名だ。

俺は今、その中で歩いていた。

なぜかと言うとこの時空船の主の女性。

『プレシア・テストロッサ』とある交渉をするためだ。

ちなみに今は変装能力で大人に変装している。(ほぼ檀正宗)

しばらくして明らかに異質な部屋に到着する。

その部屋は研究室といった様子だったが中でも異質なものは……

部屋のある巨大な培養槽に入れられた少女だった。

少女は十二歳程の金髪の少女。

少女には生気は感じられず死亡しているようだ。

その部屋に目的の女性はいた。

「……誰かしら」

「初めまして、プレシリア・テストロッサ様。私はクロノスと申します」

プレシリアは興味無さげにこちらを見ていた。

「本日は是非プレシリア様と協力関係を築きたく」

「興味ないわ、帰ってくれる？」

プレシリアは背を向ける。俺はニヤリと笑みを浮かべる。

「アリシアさんを蘇らせれるとしてもですか？」

「なんですって……」

プレシリアが驚いたように振り向く。

「契約はこちらを受け取って頂きます」

そういつて俺は持っていたアタッシユケースを開く。

その中にはジュエルシールドが四つ入っていた。

プレシリアがこちらを見る。

「……話を聞くわ、掛けて頂戴」

「それでは失礼して」

それを聞いて俺はプレシリアの前の席に腰掛ける。

「それで、あなたは一体なんのために私に協力したいのかしら？」

「その前に改めて自己紹介を、私はクロノスと申します」

「プレシア・テストロッサよ」

俺はアタツシユケースを机に置いて開く。

「まずはこれを」

「ええ」

俺がアタツシユケースを差し出すとプレシアがそれを受け取る。

「これで契約完了です。それでは、お話します」

俺は話し始める。

「死者蘇生の秘術、私はそれ術を知っています」

「なんですって……」

プレシアの顔色が変わる。

「ですが、そのためにはジュエルシードほどの魔力体でも全て集めるほどの魔力が必要です」

「そう、それにしてもジュエルシードを集める必要があるのね」

俺はバグヴァイザードライのパッドモードを机に置き、データを開く。

「現在のジュエルシードの所在は私がさきほど渡した四つ、あなたの兵が八個。そして我々の障害となる高町なのはと管理局が合計して五つです」

パッドモードの画面にはジュエルシードの所在がわかりやすく表示されている。

「残る後四つと取られた五つを回収する必要があります」
「ええ」

「そのためにはまずお互いの戦力を確認しましょう」

俺はバグヴァイザーを仕舞う。

「私の戦力は私のこの身のみです」

「私の方は娘のクローンとその使い魔だけよ……」

俺は再び笑みを浮かべる。

「兵が二人もいれば十分ですよ。それよりその兵達は？」

「今はジュエルシードの回収に向かわせたわ」

「そうですね……」

そういつて俺は立ち上がる。

立ち上がった俺は培養槽に近づく。

「この子が娘さんですか？」

「ええ……今年で十七歳になるわ」

「そうですね。さぞや、蘇らせたいいことでしょう」

マジか……十七歳には見えん。

そんな事を考えながら、俺はプレシアの方に振り返る。

「私と協力すればその望みも果たされます」

「……いいわ、あなたに手を貸そうじゃない」

「結構、それでは今日はここら辺でまた会いましょう」

俺はその場を立ち去った。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「さてと…」

俺は変装を解除した。

「計画通りに進んでいる。全ては俺の計画通りだ」

するとバグヴァイザーを確認する。

「まだやるか。良いだろう何度でも潰してやろう」

俺は反応のある場所に向かった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

到着すると先ほどの少女、アリシアに良く似た少女と高町なのはが交戦していた。

その近くには巨大な猫がいる。

「あれがジュエルシードか……回収する」

ゲームドライバーを装着する。

《Kamen Rider Chronicle》

ガシャットが浮遊し、俺がレバーを掴むと同時にガシャットが挿入され、即座にレバーを展開する。

《ガシャット！ ガツチャーン！ レベルアップ！ 天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！ 今こそ時は極まれり！》

閃光が走り、俺は変身を完了する。

《ガツチャーン…》

バグヴァイザードライを装着し、猫の元に向かう。

猫はこちらを向くと毛を逆立てて、警戒態勢を取る。

「猫風情が私に歯向かうな」

《キメワザ…》

俺はバグヴァイザーのキメワザを発動する。

《Critical Sacrifice》

腕を払うと丸鋸型の光弾が猫に命中する。

「ニャアアアア!!」

猫が悲鳴を上げる。

それと同時に猫は小さくなっていき、ジュエルシードが飛んでくる。

俺はそれを片手でキャッチする。

それに気づいたのか高町なのはがこちらを向く。

「クロノスっ!!」

「余所見をしてる場合かい?」

「っ!?!」

アリシア似の少女がなのはを攻撃する。

それで昏倒したなのはが落下していく。

すると先ほどの少女がこちらに向かってくる。

「それ、私にください」

「良からう。だが、君と話がしたい」

「……解かりました」

俺が着いてくるように促すと少女は迷わずに着いてくる。

「ごめんね……」

少女がわずかにそう言ったように聞こえた。

process7 すれ違う心……なのはとフェイト

俺の案内で廃ビルに到着した俺とアリシア似の少女、フェイト。

俺はそのまま立っていたがフェイトは座り込んでしまう。

「それで話というのは……?」

座り込んだ状態でフェイトは口を開く。

「私は君の母であるプレシアさんと同盟関係になったのですね。挨拶でもと思ったのさ」

「母さんと……?」

「そうだ」

フェイトは少し驚いたような口調で言った。

「これからは私の指示には従ってもらおう」

少し警戒した様子でフェイトはこちらを見ている。

「それだけですか?」

「そうだが?」

「帰ります」

フェイトはふらふらと立ち上がり、立ち去ろうとする。

「もう少しゆっくりしていけばよかろう」

「いえ、家に家族が待っているのだ」

それだけ言つてフェイトは飛び去つていった。

「……まあいい、全ては私の思い通りに動いている」

俺も自宅に帰還した。

◆ ◆ ◆

「遅いつ！」

「すみませんっ！」

家に帰つた俺を待っていたのは怒つたはやてだった。

「もう七時まわるよ！ なにしてたん！」

「いえ……あのですね散歩をしていたら迷いました……」

「余裕を持つて行動しないからや！ 今日政宗はご飯抜き！」

「えーっ！ そんな殺生な！」

「自業自得や！」

はやては怒つてリビングに戻つていった。

今度ちゃんと謝つておこう……

俺はご飯を諦めて自室に戻つた。

「さーてと」

俺は机の上のパソコンを起動する。

パソコンには機械が繋がれており、その機械には真つ白なガシヤットが刺さっていた。

その近くにはガシヤットギアデュアルと二機目のゲーマドライバーが置かれていた。

俺は猛然とパソコンのキーボードを叩いていく。

「もう少し……もう少しなんだ……」

俺はキーボード叩く手を止める。

「データが足りない……そうだ……ハハハ」

俺は顔を抑えて笑い出す。

「ハーツハハハ!! そうだ! この手があつたではないか!」

俺はアタツシケースからプロトガシヤットを一本取り出す。

「データが足りないなら取ればいい……それだけだ」

その後、はやてに「うるさいっ!」とまた怒られたのは別のお話。

◆◆◆

次の日、俺ははやての機嫌取りに必至だった。

「ごめんって……」

「ぶいっ」

はやては相当に怒っていて前のようには機嫌が直らなかつた。

「ゆるさへんよ」

「近いうちに一緒に出かけてあげるから」

「ほんまか？」

「うんうん」

はやては呆れたようにしていたがどこか嬉しそうに

「じゃあ、今回は許したげるけどな」

「ビシッ！ といった音が聞こえるように俺を指差す。

「今度からはできるなら必ず六時前には戻ってくるぞ！ ええか！」

「おう……」

終始押されっぱなしだったが何とか許してもらいました……

◆ ◆ ◆

次の休日、その間は特になにがあるでもなく過ぎていった。

その日の夜、夕食を済ませて研究をしているとバグヴァイザーが強力な魔力反応を捕らえる。

「はあ、面倒な」

俺は窓から脱出し、屋根の上に乗る。

ゲームドライバーを装着し、ガシヤットの起動ボタンを押す。

《Kamen Rider Chronicle》

いつも通りの手順で変身する。

《ガシヤット！ ガツチャーン！ 今こそ時は極まれり！》

変身した俺は反応の元に向かった。

到着したが其処には既にフェイトと使い魔であるアルフがおり、封印を完了していた。

「つち……無駄足か」

その様子を見て撤収しようとするが。

「あなたは?」

「アルフは私の使い魔……」

距離が離れていたのが断片的にだがフェイトとなのはの会話が聞こえる。

それを聞いて俺は振りかえる。

「これはチャンスだな」

俺は草むらから姿を出した。

「あなたは……」

「クロノスっ!？」

「久しぶりだね。君はユーノ・スクライアだったかな？」

フェレットことユーノは驚愕の表情を浮かべる。

「なぜ僕の名前を……」

「余所見をしてる場合かい?!」

「危ないっ!」

ユーノのバリアがアルフの攻撃を防ぎ、強制転移で消える。

「……ジュエルシードはどうした？」

「……」

フェイトは右手のジュエルシードを見せる。

「結構、それに丁度いい」

俺はなのはを指差す。

「君の力で奴を始末しろ」

「わかりました……」

フェイトは臨戦態勢を取る。

「私は話し合いで解決したいな」

「言葉だけじゃきつと何も変わらないし、伝わらないよ」

フエイトがそういうと二人は上空に上がっていく。

「さてと、私は見物するでしょう」

俺はホルダーからガシャットを取り出し、起動ボタンを押す。

《Jet Combat》

空中にゲーム画面が投影される。

その中から謎の機械が出現する。

そのガシャットをゲームドライブ挿入し、レバーアクションを行う。

《ガシャット！ ガッチャーン！ レベルアップ！ 天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！今こそ時は極まれり！ アガツチャ！ ジェット！ ジェット！ イン・ザ・スカイ！ ジェットジェット！ ジェットコンバット！》

機械が俺の頭を食べるように口を開き、そのままアーマーに変化する。

「私も上空で見させてもらおう」

俺はジェットコンバットアーマーで飛翔する。

空中では既に二人の戦闘が始まっていた。

二人の激しい魔力弾の打ち合いはこちらにもたまたま流れ弾が飛んできた。

「デイベイン……」

「サンダー……」

二人が止まり、それぞれ魔力を収束させていく。

「バスターー！」

「スマツシャーー！」

二つの魔力砲撃が衝突する。

拮抗状態に入り、硬直状態に入ると思われたがなのは側のブレイカーの威力が上昇し、フェイトのスマツシャーを打ち抜く。

煙が撒き散らされて決着と思われたがフェイトが上空からなのはに向かって飛行する。

フェイトのデバイスが鎌のような形状に変化し、なのはの首にかかると……
フェイトの鎌がなのはの首筋で停止する。

するとなのはのデバイス、レイジングハートがジュエルシードを排出する。

「レイジングハート!？」

「きつと主人思いのいい子なんだろうね……」

フェイトはそれを回収して立ち去ろうとする。

「待ってー！」

「なこ?」

なのはがフェイトを呼び止める。

「あなたの名前を教えくれる？」

「私はフェイト……フェイト・テスタロッサ」

「フェイトちゃん……私は……」

フェイトはその答えを聞かずに立ち去った。

俺は立ち去るフェイトを即座に追跡した。

process 8 下される判決!無情なる審判

フェイトを追跡してきた俺はフェイトの拠点でフェイトを問いただしていた。

「なぜ、奴にトドメを刺さなかった?」

「必要がないと思ったから」

「それを判断するのはこの私だ、勘違いをするな」

俺はフェイトの頭にバグヴァイザードライの銃口を向ける。

「まあまあ、クロノスさん。今回でフェイトがあのがキンチヨを倒せることは証明でき

たんだから良いじゃないか」

アルフがそう言ってクロノスを制止する。

「…まあいい、が次はない」

そういつて俺は立ち去った。

◆◆◆

《ガッシューン》

家に帰還し、俺は変身を解除する。

「…もう、奴らに利用価値はないな」

それだけ言って床に着いた。

その次の日……

俺は再び、時の庭園に来ていた。

初めてきたように変装をしている。

そして、研究室に到着する。

「あら、また来たのね」

「ああ」

俺はそのまま歩いていき、椅子に腰掛ける。

「随分とご立腹のようね……」

「貴様の娘のクローンとその使い魔はもはや利用価値はない」

プレシアは俺のほうを向く。

「そう……どうするのかしら」

「次の様子を見て、私の方で判断する」

「ええ、フェイトは所詮『模造品』よ。いつかは処分してたわ」

俺はそれを聞いて立ち上がる。

「代わりの作戦はまた今度に私の方から」

「ええ」

俺は立ち去ろうとして足を止める。

「せめてもの選別に私が真実を教えてやるとしよう。構わんよな?」

「別に構わないわよ」

俺は満面の笑みを浮かべて時の庭園を後にした。

◆◆◆◆◆

夕方になり、バグヴァイザードライが魔力反応をキャッチする。

「さあ、最後のチャンスをものにできるかな?」

俺も現場に向かった。

俺が現場に到着するともう既にフェイトとなのはの戦闘が開始されていた。

この前と打って変わって高速移動と中距離射撃魔法を駆使して互角に戦っている。

だが、俺が気にしているのは其処ではない。

そして、確信した。

『フェイト・テストロッサ』は『高町なのは』を『処分』しないと。

それだけで十分だった。

「フェイトちゃんっ!」

「言葉だけじゃなにも変わらないって言ってたけど、話さないと、言葉にしないと伝わらないこともきつとあるよ!」

「私は初めはユーノ君のお手伝いだったけど、今は違う！ 私の意志で戦ってる！ フェイトちゃんは何で戦ってるの!？」

「私は……」

「フェイトっ!」

なのはの問いかけにフェイトが答えようとするするとアルフがそれを遮る。

「私らの最優先事項はジュエルシードだ!」

「……うん」

アルフの一言でフェイトはジュエルシードに標的を移す。

「待って!」

それを見てなのはもジュエルシードに向かう。

なのはとフェイトの愛機が同時にジュエルシードを捉える。

その瞬間に凄まじい衝撃と閃光が結界内を包む。

閃光が晴れるとなのはとフェイトの愛機には亀裂が走り、破損していた。

だが、未だにジュエルシードは鼓動を打つ。

フェイトは自らの愛機を待機状態にして素手でジュエルシードを包み込む。

「止めなよ、フェイトッ!」

アルフが制止しようとするもフェイトはそれを無視して素手で封印をしようとする。

「鎮まれ…鎮まれ…」

フェイトの手から光が溢れる。

光が鎮まつていくと手には傷が付き、フェイトは気絶してしまう。

「フェイト!」

気絶したフェイトをアルフが抱き抱える。

「……………」

アルフはなのは達に怒りの視線を向け、立ち去った。

俺はそれを見てから静かに立ち去った。

◆ ◆ ◆

翌日、俺はまた、時の庭園を訪れていた。

「アアアアツ!!」

するとフェイトの悲鳴が聞こえる。

悲鳴が聞こえる方に行くとか拷問部屋のような部屋に着く。

そこには張り付けにされたフェイトと鞭を持ったプレシアがいた。

「あら、来たのね」

「ああ」

俺は近くの椅子に座る。

すると机の上にお菓子の入った箱がおかれていた。

「食べていいわ」

「それでは遠慮なく」

俺は箱を開けてお菓子を食べ始める。

「それは…」

「黙りなさい」

「ッ!!」

プレシアがフェイトに鞭を放つ。

フェイトの顔が苦痛に歪む。

しばらく鞭打ちが続き、終わった頃にはフェイトの体には痛々しい傷が無数にできていた。

「行くわよ」

「ああ」

俺とプレシアはフェイトを放置して去っていった。

◆◆◆◆◆

「それでどうするのかしら?」

「処分だ。当然だろう」

「そうね」

プレシアは咳をする。

その手の平には血塗られていた。

「もう時間がない……」

プレシアはふらふらと立ち上がる。

「作戦を伝える。まずはこの時の庭園を暴走させ、対象を呼び寄せる。その後、私とプレシアの兵で確実に潰す。時の庭園がなくなるが……」

「わかったわ、別に問題ないわ。アリシアが戻るなら」

「見上げた覚悟だな。タイミングはこっちで指示する。それまで待て」

俺は一方的にそう言うとき庭園を立ち去った。

process9 明かされる真実！フェイト戦意喪失

.....

夕方、バグヴァイザーの反応の元に向かうとなのはとフェイトが既にいた。

二人は言葉を交わすことはなく、攻撃を開始する。

フェイトが根を攻撃し、なのはが上空に移動、デイバインバスターを発射する。

間髪入れずにフェイトがサンダースマツシャーを放ち、ジュエルシードが封印される。

するとなのはがフェイトの方を向く。

「フェイトちゃん……」

「私と君のどっちがこのジュエルシードを手に入れるのか勝負だ」

「なのは……」

「？」

なのはがフェイトを見てつぶやくように言う。

フェイトはなのはが何を言ったのか解からなかったのか不思議そうにしていた。

「私は高町なのはっていうの。よろしくねフェイトちゃん」

フェイトとなのはそれぞれ臨戦態勢に入る。

なのは再び口を開く。

「フェイトちゃん、私は話がしたいだけなの。だから、私が勝って私が甘ったれた子じゃないって証明できたなら……私とお話してくれる?」

「……」

「その必要はない」

「え……」

俺がその会話に割ってはいる。

「高町なのは、君がフェイト・テストロッサと戦う必要はない」

「それはどういう……」

「君はもう用済みということだフェイト・テストロッサ」

「なにを言っ……」

フェイトが俺のほうを向いて言った。

その声は少し震えていた。

「君は敵一人処分できない出来損ないだと判断したのでね。私とプレシア・テストロッサの二人で相談して君を処分することにしたのさ」

「え……母さんが……? そんな……嘘だ……」

「嘘ではない。君は愛されてなどいないのさ、所詮は駒だ」

俺はフェイトの方を改めて向く。

「折角だ、君には真実を教えよう」

俺は両手を開き、説明口調で話し始めた。

「君はそもそもプレシア・テストロッサの血を分けた子供ではない、彼女の愛娘のアリシア・テストロッサを模して作られたクローンだ」

「クローン？ 私が……？」

「そう、そして彼女は少しも君を愛してはいないのさ。アリシアになれなかった『出来損ない』の君なんてね」

「いや……いやあ……イヤアアアア!!」

フェイトは絶叫を上げ、膝から崩れ落ちてしまう。

「ああ、最後に伝言だ。「敵も満足に倒せないあなたなんて興味ないし、必要もないわ。何処にでも言っただけ頂戴。私には近づかなければね」だそうだ」

俺はそれだけ言うのとフェイトに近づいていく。

「貴様は本日を持って絶版だ」

バグヴァイザードライチェーションソーモードを装着し、フェイトに振り下ろそうとする。

「させないッ!」

俺の手に射撃が放たれ、照準がずれる。

ずれたチェンソーはフェイトの近くの地面を切り開いた。

「高町なのは、なぜ君が私の邪魔をする? フェイト・テストロツサは君の敵だろう?」

「私はフェイトちゃんと友達になりたい。だからフェイトちゃんには手を出させない

!」

俺はバグヴァイザーのモードを変える。

《ガツチャーン…》

「所詮は動かぬ的だ。守ってみろ……」

フェイトに向けてビーム弾を放つ。

「させないよ!」

ビーム弾を桜色の光弾が叩き落とし、緑色の鎖がクロノスを拘束する。

「……この程度では私は拘束できんさ」

俺を拘束しようとした緑色の鎖を引きちぎる。

「双方動くなッ!」

突然声上がる。

フェイトを除くその場の人間の全てがその方向を向く。

そこには黒髪の少年がバリアジャケットを装着し、飛行していた。

「時空管理局所属、クロノ・ハラオウンだ。詳しい事情を聞かせてもらおうか？」

「つち……面倒な。もはやフェイト・テスタロッサには殺す価値すらない。さらばだ」

俺は緑色の粒子状に変化し、時の庭園にテレポートした。

◆◆◆◆◆

時の庭園…

俺は研究室椅子に座るように転移した。

「いきなりどうしたのかしら？」

「管理局の邪魔が入った。まあ、奴に殺す価値はないさ」

プレシアは俺から顔をそらした。

「そう、管理局が」

「ああ、奴も捕まっただろうな」

「興味ないわ。今日はなんの用かしら？」

「作戦の実行日を決めたのでね、それを伝えに」

プレシアはアリシアの入った培養槽に近づく。

「そう、やっとなのね……」

「ああ、実行は三日後だ。準備しておけよ」

「ええ……」

プレシアは心ここにあらずといった様子で返事をした。

俺は特になにを言うでもなく立ち去ろうとする。

「待ちな!」

誰かの怒声が響くと研究室の壁の一部が吹き飛ぶ。

そこには怒りの形相を浮かべたアルフが立っていた。

「もう、あんたらのやり方についてはいいけない。ここであんたらを倒す」

「ほう……」

俺は興味深そうに言った。

アルフがプレシアの方を向く。

「あれがあんただけあんたに尽くしたフェイトに対する仕打ちかい?」

「知ったことではないわ。フェイトが『勝手』に私の言うことを聞いてたのよ」

「この……」

興味なさそうな態度で話すプレシアにアルフが掴みかかるがその間に俺が割り込む。

「そういうのは困る」

「どけよ……」

アルフが俺に拳を向ける。

俺はそれを利用し、アルフを一本背負いで床に叩きつけて首を掴む。

「ガッ……」

「この程度で私は倒せんよ」

「ちッ……この離せッ！」

俺はそのまま首掴んだ手でアルフを壁に叩きつける。

「ガハッ……」

「望みどおり離したぞ」

《ガッチャーン……》

俺はバグヴァイザードライチエーンソーモードを取り出して装着する。

「貴様も絶版になるがいい」

俺はそのまま倒れたアルフをチェーンソーで切り裂く。

「ガアアッ!!」

正面を斜めに切られたアルフは悲鳴を上げ、傷口から出血する。

「さらばだ……」

「クソッ……!」

トドメさそうとするがアルフの姿が突然消える。

「逃げたか……まあいい、いつでも処分できる」

俺はバグヴァイザーを仕舞う。

「それでは帰るぞ」

「わかったわ」

そういつて俺は今度こそ帰宅した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「クソツ……変身してなくても勝てなかった……ごめんよフェイト」

命からがら逃走したアルフは何処かも解からない山で狼形態で彷徨っていた。

血の後を残しながら歩いていくと舗装された道に到達する。

「もう……限界……」

そこで自分の血に沈むようにアルフは気絶してしまった。

process10 打ち砕かれた心となのはの思い！

一方その頃、アルフが政宗と戦って死に目に遭っていた時……

なのはとユーノ、そしてフェイトは時空管理局の所有する時空船『アースラ』に連行されていた。

フェイトは途中で別の道に分かれた。

なのはとユーノはクロノに続いて歩いていった。

「ねえ、クロノくん」

「なんだい？」

「フェイトちゃん、私と一緒にいた女の子はどうなるの？」

クロノは顔だけなのはの方に向けて応対した。

「彼女はかなりの混乱状態にあったからね。先に部屋で休んでもらってるよ」

「そうなんだ……」

なのはは安心してのように胸を撫で下ろした。

「それと君はそろそろ元の姿に戻ったらどうだ？」

「ああ、それもそうだね」

そういったユーノはなのはの肩から降りるとその姿を変える。

その姿は少年の姿に変化する。

「なのはにこの姿を見せるのは久しぶりかな?」

「ええええええええええ!!」

その瞬間アースラ内になのはの絶叫が響き渡った……

◆◆◆

一方、フェイトは管理局員とともに道を歩いていた。

その瞳には光は宿っていない。

「……ですよ、どうぞで」

「……はい」

フェイトは特に抵抗もせずに部屋に入っていく。

部屋は特になにがあるというわけでもなく、ベッドとクローゼットなどの必要最低限の必需品があるのみだった。

フェイトはふらふらとした足取りでベッドに倒れこんだ。

フェイトの頭には政宗に語られた真実がリピート再生のごとく繰り返されていた。

『君は所詮、駒だ』

「違う……私は駒なんかじゃ……」

『愛されてなどいない』

「母さんは私をなんだと思っていたの……？」

『君はクローンだ』

「私はクローン……母さんのわたしじゃない本当の娘の模造品……」

『処分する』

「嫌だ……死にたくない……」

『絶版だ』

「嫌だ……嫌だよ……助けて……アルフ……」

フェイトはシーツに包まってただただ震えていた。



「ここは……」

アルフの目が覚めると見知らぬ檻の中にいた。

「アルフ……」

アルフが声のする方に向くとそこにはなのはとユーノ、そして知らない少女が二人いた。

「……ふん」

アルフは三人と一匹からそっぽを向いた。

「中に行きましょ」

「うん」

リーダーっぽい金髪の少女がそういうと三人の少女が家に入っていく。
するとユーノが檻の中にするりと入ってきた。

「やあ、アルフさんだったね」

「……なんの用だい？」

「君の主人……フェイトは今、管理局にいるよ」

「フェイトが……？」

ユーノがそういうとアルフはユーノの方を向いた。

「それにかかなり危険な状態らしいんだ……」

「そりゃあいきなりあんな真実を知らされたら……」

「お願いだ、黒幕の事やクロノスのこと教えてくれないかい？」

アルフがユーノを睨みつける。

「……解かった、でも必ずフェイトを助けてくれるかい？」

「解かった……」

ユーノとアルフは管理局に転移した。



夕方、ユーノ、クロノにリンデイ・ハラウン提督がブリッジに集まった。

その前でアルフが座っていた、それを見ていたリンデイが口を開く。

「それで話してくださるのよね、今回の事件について」

「ああ、私の知っていることをすべて話すよ」

アルフは覚悟を決めたように一度、瞳を閉じた。

「……そういや、あのガキンチョは？」

「なのはなら……」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

なのははとある部屋の前にいた。

その部屋はアースラに設置されたフェイトの私室だった。

なのはは静かにドアを叩く。

「フェイトちゃん？ 居る？」

返事は返ってこない。

なのはがドアノブを捻ると開いていることに気づく。

「フェイトちゃん？ 入るよ？」

なのはが恐る恐る部屋に入ると部屋には電気が点いていなかった。

少し目を凝らすと部屋の隅に置かれたベッドの上に蹲るフェイトがいた。

「フエイトちゃん?」

「っ!? 誰っ!?」

「私だよ、高町なのは」

「……なに?」

フエイトはまるで兎のように恐怖を露にしていた。

瞳には光が失われ、薄く涙が浮かんでいた。

「お話をしたいなって思ったから」

「う、うん……」

なのはが近づくとフエイトが微かに震えているのがわかった。

なのはは震えるフエイトに優しく抱きついた。

フエイトは大きく体を震わせる。

「いきなり何?……」

「フエイトちゃんが怖がってたからさ、少しでも安心できるように」

「安心なんて……」

フエイトはそう言いつつもなのはに体を預けていた。

その目には少しだが光が戻っていた。

「フエイトちゃん」

「なに？」

なのははフェイトの顔をしっかりと見ていった。

「私と友達になつてほしいの」

◆◆◆◆◆

「時の庭園を暴走させる!？」

「ああ、確かにあのクロノスがそう言つてた」

指令室ではアルフが語つたクロノスとプレシアの作戦に全員が驚愕していた。

「そんなことをしたらこの海鳴市はただではすまないぞー」

クロノスは拳を握りしめ、声を荒げる。

「なんとしても阻止しましょう。協力してくれるわね？」

リンディがユーノの方を向いて言う。

「僕は構いませんが……」

ユーノは少し不安そうに言う。

「なのは……」

「フェイト……」

ユーノとアルフはそれぞれのパートナーのことを心配していた。

process11 フェイトの覚悟!復活するアリシア・テストロッサ

「私と友達になってほしいの」

「え……?」

フェイトは意外な発言だったのか目を丸くしていた。

「なんだかわからないんだけど、フェイトちゃんとは仲良くなれる気がして」

「え? え? どういうこと?」

フェイトは本気で混乱しているようだった。

「なのも聞いたんだよね? 私のこと……」

「うん、聞いたよ」

「私はクローンで人間じゃないんだよ? 母さんの娘のコピー品なんだよ?」

なのははそつとフェイトの手を取って口を開く。

「クローンだなんて関係ないよ。それにクロノスが言ってたでしょ、『模造品』だって」

「うん……」

「それは、フェイトちゃんがそのフェイトちゃんのお母さんの子供のクローンになれな

かったって事でしょ？」

「たぶん……」

「ということはフェイトちゃんはその娘さんのクローンじゃなくてフェイトちゃんなんだって事なんだと私は思うな」

「なのは……」

フェイトはなのはに握られた手を握り返して涙を零した。

「私はどこかの誰かのクローンさんじゃなくてフェイトちゃんと友達になりたいなって思ったんだよ？」

「うん……」

「それに諦めるのは早いと思うな、本当にお母さんのことを思うならフェイトちゃんが
お母さんを助けようよ。フェイトちゃんが困ってるなら私が助けるよ！」

「そうだね……ありがとう、なのは……」

フェイトの目に光が戻り、二人は強く手を握り合った。

「私、頑張るよ。なのはが困ったら私が助けるから」

「うん！ 私もフェイトちゃんを助けるから」

（待ってて母さん、今行くから……）

フェイトとなのははお互いの誓いと思いを口にして固い友情を刻んだ。



時の庭園、俺ははやてに「少しの間、帰れない」と言っただけでここに來ていた。なぜなら、明日に決行となった作戦の為だった。

「さて、ついに明日か……」

現在、研究室には俺しか居なかった。

プレシアは吐血して倒れたため現在は俺が研究室のアリシア様子を見ている。

「さてと……」

俺はアリシアの入った培養槽に近づいていく。

そして懐からバグヴァイザーとガシヤットを取り出す。

「さあ、約束を果たしてやろう。プレシア。今こそ復活の時だ。アリシア・テストロッサ」

俺はアリシアの入った培養槽を叩き割った。

落ちてくるアリシアを受け止め、バグヴァイザーの銃口をアリシアに当てる。

そのままアリシアにバグスターウィルスを流し込む。

アリシアの身体にモザイクがかかったようになり、そのまま粒子状になり消滅した。

「少し待っている。すぐに私が迎えに向かう」

それだけ言って俺はプレシアの居る部屋に向かった。



「ということではアリシアは一時的に避難させた」

「なにをしているかと思つたら…」

「プレシアは椅子に座つてそういつた。」

「もうじき限界が来るだろう。」

「決行は明日…アリシアに会える日も近いわ…」

「約束は守るからな…今は休め」

「俺は立ち上がる。」

「何処にいくのかしら?」

「まだ、下準備がな…」

「俺は笑みを浮かべ、時の庭園から転移した。」



「元に戻つたフェイトはなのとともにブリッジに訪れた。」

「なのは!」

「フェイト!」

「ユーノとアルフは声を上げる。」

「もう大丈夫なのか?」

「うん、大丈夫だよアルフ。なのはが大切なことを教えてくれたから」

フェイトはそういつて笑顔を見せた。

「フェイトちゃん」

「うん、わかっている。リンデイさん」

「なにかしら?」

リンデイはフェイトとなのはの方に向き直る。

「私達も時の庭園に行かせて下さい!」

「フェイトちゃんのお母さんを助けたいんです!」

二人は力のこもった声でそういつた、リンデイは迷わずにこういつた。

「解かったわ、行ってくれるのね」

「はい!」

リンデイが手を叩くと置くから一人の女性が入ってくる。

「フェイトさんのデバイス、修理しておきました!」

フェイトは自分のデバイスをトレイから包み込むように両手で掴み、持ち上げる。

「バルディツシュ…私と一緒に戦ってくれる?」

《of course》

「ありがとう」

フェイトは今一度、覚悟を決めた。
自分の母を助け出すと…

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
遠くに転移した俺は

「さてとお姫様を助けましょうかね」

バグヴァイザーからデータを呼び出す。

すると俺の正面に少女が現われる。

その少女はアリシア・テストアロツサだった。

「ねえ……お兄さん」

「なんだ？」

「私って死んだんだよね？」

「ああ」

アリシアは膝を折りたたみ、体育座りの体制になる。

「私はどうなったの？」

「お前は蘇ったんだよ。バグスターとしてな」

「ばぐすたー？」

アリシアは顔を上げ、不思議そうにこちらを向く。

「そう、お前は人ではなくなった。どうだ、今までのことは全て捨てて、私と来ないか？」
「お兄さんど？」

アリシアは以前として不思議そうにこちらを見ていた。

「お前が人でないことに迷うならば、私がお前がせめて心だけでも人であるようにしてやろう」

「本当に？」

「ああ、私と来い。アリシア・テストロッサ」

「……うん」

俺が手を差し出すとアリシアは俺の手を取る。

するとアリシアの服装が変化する。

水色のリボンは右が赤、左が青になり。

下は薄紫色をベースに赤や青色が不規則に散りばめられた少し大きめのズボン。

上は水色のTシャツの上に前は腰ほどの長さで後ろは膝ほどという前後が非対称な

コートという姿になった。

コートは首元がネックオーマーのような形状になっており、コートの前は開いているが襟首部分で止められているため首が隠れていた。

「これは……？」

「服装が人間の頃のままだと未練が残るだろう？こっちも似合っている」
「割といいかも」

アリシアは自分の姿を回りながら見ていた。

「さあ、そろそろ行こうか。アリシア」

「はい」

俺が歩みだすとアリシアはその後に続いた。

process 12 最終決戦開始!邂逅するアリシアとフェイト

俺はアリシアを連れて活動拠点に転移した。

この活動拠点は転移でのみ移動が可能な場所にあり、外部から扱われることはありえないようになっていた。

「ここが我々の拠点だ」

「なかなか広いね」

アリシアはそう言うとソファに飛び込んだ。

「おおうソファがふかふかだ」

「たまに寝泊りもするからな……」

俺はアリシアの様子見た後に奥の部屋に入る。

「何するの？」

「君の蘇生でバグスターウィルスのデータが手に入ったからな。これにそれを投入する」

俺は機械に挿されたブランクガシャットを指差す。

「ついに完成するんだ……世界滅亡ゲームがな」

俺は羅列を書き終え、エンターを押す。

するとガシヤットにデータが入り、ガシヤットが完成する。

「ついに完成だ。世界を滅亡を目標としたゲームが」

「おおう」

俺は完成したガシヤットを机に置く。

「タイトルやゲーム性も考えなくては……」

「どうするの？」

「今はアリシア、君のことが先だ」

俺は机の上に置かれていたものを手に取る。

「これを君に」

「なにこれ？」

俺は部屋を出て行き、ソファに座る。

「それは君の武器だ」

「へえ……これで戦えるんだ」

「ああ」

アリシアはとても嬉しそうにそれを見ていた。

「ねえ、お兄さん?」

「なんだ」

「私はね、これまでの事を教えてもらって知りたいことができたんだ」

「ほう」

アリシアは俺の方を向き、満面の笑顔でこういった。

「本物の私と母さんが作ったもう一人の私のどっちの方が強いのかなってこと♪」

「それは興味深いな」

「そうでしょ♪ こんなに心が躍ることはないよ♪」

アリシアは嬉々として笑顔を浮かべ続けた。

俺はそんなアリシアの様子が面白かった。

「それでは、君にその使い方と戦い方を教えてあげよう」

「わーい♪ 私、ゲームは説明書で理解してから派なんだよね」

その後、俺はアリシアに使い方と目的について教えた。

それを聞いたアリシアはこういった。

「世界が敵なんて心が躍るね!」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

次の日、ついに作戦の決行となった。

俺はアリシアを拠点に残し、時の庭園に来ていた。

「さて、作戦を開始しようか」

「ええ」

プレシアはそういうと時の庭園が揺れはじめる。

「侵入者よ。貴方の予想通りのメンバーね」

「当然だ、今しばらく待とうではないか」

俺は椅子に座り、ガシヤットを眺めながらそういった。



一方、時の庭園に突入したなのはとフェイトにクロノ、そしてユーノはフェイトの案内で駆動路に向かっていた。

「こつちに駆動路があるんだ」

「そうか、それでは行こう」

フェイトがそういうとクロノが指揮を執って奥へと進んでいく。

「……侵入者発見、排除します」

「っ!? 皆止まって!」

ユーノが大声でそういうと全員が停止する。

すると戦闘のなのはとフェイトが今居たであろうところにクレーターが出来ていた。

ガシヤンガシヤンという音とともに奥から巨大な人形兵が数体出現する。

その足元には無数の小型の人形兵が進軍していた。

「フォトンランサー!」

《Photon lancer》

黄色の球体状の発射核が無数に生成される。

「ファイヤツ!」

球体は光の弾丸となって人形兵達を的確に打ち抜いていく。

「なのはっ!」

「うんっ!」

二人は自分のデバイスを構える。

「ファイヤツ!」

二人のデバイスから砲撃魔法が放たれ、人形兵達を消滅させる。

「二人とも先行って!」

「すぐに追いつくから!」

クロノとユーノは頷く。

「行くう!」

クロノとユーノが再び駆動路に向かっていく。



俺は駆動路で優雅にコーヒーを飲んでいた。

すると駆動路の壁が吹き飛ぶ。

其処からクロノ達が入ってきた。

「やあ、侵入者諸君。ごきげんよう」

「クロノス……」

「随分と優雅だな」

「何の用かしら？」

「解かってるだろう？」

俺は立ち上がる。

「クロノス、そしてプレシア・テスタロツサ君たちを拘束する！」

「フツツ……アハハハハ！あなた達を始末すればアリシアが戻ってくるのよ！」

「私は全てを失った……地位も権力も大切な娘も……こんなはずじゃなかったのよ！」

「だからと言って関係ない人々巻き込むのか！」

プレシアの言い分にクロノ一括する。

「世界はいつだって不条理なことばかりだ。ずっとそうだ、誰にでもこんなはずじゃなかったって事はたくさんある……問題はそれにどう立ち向かうかだ。逃げていい、戦つ

て克服してもいい」

クロノはデバイスを握り締め、怒りを露にする。

「だが！ それに他の人間を巻き込む権利は誰にもない！」

「黙りなさい！」

クロノの発言をプレシアは一蹴する。

するとなのはとフェイトも合流した。

それと同時に駆動路に虚数空間が発生し、時の庭園が崩壊を始める。

「母さん！」

「フェイト……」

フェイトはプレシアに手を差し出す。

「母さん、私はもう迷わないよ……私は母さんを助きたい」

フェイトのその目には迷いはなかった。

「私は……」

「駄目だよ。フェイトそんな事したらさ」

「っ!?! 誰!?!」

フェイトが振り向くと其処にいたのは復活したアリシアだった。

process 13 裏切りのアリシア！時の庭園の崩壊

アリシアはプレシアに向かって歩いていく。

「アリシア……？」

「うん、久しぶりだね。母さん」

プレシアはアリシアを見て呆然としていた。

唯一の目的だったアリシアが今まさに目の前に居るのだから。

「アリシアその服は？」

「クロノスがくれたの似合うでしょ？」

「ええ」

アリシアはプレシアにそれだけ言うとフェイトの方を向く。

「初めまして、フェイト」

「えっ……あっ……はい」

フェイトは若干困ったように返事を返した。

アリシアは再びプレシアの方を向いた。

「フエイトは母さんを助けたいんだよね？」

「うん」

「でもね、母さんは全てを失ったいわば敗者なんだよ。そして今も追い詰められている」
「なにを言っているのアリシア、こっちに來て頂戴」

プレシアはアリシアに手を伸ばす。

「敗者なのに未だに幻想にしがみついている。分不相応だよね」

アリシアはプレシアに近づいていく。

「敗者には敗者らしい『エンディング』ってものがあるよね」

アリシアは膝をついたプレシアの肩を掴む。

「母さんはクロノスに言ったらいいね。私を蘇らせてほしいって」

アリシアは笑顔でこう言った……

「じゃあ、もう思い残すことはないよね♪」

アリシアはプレシアを虚数空間に突き落とした。

「えっ……」

「さようなら、『醜い敗者さん』」

プレシアはなんの抵抗もせずに虚数空間に消えていった……

それを見ていた全員が声を上げる。

「お前、自分の母親を…」

「酷い…」

「なんで…」

「もう少しで助けられたのに…」

「アハハ♪ 酷い？ 私は醜い敗者に分相應のエンディングを迎えてもらう手伝いをしただけだよ♪」

絶句するフェイト達を後目にアリシアは笑っていた。

「それに、あの『敗者』はもう私の母親じゃないよ。一度死んでる私の親は蘇らせてくれたクロノスだけだよ」

アリシアはクロノノの問いに対し敗者と断じた。

「もうあんな敗者の話なんて良いんだよ。私が興味あるのはフェイトなんだからさ」

「私……？」

「そうそう、フェイトはあの人が作つたいわばもう一人の私だよ」

アリシアはスキップするようにフェイトに近づいていく。

「それで私、気になったんだ……私ともう一人の私はどっちが強いのかな？ つてね♪」

アリシアはフェイトの顔を見てそういった。

「でも、もう時間がないかな」

アリシアがそういうと突然、時の庭園が揺れはじめる。

「あの敗者が消えたから時の庭園の暴走が早まったんだね。まったく最後の最後まで白けるなあ……」

アリシアはフェイトの方を向いて笑顔を見せた。

「それじゃ、今日はここまでかな。またねー♪」

アリシアはそれだけ言って粒子状になってその場から消えた。

「待って……」

「フェイトちゃん！ 逃げよう」

「うん……」

いつ間にか居なっていたクロノスの事を確認した四人は時の庭園を後にした。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「もう……ほんとに白けるなあ……」

拠点に戻ってからアリシアはずっとぼやいていた。

プレシアの所為でフェイトと戦えなくなつた為だ。

「まあ、チャンスはいつでももあるし、いいかな」

アリシアはフェイトとの戦いを『お楽しみ』として整理をつけた。

「ねえ、ところでクロノスは何してるの？」

研究机で何かを弄っている俺を見て、アリシアは言った。

「ああ、デバイスのデータが手に入ったからな。折角だから試しに作ってみてる」
俺は作業の手を止めてPCの画面をアリシアに見せた。

「これがこれとこれのデータ？」

「ああ」

アリシアは俺の机に置かれた二つのデバイスを指差していった。

「私のハンドメイドだ。性能もそこそこだし理論上、実用の方も問題ない」

デバイスは一方が剣のような飾りのネックレス、もう一方が青色の宝石（本体）のついたグローブだった。

「そうだな、インテリジェンスデバイスだし、名を与えようしよう」

俺は少し考えて、とあることを思いついた。

「ハハハっ……決めたぞ」

「クロノス？」

アリシアは心配そうにこちらを見た。

「アリシア、この二つをとあるところに届けてこい」

「ふえっ……？別にいいけど……」

「ああ、そうそう。この二つのデバイスの名は……」

俺は笑みを浮かべて眩く様に言った。

「灼熱の剣『フレイムアイズ』そして氷結の淑女『スノーホワイト』とでもしておこうか……」

《Registration of the body name of the main body has been completed. It shifts to the standby mode from this》

二機のデバイスはそういうと待機モードに移行した。

「後は管理者登録のみだな……」

「ねえねえ、誰に届けるの?」

俺は立ち上がってパソコンを開き、笑みを絶やさずにこういった。

「この二人さ」

そういつて俺が見せたパソコンの画面には二人の少女の姿があった。

「この二人はあの高町なのはの友人だ。つまり……」

「フェイトとも接触する」

そういつたアリシアも笑みを浮かべるが。

「でも、それって敵を強化することになるんじゃない?」

「フフフ……まあ、そのうち解かるさ」

俺は椅子に座り、コーヒーを一口飲んだ。
アリシアは未だに理解していないようだった。
：

process14 一時の別れと誓い!クロノスのプレゼント

時の庭園での決戦から数日、俺は自分の拠点の中で今後の計画をまとめていた。

「お兄さん何やってるの?」

すると奥の私室からアリシアが出てきた。髪が纏められておらず未だにパジャマ姿なのでおそらく寝起きなのだろうと推測をした。

ちなみにこの数日でアリシアの俺への呼び方は『お兄さん』で固定となった。

「今後の計画について考えていた。いくら我々が強くとも頭数が足りすぎるからな」
「お兄さんは私のことを信用してないの?」

俺がそう言うのとアリシアは頬を膨らませて少し機嫌が悪そうに言った。それをなだめるように俺が続ける。

「そうは言っていないだろう。お前のことは本当に評価しているよ。実力はともかくとしても我々には圧倒的に頭数が足りない。これから我々が相手する連中を考えたらせめてあと二人は実力のある者が必要だ。という話だ」

俺の「本当に評価している」に満足したのか笑顔になったアリシアは俺の横に腰掛け

た。

「アリシア、君に頼みたい事があるんだが……」

「なに？ 私はお兄さんの頼みなら何でも聞くよ。たとえ死ねて命令でもね♪」

アリシアは笑顔のままそう言うと言いつつ顔をこすりつけてくる。俺はそのアリシアの頭を撫でてなると耳元でとあることを呟いた。

するとアリシアの笑顔は満面のものとなった。

「いいの!! やったあ!!」

俺の言葉を聞いたアリシアは立ち上がり辺りをピョンピョンと跳ねていた。

「すぐに準備しよ♪ 楽しみだなあ……」

アリシアは心底楽しそうに顔を紅潮させ、私室に向かっていった。

「……俺もこれを彼女たちに届けに行くとしよう」

俺も立ち上がり研究机の上に置かれたアタッシュケースを引つ掴み、歩き出した。

◆ ◆ ◆

とある公園、俺はその公園のベンチに座っていた。

ちなみに俺は忘れ去られたであろう完全模倣の能力でご老体に変身していた。

この能力、覚えている人いるのかな？

話を戻そう。なぜ、俺がここにいるのかというと……

「待ってよ！ アリサちゃん！」

「ほら急いでもうか、塾に遅れちゃうでしょ！」

噂をすればなんとやら公園を突っ切って行こうとする二人の少女。

アリサ・バニングスと月村すずかだ。

それを確認した俺は二人に声をかける。

「そこのお嬢さん方、この古いぼれに手を貸してくれんかの？」

俺がそう言うのとアリサとすずかは足を止め、こちらにくる。

「どうしたんですか？ お爺さん」

「アタシ達は急いでいるのであまり難しいことはできませんよ？」

「いやあ、少し立ち上がるのを手伝ってくれんかの？」

「はい」

アリサとすずかが俺の手を掴み、ゆっくりと立ち上がらせる。

「すまないの、お礼と言ってはなんだかこれを受け取ってくれんかの？」

俺は懐からスノーホワイトとフレイムアイズを取り出す。

「これって宝石ですよね!? こんなもの受け取れませんか！」

「そうですよ！ こんなこと当然ですから！」

「いやいや、俺はもう古い先短い古いぼれですので貴方たちのような優しい人に受け

取ってほしいのです」

二人は多少困ったような表情を浮かべるも渋々俺の差し出したものを受け取った。

「そうでは、俺はこれで……」

俺は内心で笑みを浮かべながら拠点に帰った。

◆◆◆◆◆

さらに数日後の早朝、海辺の公園にて。

そこには普段着のフェイトと制服のなのは。その他にもクロノとアルフ、ユーノも居た。

二人共、緊張しているのか無言だったがなのはが微笑みかけるとフェイトが小さな声で「ありがとう」と返す。

そして、フェイトがそのまま話を続ける。

「あのね、今日なのはを呼んだのは……」

「楽しそうだね♪ お姉ちゃん嬉しいなあ」

全員が声の方に振り向く、するとそこにはアリシアがいつの間にか柵の腰掛けていた。

「アリシア……」

「アリシアちゃん！」

二人がアリシアを見つめる。するとクロノ達が近づいてくる。

「オーディエンスは近づかないでよね」

アリシアが指を鳴らすと辺りの景色が一変する。

海の見える公園にいたはずだったがフェイトとアリシアはいつの間にか廃工場のよ
うな場所に移動していた。

「魔法の反応はなかったのに……」

フェイトが驚愕の表情を浮かべる。アリシアは意気揚々とフェイトに近づいていく。

「さあ、フェイト。私と戦おうよ」

「えっ……いや……その……」

フェイトはアリシアの様子に困惑している。なのはもその様子を見て呆然としてい
た。

「私はフェイトと戦いたいの! やろう♪」

アリシアはフェイトから距離をとる。

「さあ、早く早く♪」

「ねえ、アリシア。私はあなたと戦いたくない。話し合いで解決できないの?」

「やだなあ、この前も言ったでしょ。私はフェイトと私のどちらが強いのかを決めたい
んだよ。話し合いなんて論外に決まってるよね♪」

アリシアはフェイトの提案を一蹴し、どこからかガシャットギアデュアルを取り出す。

「さあ、始めようか。フェイト♪」

「もう戦うしかないんだね。だったら戦おう、今度は私があなたを救って見せる」

フェイトもバルディッシュを取り出す。

「バルディッシュ、セットアップ」

《set up》

フェイトがバリアジャケットを装着する。それを見たアリシアは笑みを浮かべる。

「いいね……心が躍るな♪」

アリシアがギアデュアルのダイアルに手をかける。そしてダイアルを回す。

《PERFECT PUZZLE!》

《What's the next stage? What's the next

stage?》

すると電子音声が始まり、空中にウィンドウが投影される。そこから無数のコインのようなものがあちこちに散らばる。

アリシアがギアデュアルのスイッチを押す。

《Dual up! Get the glory in the chain! P

PERFECT PUZZLE!》

赤と青のゲートがアリシアを通過するとその姿が変化する。

そのままアリシアは腰に付けられたギアホルダーにギアデュアルを挿入する。

「さあ、始めようか♪」

アリシアのその一言でフェイトとアリシアが構えを取った……

process 15 ぶつかる姉妹の思い。フェイトV Sアリスア！

アリスアとフェイトの戦いが開始され、俺はその様子を離れたと所から見ていた。

それを見届けた俺はなのは達の元に向かった。

俺が近づくとなのは達がフェイト達が突然消えた事に慌てていた。

それを確認した俺は声をかける。

「無駄だ、お前たちではどうしようもないことだ」

「なんだと」

俺の存在に一早く気づいたクロノはそんなことを言っただけ振り向く。

するとその場にいた全員がこちらに振り向く。

「数日ぶりだな諸君」

「数日ぶり……あなたはまさか」

なのはがこちらを向き、顔色を変える。

「その予想は当たりだよ。高町なのは」

ゲーマドライバーを装着し、ガシヤットを取り出す。

《Kamen Rider Chronicle》

ガシャットは自動でゲーマードライバーに挿入され、レバーを展開する。

閃光が放たれ、仮面ライダークロノスに変身する。

「クロノスッ!」

なのはがバリアジャケットを装着し、杖を構える。

「やるのかね? 君では勝てんよ。決してな」

「二人では勝てないかもしれないけど皆と一緒なら……」

周りを見るといつの間にか全員がバリアジャケットを展開し、臨戦態勢に入っていた。

「訂正しよう。君『たち』では私には勝てない」

《ガツチャーン……》

俺はバグヴァイザードライを装着し、なのは達と向き合った。

一方、アリアとフェイトはほぼ互角の戦いをしていた。

フェイトの速度に対し、アリアはそれを見切り、的確に対応している。

魔法による攻撃もアリアは軽い身のこなしで躲してみせた。

「せっかくだからフェイトにも教えてあげるね。このパズルゲームの能力を」

アリシアはそう言って片手をあげる。

すると変身時に飛び散った無数のコインが空中に浮かぶ。

「パズルゲーマーはゲームエリア内の物質を自由に操ることができる。こういう風にね！」

アリシアは空中のコインをパズルの様に動かし、操作する。

すると二枚のコインがアリシアの方に飛んでくる。

コインはアリシアの前ではじけるように消滅する。

《高速化》《鋼鉄化》

アリシアが構えたかと思うと突然アリシアの姿が消える。

すると突然フェイトが吹き飛ぶ。

「ガッ……」

フェイトは突然の事に何が起こったのか分かっていないようだった。

「突然、速度が上がってびっくりした？　これがエナジーアイテムの力だよ♪」

「エナジーアイテム……」

フェイトはよろよろと立ち上がる。

「さあ、まだまだこれからだよ♪」

高速化によって速度が上昇したアリシアが猛攻を仕掛ける。

フェイトとアリシアの攻防が逆転し、フェイトが防御にまわる。

鋼鉄化によって硬度の増したアリシアにはバルディツシユの刃が通らない。

そのため、フェイトは防御と回避に回るしかない状況となる。

アリシアの猛攻は止まらない。

アリシアの渾身の一撃でフェイトは再び後方に大きく吹き飛ぶ。

「ほら、フェイトおいでよ♪ こんなんじや終わらないよね♪」

「くっ……」

二度の被弾はフェイトの装甲を貫通し、大ダメージを与えた。

フェイトは既に満身創痍といった様子だった。

「行くよー♪」

アリシアが再び、攻勢に入ろうとした。その時、アリシアの手を誰かが掴む。

「止めろ。今はまだ生かしておけ」

「えー、何でよー」

アリシアの手を掴んだのは忍者だった。

忍者がそういうとアリシアは不満そうに忍者の手を払いのけた。

「クロノスの命令だ。撤退するぞ」

「ちえー。じゃ、フェイトまたねー♪」

そう言ってアリシアと忍者はその場を去った。

「……一体何だったんだろう」

そう言ってフェイトは意識を手放した。

◆◆◆◆◆

外では俺となのは達が戦いを繰り広げていた。

俺の目的はあくまでも時間稼ぎだ。

そのため俺は回避に徹して時間を稼いでいた。

するとバグヴァイザーから着信音になる。

画面を開くとそこにはアリシアの事を任せた忍者。

仮面ライダー風魔の姿があった。

『此方は終わった』

「了解した」

それだけ言って俺は通信を切る。

するとフェイトが突然現れる。

「フェイトちゃん！」

なのはの注意がフェイトに向く。

その隙について俺は転移した。



拠点に転移した俺を待っていたのは機嫌を損ねているアリシアと風魔の姿だった。

「ずいぶんと物分かりがいいな。風魔よ」

「あいつのためだ」

俺は笑みを浮かべてソファに座る。

「そうだろうな。彼女を助けるためだものな」

話は数日前に遡る……

俺はここでとある人物を待っていた。

するとそこに目的の人物が現れる。

その男は俺に質問をしてくる「彼女をどうしたのか」と……

俺はその質問にこう答えた。

「彼女の命は私が預かっている」

男は初め、断った。

それに対し、俺はこう言った。

「私に忠誠を誓え、さもなければ彼女をここで絶版にする」

男は抵抗を止め、俺に忠誠を誓った。



「彼女を助けるためには私を手伝うしかないのだからな」

風魔はゲーマドドライブのレバーを閉じて、ガシヤットを引き抜く。

変身が解除され、人間の姿に戻る。

「恋人と妹を天秤にかけた結果、恋人を選んだ者よ」

高町家の長男でなのはの兄である『高町恭也』がそこにいた。

process 16 遊びに行こう!友人とのエンカウト!

アリシアの初陣が終わり、俺はいつものように拠点の椅子に腰掛けていた。

そのアリシアはソファに転がり、楽しそうに笑顔を浮かべていた。

だが、そんなひと時もアリシアのとある一言で消滅した。

「そういえばお兄さん。自宅の方は大丈夫?」

「……………」



約一週間ぶりに家に帰った俺を待ち受けていたのは鬼神の如く怒ったはやてだった。

「さーて、政宗さん? 言い訳なら聞こうか?」

「いえ……………」

怒りのあまり標準語になっているはやてとその前に正座をする俺。

流石の俺もこのはやての威圧には敵わない…………

はやてはため息をつき、やれやれと言った様子で口を開いた。

「忙しいのもわかるけど、ちゃんと連絡をしてくれんと心配するやろ…………」

「申し訳ない」

はやてに本気で謝罪した俺は立ち上がった。

「代わりと言ってはなんだがこの間の約束で勘弁してくれないか？」

「……しゃーないな。ええよ」

そう言っではやては笑顔になった。

◆◆◆

俺ははやての車椅子を押し、近くの公園で散歩をしていた。

たいしたことではなかったがはやては終始楽しそうにしていた。

その途中……

「あつ、はやてちゃん！」

突然、俺とはやてに声がかけられた。

「すずかちゃん！ どうしたん？」

「近くを通りかかったから声をかけたんだ」

声をかけたのは紫髪の少女、月村すずかだった。

するとすずかは手を叩き、笑顔でこう言った。

「そうだ！ これからアリサちゃんと待ち合わせなの、はやてちゃんも一緒にどうかな

？」

「ええな! 政宗もええか?」

「俺は構わないが……」

「それじゃあ決まり! こっちだよ」

俺とはやてはさすがに連れられ、場所を移した。

◆◆◆

すずかに連れられてきたのは図書館。

「今日はここで待ち合わせなんだ」

「そうなんやな」

その道中でも二人は楽しそうに会話を交わしている。

さて、どうしたものか……

「それではやてちゃん、そっちの人は? 病院の人?」

「違うで、私の友達の政宗や」

「十六夜政宗だ。よろしく」

すずかは少し考え込む。

「政宗くん、どこかで会ったような……」

「初めてですよ?」

若干鋭いな、バレなきやいいが。

俺が考え込んでいると通信が入る。

「悪い、ちよつと……」

「政宗？」

俺は一言断り、はやてから距離をとる。

そこでバグヴァイザーを取り出し、通信を取る。

「何の用だ」

『ごめんね、取込み中に』

「要件は」

『えつとね、お兄さんは知らないだろうけど。お兄さんの自宅にね、ものすごいものがあつたよ』

アリシアが言っているのは闇の書のことだろう。

そういえば二期の開始も近い、そろそろ潮時か……

「アリシア、近いうちにまた暴れられるぞ」

『ホントに!?! やつたあ!』

俺は通信を切り、はやての方に向かった。

◆◆◆◆◆

「はやて、すまん遅れた」

「政宗、どうしたん?」

「ちよつとな」

戻った俺を出迎えたのははやてとすずかだけではなかった。

「初めまして、あなたが政宗?」

そこにいたのは金髪の少女アリサ・バニングスだった。

「ああ、君は?」

「あたしはアリサよ! よろしくね」

ドヤ顔で自己紹介を済ませたアリサに苦笑いを浮かべる一同。

「それじゃあ、行こうか」

すずかの一言で俺たちはその日、一日中外を出歩いていた。

◆ ◆ ◆

「はやて、大事な話がある」

「ん? なんや」

夕方、家に帰った俺ははやてに真剣な顔で話を切り出した。

「すまないけど、またかなりの間家を空けることになった」

「そうか……」

はやては俺の言葉に悲しそうな表情を浮かべた。

だが、すぐに笑顔に戻り、俺の方を向く。

「必ず帰ってきてな！ 絶対やで！」

「ああ」

はやてとそんな口約束をして俺は自室に戻り、支度を済ませて家を出た。



「アリシア」

「はいはい♪ 何ですか？」

拠点に戻った俺の一言でアリシアが奥の部屋から顔を出す。

「今後の作戦を練るぞ」

「オツケー」

俺がそう言うのとアリシアは楽しそうにソファに座った。

俺は研究室からホワイトボードを持ってくる。

「アリシア、風魔はどうした」

「ああ、あの忍者なら家に帰ったよ」

アリシアはルービックキューブを弄りながら返答する。

「そうか、まあいいさ」

俺はそんなことを言いながらホワイトボードに今後の作戦を書き出した。



一方、八神家。

「政宗、明日は私の誕生日なのにな……」

はやては悲しそうに本を読んでいた。

すると本棚の方から光があふれる。

「なっ、なんや!?!」

本棚から鎖で封じられた一冊の本が浮遊し、はやての前に移動する。

すると鎖は砕け散り、本は静かにこう告げた。

《封印を解除します》

闇の書編

process 17 リリカルなのは二期開始！クロノ
スの作戦！

八神家の居候から脱却した俺は拠点の椅子に座って今後の事を考えていた。

ちなみに今日ははやての誕生日から三日が経っている。

つまり、今はやての家にはヴォルケンリッター達がいて、闇の書のページ集め中心とい
うわけだ。

ちなみにアリシアは俺の説明に飽きたのか既にうとうととしている。

「さてと、今後の目標は闇の書入手だな」

なぜ、俺が闇の書を欲しがるのか。

それは闇の書内に封印された『マテリアル』のデータを奪うためだ。

闇の書のマテリアルの一機『闇統べる王』の力が……

バグヴァイザーが振動し、魔力反応を探知する。

「さて、アリシア」

「なっなに!？」

半分寝ていたアリシアは俺の呼びかけで目が覚める。

「仕事だ、新人たちを教育してやって来い」

「了解です♪」

アリシアは立ち上がり、敬礼をするとバグヴァイザーを受けとり、外に行つた。

「……さて、我々も出向くとしようか」

◆◆◆

夜の海鳴市で鏢迫り合いをする二人。

一方はバリアジャケツトを装着し、自らの愛杖『バルディッシュ』を構えるフェイト。

向き合っているのは赤い装束に身を包み、その手に鉄槌を持つ小柄な少女。

闇の書の守護騎士の一人、鉄槌の騎士こと『ヴァイター』だ。

「仲間か?」

「……友達だ」

鏢迫り合いの状態から離れた二人はそれぞれの杖を構え、対峙する。

フェイトが口を開こうとしたその時。

「楽しそうなおことしてるねフェイト♪ お姉ちゃんも混ぜてよ♪」

フェイトとヴァイターが声の方向を向く。

そこにはアリシアが手ごろな瓦礫に腰掛けて足をパタパタと動かしていた。

「アリシア姉さん……」

「また仲間か……」

「残念♪ 違うんだなあ」

アリシアは瓦礫から腰を上げ、立ち上がる。

そして、どこからかギアデュアルを取り出し構える。

「さてさて、第二回戦といこうか♪」

《PERFECT PUZZLE!》

《What, s t h e n e x t s t a g e ? W h a t , s t h e n e x t

s t a g e ? 》

「変身」

《DUAL UP! Get t h e g l o r y i n t h e c h a i n ! P

ERFECT PUZZLE!》

仮面ライダーパラドクスに変身したアリシアはフェイトに向かっていく。

「変身した!?!」

ヴィータは驚愕の声を上げ、距離を取る。

フェイトはアリシアのキックをバルディッシュでガードする。

「姉さん……」

「行くよ、フェイト」

アリシアはそのまま蹴り抜き、フェイトは回避する。

フェイトはそのまま空中に移動する。

「空中戦がお望みかな?」

アリシアが右手を振るうとどこからか白色のメダルがアリシアの元に飛んでくる。

《飛行》

飛行のエナジーアイテムによりアリシアの体が空中を浮遊する。

「行くよー♪」

《高速化》

《マッスル化》

さらに二つのエナジーアイテムを取得し、フェイトに攻撃する。

前回と同じく高速化によって速度を上昇させたアリシアの一方的な攻撃が開始され

ると思われた。

「あたしのことを無視してんじゃねえ!」

突然、アリシアの背後に移動していたヴィータの一撃が直撃する。

アリシアは吹き飛ぶがすぐに体勢を立て直し、ヴィータの方を向く。

「私とフェイトの邪魔をするな……」

アリシアからいつもの軽い雰囲気がなくなり、怒りを露にする。

そして腰のギアデュアルを取り出す。

「私の心を滾らせるなよ。この雑魚が……ッ！」

アリシアはゆつくりとギアデュアルのダイアルを回転させる。

《KNOCK OUT FIGHTER!》

《The strongest fist!》 Round 1” Rock & F

ire! The strongest fist!》 Round 1” Roc

k & Fire!》

「大変身……」

《DUAL UP! Explosion Hit! KNOCK OUT FIGH

TER!》

パラドクスの肩に装着されたアーマーが巨大な赤いナックルとなり、頭が回転。

胸の模様も変化した、仮面ライダーパラドクスファイターゲーマーレベル50に変身

する。

「姿が変わった……」

「消えろ」

残留したエナジーアイテムの効果で飛行しているアリシアは高速化の効果で大幅に上昇した速度でヴィータに拳を叩きこむ。

その拳には炎が纏わり、ヴィータの防御を打ち貫いた。

「ガアッ!」

ヴィータは耐え切れずに大きく後方に吹き飛ぶ。

「この程度じゃないぞ。私の楽しみを邪魔した罪は重い……」

高速移動でヴィータの後ろに移動したアリシアは未だに飛ぶヴィータにキックを叩きこむ。

ファイターゲーマーの脚部に装着された『ダイレクトヒットシューズ』。

それはあらゆる防御機能を一時的に無効化し、攻撃を叩きこむ。

勢いよく地面に叩きつけられたヴィータの目の前にアリシアが着地する。

「これでフィニッシュだ……」

「クソ……」

流星のヴィータもアリシアの防御無視攻撃は堪えたのか動ける様子ではない。

アリシアがヴィータの上に立ち、拳を振り上げたその時。

「一閃っ!」

どこからか声が響き、紫電の一閃がアリシアに放たれる。

だが、アリシアはそれを飛びのき、後方に回避する。

「大丈夫か？ ヴイータ」

「大丈夫に見えるか？」

「ヴィータちゃん、後でゆっくり見てあげるから」

「シヤマル、今は目の前の敵に集中しろ」

そんな会話が交わされる、そこに現れたのは残りの闇の書の守護騎士三人だった。

process18 謎の忍者集団襲来!仮面ライダー

風魔の影!

アリシアがヴィータとフェイトと交戦している様子をビルの屋上で眺める俺。
するとそこに恭也がやって来る。

「来たぞ、クロノス」

「ああ、待っていたぞ風魔」

俺と恭也はこうやって変身体の名前で呼び合うようにしている。

そもそも俺はクロノスと名乗っているので恭也はそう呼ぶしかないが。

「クロノス、あの『約束』忘れていないだろうな」

「当然だ。私は約束を違えたことないからな」

恭也との約束、それは数日前に遡る。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

海鳴市、月村邸。

そこで俺は紅茶を飲んでとある人物を待っていた。

その人物は高町なのはの実兄である高町恭也だ。

少しして、部屋のドアが開く。
すると恭也が中に入ってくる。

「お前があのメールの男か」

「そうだ」

恭也は俺の方に近づいてくる。

その手には一本の木刀が握られていた。

「やめておけ、貴様では俺は倒せん」

「そうだと思っか？」

恭也は一気に踏み込んで俺との距離を詰める。

俺は後ろに体重をかけ、椅子を後ろに倒して恭也の突きを躲す。

そのままバク転で恭也から距離を取り、体勢を立て直す。

その直後に放たれた恭也の真一文字切りを頭を下げ回避する。

「ほら、届かない」

「ふっ！」

だが、振り抜いた木刀の進行方向を咄嗟に変え、俺の頭を狙う。

俺はそれを左手で掴み取る。

そのまま思いつきり木刀を引っ張る。

「ツ!？」

恭也は木刀を離し、構えを取る。

「ほう、体術もできるか」

俺は奪った木刀を放り投げる。

「さて、遊びはここまでだ。高町恭也」

「なんだと」

恭也は以前、構えを崩すことなく、俺を睨みつける。

「これから私の言う条件に従え、そうすれば君の大切な恋人を開放しよう」

「……本当か」

「ああ、私は約束と契約は守るからな」

そうすると恭也は考えこみ、やがて構えを解いた。

「それでいい」

「……………」

その後、俺と恭也は契約を交わした。

◆◆◆

「なのはのデバイスを奪い、貴様に渡す事と闇の書の強奪。これが条件だったな」

「そうだ、覚えているならばいい」

恭也はそれだけ確認すると立ち去っていく。

それを見た俺は立ち上がり、ゲーマドライバーを取り出す。

「さて、久し振りに暴れるとしよう」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

一方、アリシアは……

「貴方たち、そのお邪魔虫のお仲間？」

「そうだ」

ふらりと立ち上がったアリシアはシグナムたちの方を向き、睨みつける。

すると上空からフェイトが合流する。

「シヤマル、ヴィータを連れて離脱しろ」

「はあ!? アタシはまだ……」

「ヴィータ、主が心配してしまっぞ」

「っ!? ……わーったよ」

「行くわよヴィータちゃん」

そう言つてシヤマルはヴィータを連れ、離脱する。

「行かせるとでも思つてるのかなあ？」

「行かせてもらおう」

シグナムがアリシアに距離を詰め、剣を振るう。

アリシアはそれを腕のマテリアライズスマッシュャーでガードする。

「白けるなあ……邪魔するなよ」

「そういうわけにもいかん」

アリシアは腕を振るい、シグナムを遠ざける。

シグナムはそれを後方に飛んで回避し、空中で剣を振るい、紫電の斬撃を飛ばす。

アリシアは両手でそれを受け止める。

「はあっ!」

声に気づき、アリシアは振り返る。

するとフェイトの不意の一撃でアリシアは大きく吹き飛ぶ。

「……へえ、不意打ちなんてらしくないね。フェイト」

「私は負けられないから」

「いいねえ……最高♪」

アリシアが立ち上がり、反撃しようとする。

するとアリシアの肩に手が置かれる。

否、手を置いた。

「クロノス……」

「お兄さん……」

俺はアリシアの戦闘を止めた。

「アリシア、終わりだ」

「えー!? 今、楽しくなってきたのに……」

「この場は風魔に任せる。引くぞ」

「はい……じゃあね。フェイト」

「姉さん、待って!」

俺とアリシアはフェイトの制止を無視し、その場を去った。

するとあらゆるビルの上で単眼の忍者集団が出現する。

「これは……」

「気を付けろザフィーラ」

「……ああ」

シグナムにザフィーラ、そしてフェイトは警戒を強める。

その中、とあるビルの屋上で風魔はただ黙ってその場を見ていた。

◆◆◆◆◆

「大丈夫?　なのは」

「うん、ありがとうユーノ君」

ビル内部でなのはユーノの手当てを受けていた。
すると突然、数人の足音が響く。

「誰だ!」

ユーノが振り向くとそこには単眼の忍者。

仮面ライダー風魔の使役する量産兵『忍者プレイヤー』が居た。

「お前たちは何者だ!」

「……………」

ユーノの問いかけに忍者プレイヤーは答えない。

その代わりに忍者プレイヤーたちはその手の小刀を構える。

「戦うしかないか……………」

「ユーノ君。私も……………」

「駄目だよ!… なのは休んでないと……………」

ユーノの意識がなのはに向いた一瞬。

その一瞬で忍者プレイヤーたちはユーノとなのはに一齐に飛び掛かる。

「しまった!?!」

忍者プレイヤーの攻撃が直撃する寸前。

突然、横から放たれた炎が先頭の忍者プレイヤーたちを焼き払う。

忍者プレイヤーたちが怯むと、今度は残りの忍者プレイヤーたちが氷漬けになる。

「誰!？」

なのはとユーノが横を向くとそこには……

オレンジのバリアジャケットを装着したアリサと、紫のバリアジャケットのすずかが居た。

process19 三つの戦い!それぞれの勝利は誰の手に……?

「アリサちゃんにすずかちゃん! その姿は……?」

「えっとー、これはね……」

「うん……」

二人は顔を見合わせ、黙りこんでしまう。

だが、アリサがユーノを指差して大声を上げる。

「そ・れ・よ・りッ! そっちの男の子は誰よ!」

「えーつと……」

今度はなのが黙り込んでしまう。

「それに、アタシたちに黙って何してるかと思えばずっとこんなことしてたの!」

「アリサちゃん、落ち着いて……」

興奮した様子でなのは問い詰めるアリサをすずかが止めに入る。

それに勇敢にも声をかけたのはユーノだった。

「とりあえず、お互いの情報を共有しないかい?」

「……それもそうね」

ユーノの一言で落ち着いたアリサはゆっくりと口を開いた。

「正直に言うとおアタシもすずかもなんでこんなことになったのかわからないのよ」

「この前、突然お爺さんから貰った宝石が光ったと思ったら……」

「この姿になったのよ」

アリサとすずかの話を聞いてユーノは考える仕草を取った。

（お爺さんに貰った宝石か。それがデバイスなんだろうけどそれを持っているお爺さんか……）

「ユーノ君！」

「へっ？ なっなに？」

突然声を掛けられ、ユーノは素っ頓狂な声を上げた。

「しっかし、なのはがそんなことをねえ……」

「いつものなのはちゃんからは想像できないよ」

「にやはは……まあ、初めは成り行きで……」

三人はある程度話していたのか各々の表情を浮かべていた。

そんな話していると割れた窓から忍者プレイヤーたちが入ってくる。

「話は中止ね！」

「うん!」

「いこう! ユーノ君!」

「任せて!」

四人は戦闘体勢を取り、忍者プレイヤーは走り出した。

一方、シグナム、ザファイラ、フェイトは忍者プレイヤーとの戦闘を行っていた。

「くっ……」

フェイトは一人で六人の忍者プレイヤーを相手にしている。

だが、忍者プレイヤーのコンビネーションに翻弄され、防御に徹していた。

「なんて強さ……」

フェイトの一言と共に四人の忍者プレイヤーが一気に襲い掛かる。

「はあっ!」

が、フェイトの振るうバルディッシュの一振りが四人の忍者プレイヤーを一掃する。

その一瞬の隙を図り、残った二人が背後からフェイトに強襲をかける。

「しまっ……」

「おりゃあああああ!」

その攻撃はフェイトには届かない。

どこからか参戦したアルフの一撃が二人の忍者プレイヤーを吹き飛ばした。

「ゴメン、アルフ。ありがとう」

「気にしないでいいよ。それより、なんなんだい？ こいつら……」

「さあ……たぶん、クロノスの私兵だと思う」

「クロノス……」

アルフは表情を険しくする。

フェイトはそれを見てどこか悲しそうな表情を浮かべた……



「一閃ッ！」

「破ッ！」

シグナムの一振りとザフィーラの一撃がそれぞれ忍者プレイヤーを消滅させる。

「こいつらは一体何なのだ……」

「わからんが……おそらくあの二人組がけしかけたのだろう」

二人が会話を交わしていると二人に忍者プレイヤーが二人ずつ飛び掛かってくる。

「だが、まあしかし……」

「ああ……」

二人は襲い掛かった忍者プレイヤーを消滅させた。

「倒さねばならない事には変わりはない!」

シグナムは未だに十人以上に残る忍者プレイヤーたちに剣を向けた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

その頃、風魔は闇の書を持って逃走したシヤマルとヴィータと交戦を開始していた。

「ちよこまかと動くんじゃねえ!」

「……………」

ヴィータの攻撃は一撃の威力こそ高いが俊敏性にやや劣る。

そんな攻撃では俊敏性に高い数値を誇る風魔を捉えることは不可能に近い。

だが、それは『ヴィータ』のみだったらの話だ。

「クラールヴィント!」

シヤマルの防御魔法が風魔の攻撃を抑える。

「すまねえ、シヤマル。助かった」

「気にしないで。ヴィータちゃんはそのまま攻撃を仕掛けて」

「おう」

再び、ヴィータが攻撃を開始する。

「……………そんなものは当たらない」

「お願い、クラールヴィント!」

シャマルの支援攻撃によって風魔の動きが突然停止する。

「砕けやがれ！」

ヴィータがアイゼンを天に掲げる。

するとアイゼンは巨大化していき、最終的にビルを一撃で粉碎できるほどまでに巨大化する。

「轟天爆砕！ ギガントシユラーク！」

ヴィータがその必殺の一撃を振り下ろした。

《Pause》

世界から色が消滅し、あらゆる動きが停止する。

その中で動く、唯一の存在。

仮面ライダークロノスはゆっくりと闇の書を持つ、シャマルに近づいていく。

「実力を知るためにわざわざ泳がせていたのだが、期待外れだな」

俺はシャマルの持つ、闇の書をシャマルの手から奪い取る。

「この程度では俺の計画は揺るがない」

俺は装着していたバグヴァイザードライをアイゼンに向ける。

《キメワザ》

《Critical Judgment》

巨大なエネルギー弾がアイゼンに命中し、その軌道は大きくずれる。

「さて、風魔の処分は後にして。撤収するとしよう」

俺は風魔を掴み、その場から消滅した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

時間が再び動き始める。

「なっ!?!」

ヴィータの一撃は大きくずれ、空振りしてしまう。

「闇の書が!」

シャマルも自分が闇の書を持っていないことに気づく。

「どうなってるんだよ……!」

ヴィータのその問いかけに答える者はいなかった……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

拠点に戻った俺はいつもの様に拠点の椅子に座り、コーヒーを飲んでいた。

「お兄さん、目的のものは手に入れた?」

「ああ、全て計画通りだよ」

俺は笑みを浮かべ、デスクの上に置かれた闇の書を見ていた。

アリシアはその様子を不思議そうに眺める。

「それで、その本で何をやるの？」

「蘇らせるのさ」

「何を？」

アリシアは不思議そうな表情を浮かべる。

それに対し、俺は笑みを浮かべ、闇の書を持ち上げる。

「闇の書の闇『ナハトヴァール』と永遠結晶『エグザミア』、構築体『マテリアル』をな……」

process20 闇の書復活準備開始。政宗の暗躍。

闇の書の強奪に成功した俺は拠点でいつもの様にコーヒーを飲んでいた。

すると奥の部屋からアリシアがぐったりとした様子で出てくる。

「全く、お兄さんの鬼畜ぶりには驚かされるよ……」

「ご苦労。しばらく休んでいいぞ」

「はい……♪」

気の抜けた返事をしたアリシアは倒れるようにソファにうつ伏せに倒れる。

アリシアには闇の書内部に侵入し、データの収集を行わせていた。

だが、内部はかなり複雑な上に深く、長いのだ。

解析と収集にはかなりの時間を要するだろう。

「当のアリシアがこのぎままではない……」

闇の書内部のデータは広大で複雑を極めている。

おそらくどうかほぼ確実に数か月かかるだろう……

「さて、私は目的達成にスパイスを加えるとしますかね、ここからは自己満足つと」

俺はソファから立ち上がり、アリシアを軽くたたく。

「なあに？」

アリシアがだるそうに顔を上げる。

「しばらく出かける、引き続き解析を進めろ」

「あいあい……♪」

アリシアはそのまま顔をソファに埋めた。

「さて、行きますか」

俺は荷物をまとめ、目的の場所に向かった。

◆◆◆

俺は目的地に向かう最中に携帯を取り出す。

「一報くらいは入れておくか」

携帯に番号を入れ、通話をかける。

その通話先は……

『はい、八神ですが』

電話の声の主ははやてだった。

「もしもし、すぐにそちらに向かいますので」

『え？ 政宗？ なんで!?!』

「すぐにそっちに向かう。すぐに着くから待っていてくれ」

俺は返事を待たずに電話を切った。

「行きましようかね」

俺は携帯をしまい、八神家に向かった。

◆◆◆◆◆

八神家の前に到着した俺はドア横のチャイムを押した。
すると少しして、ドアが開かれる。

ドアの先に待っていたのは……

「まーさーむーねー？」

笑顔のはやてが待っていた。

そう、笑顔だ。

だが、微笑みや嬉しいといった好感情からくる笑みではない。

一線超えた怒りからくるなにかを超越した笑みだった……

「あの、はやてサン？」

「なにかな？」

「お顔が怖いですよ？」

「そうかな？ 笑顔だと思っけどなあ……」

標準語になつてゐる……

「……とりあえず上がつて」

「お、おう」

恐る恐る俺は中に入った。

前のようにテーブルの椅子に座り、はやての方を向く。

「なんで、突然いなくなつたん？」

はやてが俺に顔を向けずにそう言つた。

「いろいろと立て込んでしまつてな」

嘘は言つてないですよ？ 重要な部分隠してゐるだけで。

「そうか……それじゃあ、また一緒に暮らせるか？」

「おう、そのために戻つてきたんだしな。もちろんはやて次第だが……」

「うちはええよ、むしろお願いや」

「おう、またお世話になるよ」

「はい♪ よろしゅうな」

俺の方に振り向いたはやてはやさしい笑顔でこつちを向いた。

そして、何かに気づいたように手をポンと叩く。

「そーや！ 政宗にシグナム達を紹介せないかな」

「シグナム？ 誰だそれは」

俺は当然知らないふりを決め込む。

「私の新しい家族やで、シグナムにシヤマルにヴィータにザファイラ。皆、大切な家族や」

「そうか」

俺ははやてに笑みを向け、自室に向かった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

数か月振りの自室だったが何も変わっていなかった。

きつとはやてが残しておいてくれたのだろう。

「こういうのはうれしいものだな」

そう言つて俺は準備を始めた……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「政宗ー！ 降りてきてー！」

下の階からはやての声が聞こえてくる。

「今行くー！」

俺は準備をいったんやめて一階に移動した。

俺が一階のリビングに移動するとそこにははやてと四騎士が集合していた。

「紹介するな。私の最初の家族の十六夜政宗や」

はやてが四騎士に俺を紹介すると四騎士がこっちの方を向く。

ちなみにザフィーラは犬状態。

三人は普通の表情だが、だた一人、ヴィータは警戒心剥き出しの表情を浮かべていた。

「おー、こわこわ。そんなに怖い顔しないでほしいなあ」

「うっせー！ はやてを一度見捨てた癖に！ なんで戻ってきた！」

主人思いのいい臣下だこと、だが、うざいな。

「そんなに怒るなよ、俺だって事情があるんだ。今回は戻るように頑張つてやつと戻ってきたんだぜ？」

「ふざけんな！」

「ふざけてないさ、俺からしたら君たちの方がはやての家に住み着いてるよくわからぬ奴らだぜ？ 大方近所の人たちにははやてが「親戚の人たちなんですよ」とでも言うているのだろうか？」

俺の言葉にははやてがびくりと体を震わせる。

どうやら当たっているらしい。

「だったらお互いに事情を話し合おうぜ？ これじゃ拉致が開かないだろ？」

「そんな必要ッ！」

「落ち着けヴィータ。十六夜の言い分ももつともだ。ここは話すほかあるまい」

ヴィータが再び俺に嘸みつこうとしたがシグナムがそれを止める。

「シグナム！ だつてこいつは！」

「お互いが自分の主張をしていては意味がない。それに主がいいと言っていることだ」

「ツ！……わかつたよ」

ヴィータはシグナムに看破され、多少落ち着いたのかソファに座った。

「さて、まずは我々の事情から話そう。実は私たちは……」

シグナムが事情を話し始める。

それから数時間、俺はシグナム達の話聞いていた……

process 21 ヴィータ攻略作戦！ 政宗の苦

悩。

双方の事情を説明した次の日。

俺ははやて、ヴィータとともに最早おなじみとなったショッピングモールに来ていた。

「ヴィータ、そろそろ政宗とも仲良くしてくれへんかな？」

「いいのによ！ こいつははやてを……」

「ええよ、現にこうやって帰ってきたやろ？」

昨日の夜からヴィータの俺への好感度は見ての通り最悪だった。

昨日からこの調子で正直、面倒くさい……

そんなことを考えているとヴィータがこちらに振り向き、指差す。

「いいか！ アタシはお前の事、これぼっちも信用してねえからな！」

「はいはい」

俺は軽くヴィータをあしらいつつながら、ふと違う方向に視線を向ける。

するとそこにはなのは達の姿があった。

「はやて、あそこにいるのって……」

「んー? あつ! アリサちゃん、すぐかちゃん!」

俺が教えるとはやては大声で二人を呼び、大きく手を振る。

それに気づいたアリサたちがこちらに向かつて来る。

「はやてちゃん、おはよう」

「ハロー、はやて。政宗もハロー」

「おはよう、二人共」

「二人共おはよう」

俺たちが挨拶を済ませるとなのはとフェイトが後ろからついてくる。

「アリサちゃん、すぐかちゃん。そっちの三人は?」

「紹介するね。こっちは私たちの友達で」

「十六夜政宗だ」

「夜神はやてやでー」

俺とはやては笑顔で対応する。

だが、なのはとフェイトは渋い顔をしている。

後ろのヴィータはなのはとフェイトを睨みつけていた。

「せっかくあったことやし、皆で買い物しよか♪」

はやてがそう提案するとヴィータが何かを言おうとするが言葉にはしなかった。
「それじゃ行こか♪」

はやての一言によつて俺たちは一緒に買い物をする事になった。



「フェイトちゃんはどんな携帯がいいの？」

「うーん……いまいちよくわからないかな……」

なのはとフェイト、アリサにすずかにはやての五人は一緒に携帯を見ていた。
つまり、俺は今ヴィータと二人きりだった。

「……………」

「……………」

一言も交わすことなく時間が過ぎていく。

少しして、ヴィータがふと視線を逸らす。

その先にあつたのはアイスクリームシヨップだった。

「……………食べたいのか？」

「はあ!?! んなわけねーだろ!?!」

口ではそう言うがちらちらとシヨップの方に目を向け、明らかに欲しがっていた。
それを見ていた俺は無言で立ち上がり、アイスクリームシヨップの前に立つ。

アイスクリームを二つ頼み、元の席に戻る。

そして、ヴィータにアイスを差し出す。

「ほれ」

「いらねーって……」

「貰えるものは貰っておけ」

「……おう」

ヴィータは俺の手からアイスを受け取るとそれを頬張る。

ヴィータは目を見開き、どンドンアイスを頬張っていく。

「うまい」

「そうか、よかったな」

俺もそんなヴィータを横目にアイスを舐める。

「あつ、ヴィータ。アイス食べてんの?」

はやてたちと合流し、俺はさらに追加でアイスを買うことになった……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

一方、政宗の拠点では……

「うーん……どうすればいいのかな」

私はソファに寝転がって考え事をしていた。

フェイトとは二回戦った。

一度目は風魔にクロノスの意志によって中断され、二回目はあの赤い女の子に邪魔された。

まるで、運命が私とフェイトの決着をつけさせないようしているかのよう……

それにフェイトももっとももっと強くなるだろう。

私の妹のような存在であり、心の優しいフェイトだから……

私を止めるために強くなっていくだろう。

もっと、もっと強くなって徹底的にフェイトを倒す。

クロノスの邪魔が入る前に……いや、『この世の何者』でも私のこの気持ちを妨害はさせない。

そう、例え、あのクロノスでも……

私は立ち上がり、クロノスの研究室に入る。

その机の上にはクロノスが予備として準備してあるゲームドライバーが置かれていた。

「これが使えれば、きつと……」

私はゲームドライバーを手に取り、腰に当てる。

ゲームドライバーが装着される。

私は自分の持つ、ガシヤットギアデュアルをスロットに差し込む。

だが、ゲームドライバーは起動せず、静寂が辺りを包む。

「ダメか……」

私はドライバーを外し、机の上に戻す。

「人間じゃなきゃ使えないゲームドライバー。これを使えるようになれば……」

私は唯一の希望を見つめ、クロノスに頼まれた仕事に戻った。

◆◆◆◆◆

時は遡り……昨夜。

恭也は夜空を見上げ、人質となった忍の事を考えていた。

クロノスは無事だと言っていたが、奴が真実を話すとは思えなかった。

どうにかして忍の居場所を見つけ出さなければならぬ。

「……なのは」

家族には俺は今、遠くに出かけていることになっている。

なのはは風魔が俺だとは夢にも思っていないだろう。

「必ず、助ける」

俺は夜空に輝く星たちを見つめ、再び誓いをした……

process22 政宗の休日。秘密の資金源。

あのショッピングの日から数日。

あれから俺とヴィータの仲は少しだが良くなった。

なぜか？ 昼間に騒がれなくなったのは大きな進展だと思っただが……

そして、俺は今、とある場所にいた。

「おはようございます。政宗様」

ゲームコーポレーション。

そう、俺がはやてに追い出されたといったあのゲームコーポレーションだ。

実はというか分かると思うが俺は追い出されてなどいない。

ここが俺の資金源なのだ。表向きの社長は別の者に任せている。

今日はそいつに用があるのでここにいる。

そんなことを考えながら、俺は社長室に向かった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

社長室にノックが響く。

「ごうごう」

社長室に入ってきたのは社長の政宗殿だった。

「これはこれは社長殿。お久しぶりですね」

「ああ、久し振りだな。どうだこっちは」

「貴方様に任された『例のモノ』の開発は順調です。今月中にはいい報告が出来るかと」
「それならいいのだ」

政宗殿は社長室の窓から外を見る。

「ここはいい。ここにいると自分が支配者だと実感できる」

「ええ、全くですね」

政宗殿は身を翻し、客人用の椅子に腰かける。

「此方の椅子にお座りになつては？」

ボクは社長椅子を政宗殿に進める。

「いや、普段の生活上、こういう椅子の方が落ち着くのだ。お前が座ればよい」

「いえ、ボクもそちらに行きますよ」

そう言つてボクは政宗殿の前に腰掛ける。

政宗殿は体勢を整え、ボクと向かい合う。

「今日は貴様に頼みがあつてきた」

「ほう……それはなんででしょう？」

「私は今、奴らと同棲状態で手を出せないのだ」

「ええ、存じております」

「だから、貴様にアリシアと協力して奴らの妨害をしてもらいたいのだ」

「えっ!? 彼女とですか!?!」

「何を驚く。貴様らは『姉弟』のようなものだろう」

「いや……そういう問題では……」

ボクは彼女。『アリシア・テスタロツサ』が苦手だ。

いや、苦手ではない彼女に与えられたボクの傷は未だに癒えずにいる。

『寄らないでくれないかな?』

その一言でボクの心で何かが壊れた。

徹底的に、木っ端みじんに。

「貴様の能力は実に役に立つと思っっているよ。『ラヴリカバグスター』」

「ここでは『天ヶ崎恋』で通っていますのでそっちでお願いしますね」

政宗殿は怪しい笑みを浮かべ、ボクではない、何かを見つめていた……

◆◆◆

一方、その頃。

仮面ライダー風魔こと、高町恭也とはある場所に向かっていた。

「クロノスの奴、俺に面倒事を押し付けたな……」

政宗は恭也に闇の書の完成を命令した。

恭也はそれに従い、闇の書を持って目的地に向かっていた。

「……こうも早くこの時が来るとはな」

恭也がそんなことを考えていると、なのは達がこちらに向かってきた。

「許せ、なのは」

そう呟き、恭也はなのは達の元に向かった。

◆◆◆

なのは達が喋りながら歩いていると、その前に恭也が立ち塞がる。

「お兄ちゃん！ 帰ってきたんだ」

「……………」

恭也は何も言わない。

なのははその雰囲気を読み取ったのか、身構える。

「お前たちのリンカーコア、回収させて貰うぞ」

恭也はゲーマドライブバーを装着し、ガシヤットを取り出す。

「お兄ちゃんが……敵？」

「なのは！ 来るわよ」

「なのは！」

《HURRICANE NINJA》

「変身」

ゲーマードライバーにガシヤットを挿入し、レバーを展開する。

《ガシヤット！ ガッチャーン！ レベルアップ！ マキマキ！ 竜巻！ ハリケーン
ニンジャ！》

背中から小太刀を二本引き抜き、構える。

それと同時に四人の忍者プレイヤーがどこからか現れる。

フェイト、アリサ、すずかは戦闘態勢だがなのはは未だにバリアジャケットすらも纏わない。

「あの時の……」

「まさか恭也さんが敵だなんてね」

恭也こと風魔はなのはに刀を向ける。

「戦う気が無いならここを去れ」

「……戦うよ。私がお兄ちゃんを止める！」

仮面の下で恭也は瞳を閉じ、ゆっくりと言ひ放つ。

「……やってみろ」

五人はそれぞれ構え、戦いが始まった……



……???

荒廃した土地が広がる、何処かに建つ教会。

その教会も廃墟と化してからかなりの年月が経っているのか、天井や壁は崩れ、野風に晒されている。

そんな教会の祭壇であつただろう場所には巨大なプレートが置かれている。

そのプレート前に立つ一つの人影。

オレンジ系の髪色のその少女はどこか変わった雰囲気を感じていた。

少女は教会の中から灰色の空を見つめる。

「もうすぐよ、もうすぐ……」

少女は呟くように言葉を紡ぐ。

「私の復讐がもうすぐ始まる……」

少女は一変してまるでおもちゃを与えられた子供のように無邪気な笑みを浮かべた。

「今度はあなたから全てを奪ってあげるわ……『ユーリ』」

少女は虚ろな瞳で虚空を見つめ続けた。

process 23 恭也VSなのは！ぶつかり合う信

念！

恭也が構えると忍者プレイヤーが四人に向かって走り出す。

「なのは！ あの忍者たちはあたしとすずかに任せて、フェイトと一緒に恭也さんの相手をよろしくね！」

アリサはそう言うのとフレイルムアイズを振るう。

フレイルムアイズの生み出した炎の壁が忍者プレイヤーを囲む。

「なのはちゃん！ 恭也さんの事、任せたよ！」

アリサに続き、すずかも忍者プレイヤーに向かう。

「こつちよ！ 忍者軍団！」

忍者プレイヤーたちはアリサとすずかの方へと向かっていく。

残ったなのはとフェイト、そして恭也が向かい合う。

「どうした？ 来い、なのは」

「行くよ！」

なのはの一言でフェイトが恭也に突撃する。

その一撃を恭也は刀一本で防ぐ。

「なのはのお兄さん。あなた何で、クロノスなんか……」

「君には関係のないことだ」

恭也はフェイトを突き放すと回転蹴りを繰り出す。

フェイトはそれを後ろに大きく仰け反ることで回避する。

「ふっ! はっ!」

恭也は二回、三回と続けて蹴りを放つ。

二発目までは回避できたがフェイトは三発目の蹴りを受けてしまう。

「ぐっ……」

黒い風のようなものが纏った恭也の蹴りはフェイトに大きなダメージを与える。

「ディバインシューター!」

5発の魔法弾が恭也に放たれる。

「甘い!」

恭也はディバインシューターを小太刀と足技ですべて撃ち落としてみせる。

「この程度か?」

「まだまだ!」

するとなのはの後ろからフェイトが飛び出し、バルディッシュを振るう。

「アークセイバー！」

バルディッシュから放たれた光刃が恭也に向かっていく。

「ディバインシューター、拡散発射！」

魔法陣から放たれた魔力弾はそれぞれが四方八方へと飛んでいく。

「成程」

恭也は正面のアークセイバーを正面から切り捨て、数回宙返りする。

すると、魔力弾はぶつかり合い、消滅してしまう。

「斬撃で意識を逸らし、敵に向かっていく誘導弾でダメージを与える。いい作戦だが相

手が悪い」

「それだけじゃないよ！」

「なに？」

恭也は後ろに気配を感じて振り返る。

そこにはバルディッシュを振りかぶったフェイトの姿があった。

「はあッ!!」

流石に対応しきれず、恭也はフェイトの一撃をもろに受けてしまう。

「がッ……」

すぐに体勢を整え、反撃する。

フエイトをすぐに退避し、攻撃をかわす。

「クロノス程絶望的な相手じゃない。いけるよ、なのは」

「うんうん。お兄ちゃんはこんなのじゃ勝てない」

なのはがそう言うのと恭也は再び構えを取る。

「この程度では俺はもちろん、クロノスを倒すなど夢のまた夢だぞ」

「聞かせてください! あなたはなんでクロノスに味方してるんですか!」

フエイトが声を上げる。

その言葉には何か大きな思いが込められていた。

「……言っただけだ。関係ないと」

「家族にも……なのはにも関係のない事なんですか!」

「……俺は」

恭也が何かを言いかける。

「はい、そこまで♪」

三人は声の方に向く。

そこにはフェンスの上に腰掛けるアリシアが居た。

足元にはバリアジャケットが解除され、気絶しているアリサとすずかがいた。

「こっちの方はもう魔力の蒐集は完了したから手伝いに来たよ」

「……必要ない」

「ああ、それと」

アリシアの雰囲気が一変する。

さつきまでの飄々とした雰囲気は消え、殺意のようなものを向けている。

「なにを言いかけたのかは追求しないけど、クロノスの不利になるようなことは契約違

反だよ」

「契約？」

なのはが疑問を口にするるとアリシアがそちらを向く。

「そうだよ♪ この男は契約の為に家族を捨てた、酷い男なんだよ♪」

アリシアは笑顔のまま話を続ける。

「話はおしまい。それじゃあ、二人の魔力を回収するね♪」

アリシアがギアデュアルを取り出す。

すると突如アリシアの前に魔力を纏った鉄球が降ってくる。

「見つけたぞ！ この泥棒女！」

上空にはウィータがアイゼンを構えて飛行している。

アリシアは小さくため息をつく。

「ちえっ、これまでだね。じゃあね」

アリシアは粒子状になってその場から消滅する。

「……………」

恭也もその場から走り去る。

「待ちやがれ!」

ヴィータは走り去った恭也を追って行ってしまった。

なのはとフェイトがその場に取り残されてしまう。

「アリサちゃん! すぐかちゃん!」

なのははすぐに二人の元に駆け寄る。

「契約……姉さん、姉さんもクロノスと……」

フェイトはその場に茫然と立ち尽くしていた。

◆ ◆ ◆

「高町なのはとフェイト・テストアロッサの魔力の回収は必要事項だ。必ず回収しろ」

「はーい♪」

「……………」

アリシアと恭也は帰還し、俺の元に集まっていた。

「それと次からはラヴリカがお前たちに合流する。ちゃんと連携しろよ」

「はいはい、任せてー♪」

恭也は何も喋らない。

「ああ、それと。恭也君」

俺は恭也に話しかける。

すると恭也はやつとこちらの方を向く。

「なんだ」

「もしも、今回の仕事を完遂した曙には……貴様の大事な月村忍を解放しよう」

恭也の表情が一変する。

「……本当か？」

「ああ、嘘は言わんよ」

「……解った。必ず遂行する」

それだけ言うと恭也は立ち去る。

「いいの？ 人質を解放しちやって？」

「構わん。最早、奴に商品価値はない」

俺は笑みを浮かべる。

「まさか奴も『肉体と精神が別々になってる』などとは夢にも思っていないだろうしな」

俺は自らの手の上で踊る恭也を嘲笑した。

全てはシナリオ通り、私こそが世界のルールなのだ。

俺はこれからのシナリオを思い浮かべながら、
コーヒーを一口飲んだ……

日常編 01 政宗とヴィータの休日

とある休日の朝、八神家にて。

俺はいつもの日課である読書と一緒にはやての淹れる朝一番のコーヒーを飲んでい
た。

「政宗、今日は私、これから診断があるから。ヴィータの事、お願いな」

「おう」

はやてがそう言うのと朝稽古を終え、部屋で着替えてきたシグナムがリビングに入っ
てくる。

「我が主、お待ちせしました」

「うん、ほな行こか」

はやてのその一言でシグナムが車椅子を押して、はやてとシグナムは家を出てい
た。

それと入れ替わりで完全に寝起きのヴィータが部屋に入ってくる。

髪は寝ぐせでボサボサのまま、パジャマの裾で眠たそうな目をこすっている。

「…………おはよ」

「おはよう、まずは顔を洗って来るといい」

「うん」

だらしない声で返事をしたヴィータはそのまま洗面所の方へと歩いて行った。

それを見送った俺は再び本に視線を戻した。

◆◆◆

「何で俺まで……」

俺は現在、ヴィータに連れられて町内会のゲートボール大会に参加することになっていた。

「どうせ家にいても本読んでもただけだろ？ 丁度助っ人が二人必要だったからさ」

「シャマルが居るだろ？ あいつの方がよっぽどコミュ力高いし、適任だろうが」

「シャマルは今日、はやてに頼まれて買い物に出かけてる」

「ザファイ……いや、何でもない。」

あいつは今、犬だった……人型でも犬耳があるし。

マツチヨな褐色、犬耳の大男と少女とか完全に通報もんだよなあ……

「どした？ 考え事か？」

「いや、俺に逃げ道がないことを察して絶望してる」

俺がそう言うって頭を抱えているとヴィータは俺に一本のスティックを差し出す。

「ほら、お前のステイック」

「ああ、ありがとうさん」

俺はヴィータの差し出したそれを受け取る。

ヴィータは手を離すと俺を指をさして不敵な笑みを浮かべて宣言した。

「トランプではお前に負けてばっかだけど、今日はアタシが勝つ！ 絶対だかんない」

ヴィータはそう言うのを身を翻して自身のチームの方に歩いて行った。

俺とヴィータは夜にトランプゲームを一戦だけやるという謎の約束事がある。

いつも俺とヴィータは参加し、シヤマルやシグナム、はやてを巻き込んで三、四人でやっている。

基本はババ抜きなのだが、ヴィータは絶望的にババ抜きに弱い。

というのもヴィータはโป๊กเกอร์フェイスという物が苦手らしくすぐ顔に出るのでカードが大体読める。

そのため大体、ジョーカーを引かれることなく敗北する。

だが、今日はゲートボール。

ゲートボールは完全にヴィータの土俵だ。

一方の俺は何とかルールがわかる程度な上に経験も皆無。

順当に考えたら勝ち目などない。

「仕方ない、少し本気を出すか」

俺も自身のチームに合流し、作戦会議を開始した……

◆◆◆◆◆

その日の夜、今日も俺とヴィータはトランプの準備をしていた。

「だー！ あの時、こうしてれば勝ってたのに……」

「見苦しいぞ」

結果から言うと、今回は俺のチームが勝利を修めた。

勝利と言ってもかなりの接戦でどちらが勝っても不思議ではなかった。

「ゲートボールでは勝てると思ったのに……」

「残念だったな」

準備を終えて俺が席に着くとはやてがキッチンから出てきて声をかける。

「今日もババ抜きするん？ 私も入れてー」

「ああ」

「シグナム達もやろうや」

「ええ、構いませんよ」

「はい」

はやて、シグナム、シャマルの三人も席につく。

「今日は珍しくフルメンバーか」

「ちよい、ザフィーラの事忘れんといて」

「私はここに」

すると机の下からザフィーラの声が聞こえる。

「ちゃんとフルメンバーだろ？」

「せやな、それじゃあやろ！」

はやてのその一言で俺がカードを配っていく。

すると、昼間の様にヴィータが俺に指をさしてこう言った。

「昼間のようにはいかねーからな！ トランプで勝つてやる！」

俺をそれ聞いて少し笑みを浮かべ、煽るように言う。

「やってみな」

processEX 本日はバレンタイン! 第〇次
チョコレート戦争!

今日は2月14日。

そう、今日はバレンタイン……!

『バレンタイン』、それは世界中の人間がひとつのモノに命を懸ける日……

それは『チョコレート』!

男共は愛する者女子からチョコレートを貰うため。

はたまた貰った者人生の勝利者を打ち倒すために戦争が発生する。

これはそんなチョコレートを貰った者と貰えなかった者たちの戦争の記録である

……

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

皆さん、お久しぶり。

俺、十六夜政宗は今、戦火の真っ只中にいた。

現在、海鳴市ではチョコレート戦争が勃発している。

「死ねえ! モテ男共おとおおおお!」

「返り討ちだ！ 消えろお！ 非リア共！」

人々が各々、武器を持ち出している。

箒、モップ、スコップ、日本刀、盾、銃器。

あちこちから銃声が聞こえ、ツキジめいた光景が広がっている。

ちなみに俺はチョコレートを買える組の総帥として貰えない者を蹂躪していた。

「死ぬがよい」

180cmほどの男が俺の前に立ち、拳を振り上げる。

「はあ」

俺は一瞬で懐に潜り込み、腹に拳を浴びせる。

「アバーッ！」

「オタツシャデー！つと」

大男は盛大に失禁し、その場に倒れ伏す。

「敗者が」

俺は男を放置し、その場を立ち去る。

両腕にチョコレートを抱え、八神家への帰路についた。

今日はやてが早く帰ってくるので、早く帰らなければ……



「しいいしいいしいいねええええええええええ!!」

突然、背後から何者かが攻撃してくる。

それを政宗は見ることもなく躲して見せた、その腕にはチョコレートを無数に抱えている。

「チョコレート人の勝を利者連集合の総帥十六夜政宗え! 俺は貴様をブッコロス!!」

「だったら、まずは殺気を消すことを覚えるべきだな。チョコレート人の生を敗者者よ」

襲撃者は血管を浮かべ、顔を真っ赤にする。

「黙れええええええええええ!!」

「フンッ」

無策に突っ込んできた襲撃者を手刀で気絶させる。

「ゴミが」

俺はさっさと帰ろうとする。

すると俺の前にある人物が立ち塞がる。

「……ほう。貴様が俺の前に立つとは、面白い。かかってくるがいい」

「……………」

第二の襲撃を前に俺はゲームドライバーを取り出す。

すると襲撃者もゲームドライバーを腰に巻く。

俺と襲撃者はそれぞれガシヤットを構える。

「変身」

「……変身」

《Kamen Rider Chronicle》

《—————》

変身した二人の仮面ライダーは向きあう。

それぞれが自らの信念の為に戦いの火蓋が切つて落とされた……

process 24 第二回戦、開幕！ 恭也の覚悟と

なのはの思い……

恭也はなのは達の元に向かいながら任務達成後の事を考えていた。

まさかあのクロノスが無事に忍を返すとは考えにくい。

ならば、この本を使って奴に取引を仕掛けるしか忍を取り返すことはできないだろう。

問題はどうかやって取引まで持っていくか。

どうにかして奴と二人きりで話す機会が出来ればいいのだが、奴の近くには常にあのアリシアが控えているうえに最近やってきたあのラヴリカという男までいる。

ラヴリカの方はいる方が稀だが、アリシアの方が問題となる。

アリシアの実力はおそらく俺と同等、戦闘による拘束は難しいだろう。

それ以上にクロノスが交渉に乗るかが重要だ、奴の実力は明らかに異常だ。

一対一で戦ったら絶対に勝てないだろう。

だからこそ、交渉という場に持ち込む必要があるのだ。

そんなことを考えていると……

「……」
遠いので声こそ聞こえないがなのは、フェイトの二人が集まっていた。

「……何にしてもなのは達と戦うのは変わりない」

恭也はゲームドライバーとガシヤットを構え、なのは達の元に向かった。

◆◆◆◆◆

「ねえ、お兄さん。なんでわざわざ監視なんてしてるわけ？」

恭也がなのは達の元に向かっている最中、俺とアリシアはビルの屋上でその様子を眺めていた。

「なに、単なる暇つぶしさ」

「ふーん……それにしているの？ 彼に闇の書を完成させたら……」

「それを使って私に交渉を仕掛けてくると？」

アリシアは頬を膨らませ、若干不機嫌そうになる。

「構わんさ、奴にはそれしか方法がないのだから。それに奴の結末エピソードはもう決まってる」

それを聞いたアリシアは俺の隣に座り、足をパタパタと動かした。

「まあ、私はお兄さんに従うよ」

「ハハハッ、それでいいのだお前はな」

そう言うとな俺はその場を立ち上がる。

「何処か行くの?」

「ああ、ちよつと『交渉』に行つてくる」

俺はそれだけ言うとなその場をアリシアに任せ、退却した。

◆◆◆

なのはとフェイトは間近となつたクリスマスに備えて準備の為に集まっていた。
「アリサちゃんたちの分もちゃんと準備しないとね」

「うん」

アリシアによつてリンカーコアから魔力が回収されたアリサとすずかは今はまだ寝
ているとの事。

その為、なのはとフェイトの二人で準備のための飾りを買ひに来たという事だ。

「それじゃあ行くかうか」

「待て」

突然、背後から声がかかる。

そこにいたのはゲームドライバーを装着し、ガシヤットを構える恭也だった。

「お兄ちゃん……」

「なのはのお兄さん……」

「貴様らの魔力を回収させてもらおう」

《Hurricane Ninja!》

《ガシャット! ガツチャーン! レベルアップ! ハリケーニンジャ!》

変身し、なのは達の方に走り出す。

「セットアップ」

バリアジャケツトを装着した二人も恭也に向かう。

「待ちやがれ!」

突如、三人の間に鉄槌が振り下ろされる。

そこには戦闘態勢のヴィータとシグナムの姿があつた。

「闇の書を返して貰おう」

「今日こそは逃がさねえ」

すると別の方向から声がある。

「邪魔したらダメだよ♪」

「あなた方は僕の魔力で落として差し上げましょう」

一人は政宗の忠臣であるアリシア、もう一人はラヴリカこと、天ヶ崎恋だった。

「……………」

「どうしたのかな? アリシアさん」

「……話しかけないでくれる?」

「グハツ……そんなところも魅力的ですよ。きつといつか振り向かせて見せましょう」
アリシアは心底いやそうな顔でガシヤットを取り出した。

「それでは、参りましょう」

ラヴリカもバグヴァイザーを取り出し、構える。

「変身」

「培養」

《《Infection!》》

《《Perfect puzzle!》》

《《レッツゲーム! バッドゲーム! デッドゲーム! ワッチャネーム!?》》

《《デュアルアップ!》》

《《ザ・バグスター!》》

《《PERFECT PUZZLE!》》

仮面ライダーパラドクスとラヴリカバグスターが乱入する。

「邪魔者の相手は私たちにお任せ」

「ミスター高町。そちらのレディ達はお任せするよ」

そう言つてアリシアとラヴリカはヴィータとシグナムの前に立つ。

「邪魔をしないでもらおう」

「どきやがれ」

「そういうわけにもいかないな」

「ええ、あなた方は我々がお相手いたしましたしょう」

四人が向き合う中、恭也たちも向かい合っていた。

「お兄ちゃん……」

「最早、話すことはない。いくぞ……」

恭也がゆっくりと腰を落とし、構えを取る。

フェイトも自分の愛機を構える。

「……いくよ」

なのも杖を構える。

三勢力がぶつかる乱戦が始まろうとしていた。

◆ ◆ ◆

一方、俺はとある場所に来ていた。

「覗き見とはいい趣味ではないか」

「ツー！」

俺が声をかけると男は此方に振り向く。

男は仮面を被り、素顔を見ることはできない。

だが、俺にはそんなものは必要ない。

「なに、そう身構えるな。私は交渉をしに来たのさ」

俺は姿を目の前の仮面の男に変化させる。

「君たちの目的の達成の為に協力してあげよう。主人の元に案内してもらおう」

仮面の男は突然蹴りかかってくる。

俺はそれを軽くいなし、裏拳を放つ。

「ちっ」

仮面の男はカウンターで回し蹴りを放つがその足を掴み、地面に叩きつける。

「グハッ」

「分かっただろう、君『達』では勝てない」

俺は仮面の男の仮面を掴む。

「この魔法を解いたらどうだ？ 君達が二人で変身しているのは知っているぞ」

「……分かった」

仮面の男は変身を解く、すると猫耳と尻尾を生やした二人の少女になる。

「いいよ、あんたを案内してあげる」

「ちよつとアリア」

「ロツテ、こいつの言う通りだよ。私たちじゃ勝てない」

「……ちえ」

リーゼ姉妹は向きを変え、歩き出す。

「ついてきなよ、私たちのご主人様のところ案内したげる」

「ハハハ、それでいい」

俺はリーゼ達の後ろついて行った、最後のピースを揃えるために……

process 25 大乱戦!守護騎士VSなのは・ フェイトVS政宗組。

なのはのデイベインシューターの弾幕を恭也は次々と切り落としていく。

「ハアッ!」

フェイトの不意打ちにも対応し、攻撃を刀で受ける。

「何度やっても、お前たちのコンビネーションでは勝てない」

「やっぱり、通用しない……」

「そいつを返しやがれ!」

ヴァイータが攻撃を受け切った恭也にアイゼンを振り下ろす。

「おっと、ダメダメ」

《《高速化》《鋼鉄化》《マッスル化》》

それを見たアリシアが恭也の前に立ち、即座にその攻撃を鋼鉄化した状態で受ける。

そのままアイゼンをマッスル化で増幅された力でヴァイータに押し返す。

「邪魔すんな!」

「そりゃ、邪魔するよ」

すると今度はシグナムが恭也に接近しようとする。

その前にはラヴリカが立ち塞がる。

「邪魔をするな！」

「あなたのようなレディの頼みなら退きたいのですが、こちらも色々ありますね」

シグナムの一閃がラヴリカに直撃する……

《MISS》

「ダメダメ、暴力じゃボクを『攻略』できませんよ」

「攻撃が通用しないだと……」

自身の攻撃が一切通用していないことにシグナムは一瞬驚愕の表情を浮かべるが、すぐに切り返し、ヴィータの元に飛行する。

「あちらの男、ふざけた見た目だが、かなり厄介だ。私の攻撃が一切通用していなかった」

「こつちもだ、厄介だな……」

苦虫を噛み潰したような表情のヴィータに対して、シグナムは冷静な表情で戦況を見回す。

「ヴィータ、私があの人を引き付ける。その間に……」

「おう、任せろ」

二人は頷き合い、別々の方向に飛行する。

「行かせないよ」

「行かせてもらおう」

シグナムがアリシアの前に降り、レバンティンを振るう。

「危なッ!」

アリシアは瞬時に身を引き、シグナムの一閃を回避する。

「今のを躲すか」

「ちえっ……ラヴリカ!」

「了解しました」

アリシアの声を聞いたラヴリカがヴィータの元に向かう。

「させん!」

「そっちが足止めなら、こっちもそうするね」

《鋼鉄化》

鋼鉄化で防御力を上げ、シグナムの攻撃を片手で防ぐ。

◆◆◆◆◆

恭也はなのはの遠距離攻撃とフェイトの近接戦闘に対応しきり、要所要所で反撃もしていた。

「そろそろ、二人には沈んでもらう」

恭也はバルディッシュの柄を掴む。

「ッ!?!」

「ハア!」

そのまま、フェイトを引き寄せて腕を掴み、なのはの方に投げつける。

「きゃあああ!」

投げられたフェイトがなのはに衝突し、なのは共々地面に墜落する。

「止めを刺してやろう」

《ガッシューン……》

ドライバーからガシャットを引き抜き、キメワザスロットに装填し、ボタンを押す。

《ガシャット! キメワザ!》

すると、二本の刀に黒い煙のようなエネルギーが収束される。

そして、刀を構えた恭也はもう一度、スロットのボタンを押す。

《HURRICANE CRITICAL STRIKE!》

構えた二本の刀を高速で回転させると二本の強力な竜巻が発生する。

竜巻は二人に直撃し、大きく後方に吹き飛ばした。

「きゃあああああ!!」

二人のバリアジャケットは解除され、地面を数回転がる。

二機のデバイスは主人の元から離れ、地面に叩きつけられる。

そのボディは恭也の一撃で大きく破損していた。

「お前たちの魔力、回収する」

恭也は闇の書を取り出すと、独りずに自身の白紙のページを開き、二人に向ける。

すると、二人の体から黄色の桜色の球体が出てくる。

球体からそれぞれの球体と同じ色の文字のようなのが闇の書に吸収されていく。

「あつあああつあああああああ！」

「ぐうつあああつああああああ！」

二人は苦悶の表情と声を上げると同時に闇の書の白紙のページが文字で埋まっ
ていく。

「……………」

ページはどんどん埋まっ
ていく、するとやがて闇の書のページが全て文字で埋め
尽くされた。

「回収完了。撤収する」

恭也は完成した闇の書を持ち、その場を走り去る。

「待て！」

それに気づいたヴィータが急いで恭也の方に向かおうとするが……

「ノンノン、ボクの前で他の男についていこうとするなんて」

ラヴリカがその前に立ち塞がる。

「どきやがれ！」

ヴィータがアイゼンを振るう。

《MISS》

「オラオラオラ！」

ヴィータは何度も何度もアイゼンをラヴリカに叩きつける。

《MISS MISS MISS》

「ハハハ、無駄無駄」

ジャンプしたアリシアがラヴリカの横に着地する。

「撒収」

「了解しました。それでは」

アリシアとラヴリカはオレンジ色のノイズのようなものとともにその場から消える。

「待ちやがれええ!!」

ヴィータの叫び声が海鳴の町に木霊した。



一方、クロノスはリーゼロッテとアリアの案内でギル・グレアムの前に腰掛けていた。
「それで何の用かな」

「私はただ『邪魔をするな』といいに来たのさ」

「……………」

俺はソファから腰を上げ、グレアムに背を向け、笑みを浮かべる。

「私は闇の書を復活させ、海鳴の町に開放する」

「なに……………」

グレアムは驚愕の表情を浮かべる。

「我々は世界を支配するのだよ、この私こそが世界のルールだとこの世界に息巻く全ての生命に教えてやるのだ」

「正気か? お前」

ロッテが政宗の方を向き、睨みつけるような表情でそう告げる。

「正気だとも、むしろこちらの方が私の本性といえるね」

「管理局も世界中の人間を敵に回して勝てるだけでも言いたいのか?」

今度はアリアが政宗の方を向き、そう言い放つ。

「ハハハハハ! 当然だ! 私はこの世界に宣戦布告する!」

俺はグレアムの方に向き直る。

グレアムの表情は威厳のある、真顔に戻っていた。

「君たちが何をしようが、運命という名のゲームのエンディングは変わらない！」
俺は両手を天に掲げ、かつてない笑顔で叫んだ。

「我々が！ この世界を支配するのだ！ ハハハッハハハハハハハ！！」
高笑いを上げ、俺はその場を後にした。

「……狂人め」

ロツテはただ一言、そう吐き捨てた。

process 26 恭也の離反。決戦！ 恭也VS政宗！

俺は拠点の開けた空間に立っていた。

するとそこに恭也が歩いて向かって来る。

「約束だ、なのは達から魔力の蒐集を終えた」

恭也は闇の書のページをめくり、こちらに見せてくる。

「ご苦労だった、それをこちらに」

「まずは忍の開放が先だ」

恭也は闇の書を閉じ、脇に抱える。

「……良かろう」

俺はバグヴァイザーを取り出し、銃口を地面に向ける。

オレンジ色の粒子が銃口から放たれる。

するとゆつくりと粒子が月村忍の形を成していく。

「……さようなら」

俺は一言、そう告げて、バグヴァイザーに一本のガシヤットを挿入した。

《ガシャット!》

すると途端に粒子は黒く変化し、忍の体を蝕んでいく。

「アアアアツ」

「忍!」

恭也は闇の書を投げ捨てて、忍に駆け寄っていく。

「おい、忍!」

「恭也」

恭也は忍の肩を抱き、抱き上げる。

忍の体にはノイズのようなものが走り、今にも消えてしまいそうだった。

そして、忍は今にも消えそうな声でこう呟いた。

「嗚呼、やつと会えた……」

「喋るな! 今助けて……」

忍は自分の肩を抱く、恭也の手をそつと握ると首を振った。

そして、涙を流して一言、こう告げた。

「恭也、大好きだよ、ずっと……ね」

そう言つて忍はオレンジ色の粒子となつて霧散した。

消える間際のその顔は満足そうな笑みに満ちていた。

「ううっ……あああああああああああ!!」

恭也は喉が張り裂けんばかりの叫び声を上げた。

そして、こちらを睨みつけ、ガシヤットとゲーマードライバーを取り出す。

「貴様は……貴様だけはアアア!!」

「なんだ、せつかく辛い人生の苦しみから解放してやったのに」

《HURRICANE NINJA!》

恭也は即座に仮面ライダー風魔に変身する。

「黙れ……もういい」

恭也は刀を引き抜き、構える。

「貴様だけは……この手で倒す!」

俺はため息をついてベルトとガシヤットを取り出す。

「よかろう、自ら絶版を希望するとは殊勝な心掛けだ」

《KAMEN RIDER CHRONICLE》

「うおおお!」

変身した俺は恭也の突進を受け流す。

恭也は地面を転がり、すぐにこちらに向き直る。

「はっ! ふっ!」

黒いオーラを纏った恭也の蹴りを俺は拳で次々と受け流す。

「ふん！」

刀の一閃が俺に直撃し、俺は後方に後退する。

「流石にやるな、ならばこちらも」

俺は一本のガシヤットを取り出し、起動する。

《ドレミファビート！》

「武装装着、レベル+3！」

《ガシヤット！ ガッチョーン……ガッチャーン！ レベルアップ！》

ゲームウインドウからゲームマが登場する。

そして変形し、俺の頭部から装着されていく。

《アガツチャ！ ド・ド・ドレミファ・ソ・ラ・シ・ド！ OK！ ドレミファビート！》

ビートクロニクルゲーマーとなった俺は早速腕のターンテーブルをスクラッチする。

すると軽快な音楽が流れ始める。

「はっはっはッ！」

俺はリズムに合わせて攻撃をヒットさせていく。

「ふん！」

恭也が反撃の回し蹴りを放つが、俺もそれに対して回し蹴りを放つ。

「ぐあっ」

スベックで勝る上にコンボの影響で上昇した俺の攻撃を受け切れるわけもなく、恭也は後方に吹き飛んでしまう。

「さて、今までの忠義に敬意を表して、一撃で決めてやろう」

《ガッシューン……》

俺はドライバーからドレミファビートのガシャットを引き抜く。

「我がキメワザで絶版になるがいい！」

スロットにガシャットを装填し、ボタンを押す。

《ガシャット！ キメワザ！》

俺の体に黄色のエネルギーが収束する。

スロットのボタンをもう一度押す。

《D O R E M I F A C R I T I C A L S T R I K E》

俺はその場で回転する。

すると回転している状態であらゆる方向から音符弾が一気に放たれる。

「ちいー」

恭也は懸命に弾を捌いていくが、限界がやって来る。

やがて、捌ききれなくなり、もろに無数の音符弾を受ける。

「ぐああああ!!」

地面を転がり、恭也は地に付す。

「おっと、失礼。一撃では決まらなかったようだ」

俺はビートゲーマーを解除して恭也にゆっくりと近づいていく。

「俺は諦めないぞ……絶対に貴様を……」

今にも倒れそうになりながら恭也は俺の元に向かって来る。

「……下らない、嫌いだよ。そういうの」

《ガツシユーン…… ガシヤット! キメワザ!》

クロニクルガシヤットをスロットに装填し、ボタンを押す。

「消えろ」

《RIDER CRITICAL CREWS—AID》

俺の足元に巨大な時計が投影される。

俺の回し蹴りと同時に時計の針が回転する。

「グアああああああ!!」

《終焉の一撃》

必殺の一撃を受けた恭也は空中に吹き飛ばされ、変身は解除される。

生身の状態で地面を転がり、苦悶の表情を浮かべる。

「高町恭也は本日この瞬間を持って、絶版だ」

「俺がそう言い放つと恭也の体からオレンジ色の粒子が上がり、透明になっていく。

「ああ………忍………俺も逝くよ………今、そっちに………」

恭也は天に手を掲げ、握るように拳を握り込んだ。

その動作と同時に恭也の体はオレンジ色の粒子となつて霧散し、天に昇つて行つた。

「愚かな男だ、この私に挑むとは」

俺は恭也が投げ捨てた闇の書を拾い、表紙を軽くはたいた。

「さて、ついに明日はクリスマスイヴか………」

俺は闇の書を脇に抱え、いつもの部屋に移動した。

部屋には恭也が使っていたゲーマドライバーが大きく破損し、地面に落ちていた……

process 27 訪れる戦いの日。政宗の策略。

完成を間近に控えた闇の書を前に俺は今日の事を考えていた。

今日の戦いは過去のどの戦いよりも熾烈を極めることになるだろう。

だが、夜の決戦を前に俺にはやる必要がある。

俺はあの二人に交渉を持ちかけるべく、闇の書を持って拠点から移動した……



時は遡り、一方、政宗が恭也に審判を下している最中の出来事……

アリシアは一人、何処かの廃ビルの最上階で眼下の景色を眺めていた。

町には今日、明日の夜に備える人々で賑わいを見せていた。

そんな町の人々を眺めながら、アリシアは今日の夜の戦いに想いを馳せていた。

「……………きつと、強くなってるだろうなあ」

自身の分身、生みの親が作ったもう一人の自分、フェイト・テストロツサ。

彼女とは今まで何度も戦った。

そして、その全てにアリシアは圧勝し、フェイトを地に伏せさせてきた。

その度にアリシアは心の中でずっと思っていた。

フエイトはきつと強くなると。

自分を超え、その先に進んでいくと。

それがいつなのかは分からなかった。

明日、明後日、一か月、一年、数年、数十年先かもしれない。

だが、今は確信に近い何かを感じていた。

偽物の私は、今日、本物の私を超える。

それが、私には何故か本当に嬉しかった。

これが目標ができるという事なんだろう。

私の前には新たな超えるべき壁が出来ることに私の心が歓喜に震えていた。

「何なんだろう、この心が躍る感覚は……」

今までの戦いの前にはなかった感覚にアリシアは答えを見つけ、笑みを浮かべる。

これが本当の喜びの感情なのだ……

「ああ、心が躍るなあ……最高に」

アリシアは手を強く握り込む。

アリシアの言葉は歓喜に震え、瞳は歓喜に歪む。

「夜が楽しみだなあ、アハハハハハハハハハハ」

アリシアの笑い声はアリシアしかないピルの部屋中に響き渡った。



時は戻り、俺は目的の為に外を出歩いていた。

その途中で俺は足を止める。

「……覗き見とは趣味が悪いぞ」

「それ、あんたが言う？」

俺がそう言うのと物陰からリーゼロッテが姿を現す。

「相手はどうした？ それとも捨てられたか？」

「うっさい。アリアは別の場所だよ」

ロッテはそう言って腕組をする。

「それにしてもちようど良かったよ。私も君たちにもう一度会いたいと思っていた」

「なんだと？」

ロッテの反応を聞いた俺は懐に隠していた闇の書をロッテに投げ渡す。

ロッテはそれをキャッチしてこちらを睨む。

「この前は邪魔するなど言っておいて、何の風の吹きまわしだ」

「なに、利害は一致している。ひとまず協力しよう」

俺は指を立てて話し始める。

「一つ、我らは双方共にまずは闇の書を復活させなくてはならない。二つ、そのためには

守護騎士が邪魔だ」

「……いいいぜ、協力してやろうじゃんか」

「それでいい」

ロツテの答えに満足し、俺は笑みを浮かべる。

「それでは作戦を伝える。まずは……」



同時刻、ゲナムコーポレーション。

「この社長代理を務めるラヴリカこと天ヶ崎恋は研究室に赴いていた。

「諸君、ガシャットの方はどうかね」

「社長殿、ハードの方はもう終わっています。後はソフトです」

「研究員の一人が恋の方に向かってきて話す。

「うむ、あのお方のご命令だ。しくじるなよ」

「ええ、存じております」

恋はそう言うくと進み始める。

「ソフトはどのくらいできている？」

「現在回収できているデータはすべて入れました。おおよそ30パーセント程かと」

「そうか、もうじき40%は埋まると仰っておられたから、残りの30%か」

「そちらはあのお方に任せた方がいいかと」

「それもそうだな。引き続き頼むよ」

「はっ！」

恋がそう言つて研究室を立ち去ると研究員はお辞儀をした。

部屋を出た恋は歩を進めていく。

「そろそろ政宗殿が言つておられた時間だ。とつておきの格好で行かなくては恋はネクタイを整えながら、今日の服装について考えていた。」



夕方の現在、拠点には政宗、アリシア、ラヴリカが集結していた。

「もうじき夜になる。準備はいいな」

「問題ないよ」

「此方もです」

「では、行くとしようか。今日が我らが世界を支配するための記念すべき聖夜となるのだ」

アリシアとラヴリカが持ち場に向かうと俺も立ち上がる。

「さて、行こうか。今日は美しい聖夜ではない、惨劇の聖夜となるのだ」

俺は今日の夜へ想いを馳せながら八神家へと向かった。

日常編 政宗と八神家の最後の夜

クリスマススイヴの前日、俺が八神家で過ごす最後の日。
これはその日の夜の事である……



「明日はクリスマススイヴやけど、政宗は何か予定ある？」

はやてが突拍子もなくそんな事を言ってくる。

「なんだいきなり？」

「いや、前からやけど政宗は重要な時にいつもおらへんなあって」

少し悲しそうな表情ではやてはそう言った。

「明日はちよつとしたサプライズがあるから楽しみにしとけ」

「そうか、楽しみにしとくな」

はやては俺の一言で安心したような笑顔を浮かべた。

それを聞いて俺が考え事していると突然、謎の破裂音が響く。

「はやてちゃん！ 突然、鍋が火を噴いたの！」

焦った表情でキッチンからシャマルが駆け出てくる。

それに対して俺は……

「そんな馬鹿な」

「ひどい!？」

俺達がコントのような会話をしていると焦げたようなにおいが充満しはじめる。

「まじか……」

俺とはやてがキッチンに駆けこむと確かに鍋が火を噴いていた。

少しすると消火器を持ったシグナムと焦った様子のヴィータがキッチンに駆け込ん
でくる。

「どけ! 十六夜!」

シグナムの一言で俺が避けるとシグナムが消火器を噴射する。

鎮火したのを見届けた俺たちはテーブルを囲って集合していた。

「さて、キッチンが使えなくなったのだが……」

「外で買って来るほかあるまい」

「うー……ごめんなさい」

シヤマルが申し訳なさそうに頭を下げるとヴィータが口を開く。

「それよりもさ、買い出し。誰が行くんだよ?」

「うちは行くけど……」

「無論、私もです」

「俺はキツチンの修復をしなければならぬから無理だ」

「その手伝いです……」

「アタシもまさの手伝い」

「私は犬ですので……」

全員が自身の役割を確認し、それぞれの役割をこなした……

◆◆◆

「あー疲れた」

「てめえ、ほとんどなんもしてねえだろ」

大して働きもせず働いたような雰囲気を出しているヴィータにツツコミを入れる。

仕事を終えた俺達は軽い雑談に花を咲かせていた。

すると、買い物を終えたはやとシグナムが帰宅する。

「なんか話してたん？」

「雑談だよ、雑談」

「えー、気になるやん。教えてえ？」

「いやだ」

俺ははやとの申し出を一蹴するとテーブルの椅子に座った。

「ま、ええか。それならご飯にしよ」

はやてが手を叩くと全員が夕食の準備を始めた。



「さて、もう終わりか」

夕食を終えた俺は屋根の上で空を見上げる。

ついに明日に迫った決戦に想いを馳せる。

「まあ、そこそこ楽しめたかな」

俺は一言そう言うと屋根から飛び降りる。

その途中で転移し、アジトへと帰還した。

process 28 はやてに明かされる真実。闇の書編、最終決戦開始!

クリスマスイヴ、それはリリカルなのは世界において特別な日を表す。

今日が最後の戦いの日。

そして、俺の野望の始まりの日……



夜の帳が落ち切り、夜の闇に包まれた海鳴の町。

そんな海鳴の病院の屋上で俺はとある人物を待っていた。

「あいつらに真実など教えてたまるか」

俺はそんな事を呟きながら地べたに座りながら空を眺めていた。

すると、背後の扉が開き、一人の少女が入ってきた。

「政宗、どうしたん? 急にこんなところ呼び出して」

「はやて、ちゃんと一人で抜け出し来たか?」

「うん、もちろんや」

俺は夕刻、見舞いに来たなのは達が去った後に守護騎士たちにばれないようにはやて

だけ呼び出した。

内容は今日の六時半に病院の屋上に来てほしいというものだ。

「それで、なんの為に呼んだか、説明してくれんの？」

「ああ、とても重要な話があるんだ」

「重要な話？」

俺は立ち上がり、ゆっくりとはやての方に歩みよっていく。

俺ははやての後ろに回り、車椅子の押し手を掴む。

「その前にもうちよつと奥に行こう。疲れただろうし、久し振りに俺が押してやるよ」

「ありがと、お願いな」

そのまま車椅子を押して、先ほどまで座っていた場所まで移動させる。

「さあ、話をしようか」

俺ははやての前にやや距離を置いて、後ろ向きに立つ。

そして、ゆっくりと口を開いた。

「君には本当に感謝しているよ、八神はやて」

「感謝？ なんの話？」

はやての方に振り返り、俺は抑揚のない口調で告げた。

「君が闇の書の主となっていたおかげで『私』は苦勞なく、闇の書の力を開放できるから

「や」

「……………え？」

はやての顔が一気に青ざめていく。

そんな事は気にも留めず、俺は話を続ける。

「解らないかな？ 君は私の手の平で踊る人形に過ぎないという事だ」

「……………」

「今までの友情も、信頼の全てが私の演技に過ぎない」

「……………待つ」

「私は君に一切の友情も信頼も感じていない」

「待ってよ」

「当然だろう？ 自分の『お人形さん』に友情や信頼を感じる者などいない」

「ちよつと待ってよ……………」

「そこにあり得る感情はただの『自分のモノに対する愛着』だけ」

「嘘や……………」

「嘘などないさ、君は私の本当の顔を知らなかった。それだけの事だよ」

「じゃあ、今までの笑顔は？」

「嘘だ」

「私にかけてくれた言葉は？」

「モノに対する愛着故の言葉だ」

「今までやってきたことは？」

「……この日の為に仕方なく、付き合っていた。それだけだ」

俺の話を聞いたはやては車椅子から降りようとして転倒してしまう。

「なんでや……なんで、皆、私を置いていくの？」

顔を伏せ、震える声ではやては言った。

その顔の下を見るとしたたる水滴がアスファルトの地面を濡らしていた。

「政宗だけは、うちのところに残ってくれたって、思ってたのに……」

はやての方にゆっくりと手を置き、俺は言った。

「ありがとう、『闇の書の主』さん」

俺はその一言ではやてはもう、何も言わなくなった……

◆ ◆ ◆

一方、シグナム達となのはとフェイトは病院近くのビルの屋上で向かい合っていた。

「お話ってなんですか？」

「ああ、それは……」

なのはの問いにシグナムが答えようとした、その時。

「ダメでえす♪ 真実を話すなんて許さない♪」

突然、聞こえた声の方向にその場の全員が振り向く。

そこにはフェンスの上に腰掛け、ぶらぶらと足をバタつかせるアリシアが居た。

「アリシア姉さん……」

「やあ、フェイト！ 久し振り♪」

「お前はこの前の……」

アリシアはフェンスの上から飛び降りて地面に着地すると両者の中心に位置する場所に移動する。

「うちのボスからの命令でさ、フェイト達に真実を知ってもらおうと不都合なんだよね」

「なんだと?」

シグナムがアリシアを睨みつけるが気にせず話を続ける。

「だーかーらー、私が全力で邪魔して来いってご命令なのです♪」

アリシアはギアデュアルを取り出し構える。

『うっかかり』殺しちやっても良いから……」

この一瞬でアリシアの顔からお調子者のような雰囲気が消え失せる。

「今日は手加減しないよ」

《PERFECT PUZZLE!》

《What's the next stage?》

アリシアがダイアルを動かすとゲームエリアが展開される。

「変身」

《デュアルアップ! Get the glory in the chain! PERFECT PUZZLE!》

仮面ライダーパラドクスに変身を遂げたアリシアはフェイトの方を向く。

「来なよフェイト。いや、フェイト出来掛・テストなの私タロツサ」

アリシアがそう言うのとフェイトを含めた全員がバリアジャケットを展開する。

「ああ、そうだ。うちのボスからの伝言」

アリシアは突然、シグナム達の方を向いてそう言った。

「伝言だと?」

「うん、病院の屋上に君達の一番大切な人がいるってさ」

「ツ!? 主!」

アリシアのその一言で守護騎士達全員が病院の方へと飛んで行ってしまふ。

「うーん、ボスの予想通りだ。単純だなあ……」

「アリシア姉さん」

守護騎士達が飛んでいく様を眺めていたアリシアにフェイトが声をかける。

「なあに？ フェイト」

口調こそ、いつも通りのお調子者口調だが、そこには確かな強者の威圧感があった。「私、ずっとアリシア姉さんを助けたくって戦ってきた。クロノスに騙されてるって思ってた」

「うんうん、それで？」

「でも、もう……迷わないよ」

フェイトは静かにそう告げると自分の愛機バルディツシユをアリシアに向けて構えた。

それを聞いたアリシアは少しの間、停止した後、顔を右手で覆った。

「ふっ、ふっ、アハハハハハハ！ やつと、本気で遊ぶ気になったんだね！」

アリシアは右手を払う様に顔からどけ、フェイトの方に向き直った。

「いいよ、いいよオ！ さいつこうだね！」

「行くよ、姉さん……」

「……掛かっておいで」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「主！」

「はやて！」

病院の屋上に駆け付けた守護騎士達の前に映ったのは……

「待っていたよ」

シグナム達が来ることを予知していたように此方を向いて立っている政宗と……

「ああ……うう……」

その足元で倒れる、今まで決して見せなかつた涙で顔を濡らしたはやての姿だった。

process 29 それぞれの敵に立ち向かえ！
闇
の書の目覚め！

《鋼鉄化》

アリシアは鋼鉄の強度に変化した右手でフェイトの一撃を防ぐ。

「はあ！」

フェイトは勢いをそのままにアリシアのわき腹に向け、横一直線にバルディッシュを振るう。

「グハッ！」

雷のようなその一撃にアリシアは対応できずにフェンスに叩きつけられる。

ふらふらになりながらアリシアは四つん這いの状態になる。

「まさか……ここまですでなんてね……♪ お姉ちゃん……嬉しいよ」

途切れ途切れながらも何とか声を紡ぐアリシアにフェイトは油断することはない。

一切構えを崩さずにアリシアにバルディッシュを向けている。

「フェイトちゃん……」

その様子をなのは上空で心配そうに見守っていた……

◆◆◆◆◆
「……掛かっておいで」

アリシアがそう言うのとフェイトが口を開く。

「なのは、姉さんとは私だけで戦うから」

「えっ!?! そんなの……」

「お願い」

フェイトは視線はアリシアから一切動かさずになのはにそう告げた。

「……いいよ、でも、危なくなったら」

「わかってるよ、なのは。友達だから」

なのはが見ることは無かったが、フェイトはその瞬間、笑みを浮かべていた。

「信じてるよ」

「うん」

なのははそれだけ言うのと空に飛んでその場を離れた。

「おーい! ねえフェイト、なのはちゃん行っちゃったよ?」

「私がお願ひしたの、姉さんとは私一人で戦う」

「へえ……」

一瞬、アリシアは顔を伏せるがすぐに再び顔を上げてこう言った。

「やってみなよ」



「これはどういう事だ、十六夜」

「お前！ はやてに何をした！」

俺は悪びれることなく話し始めた。

「なにつて、優しい俺が真実を話したただだよ」

「真実だと？」

「こういうのは真つ先にヴィータが話し出すが今回は珍しくザフィーラが問うてきた。

「そうそう、真実。貴様らは……」

「そう言うて俺はゲームドライバーとガシャットを取り出しながら話しを続けた。

「私の操り人形に過ぎないという事をな」

《Kamen Rider Chronicle》

「それは!？」

《ガシャット!》

「変身」

《ガツチャーン！ レベルアップ！ 天を掴めライダー！ 刻めクロニクル！ 今こそ

時は極まれり!》

「お前が奴らのボスカ」

「そうだと、私の名はクロノス。仮面ライダークロノスだ」

俺を話を聞いても一切構えを崩さないシグナム達に対してヴィータはアイゼンを握る力を強めていた。

「なんでだよ……まさ！ お前は敵じゃないんじゃないのかよ！」

「口に出す言葉の全てが真実だとも思っているのか？ だとしたら愚かだな」

俺が突き放すようにそう告げるとヴィータは唇を強く噛みしめる。

「わかった、もうお前を家族だとは思わねえ！」

ヴィータはそう言うのと俺に向かって一直線に向かってくる。

「愚かだな」

《Pause》

この瞬間、世界の時が停止する。

俺はゆっくりとヴィータに歩み寄るとかかと落としでヴィータを地面に叩きつける。

《Restart》

「グア！」

「いきなりヴィータちゃんが地面に叩きつけられてクロノスが真横に……」

「瞬間移動の類ではないな……」

「どうした？ 来ないのか？」

俺がそう言うのとシグナムとザファイラがこちらに向かって来る。

「一閃！」

「はア！」

シグナムの紫電の一閃とザファイラの渾身の一撃が俺に向かって放たれる。

「無駄な事を……」

《Pause》

再び時間が停止し、俺のみが動くことを許させる時が始まる。

「シツ……審判の時は厳粛でなければならない」

俺はドライバーからホルダーにガシヤットを移す。

《ガシヤット！ キメワザ！》

《Rider Critical Crusade！》

「ふん！」

クロノスの必殺の回し蹴りを向かって来るシグナムとザファイラに放つ。

「次は貴様だ」

《ガツチャーン……》

チャーンソーモードのバグヴァイザードライの刃をシヤマルに向ける。

バグヴァイザーのボタンを二回押し、必殺技待機状態に移行させる。
《キメワザ……》

俺がバグヴァイザーを持った腕を掲げると赤黒い光の刃が形成される。

《Critical Sacrifice!》

腕を振るい、光の刃を放つ。

すると刃はシャマルに命中したところで停止した。

「最後だ」

《ガツチャーン……》

俺はバグヴァイザーをビームガンモードに変更し、ボタンを二回押し。

《キメワザ……》

《Critical Judgment!》

「ふん！」

腕を大きく振るうと三発の赤黒い光弾がヴィータの近くで着弾する。

「さて、これで詰チエックメイトみだ」

《Restart》

「」「グアアアアア！」「」

時間が再び動き出すと同時に周囲で数か所、爆発が発生する。

四人ともバリアジャケットが解除され、地面を数回転がる。

「まあ、所詮この程度か」

吐き捨てるように冷淡にそう告げると俺は軽く右手を上げる。

すると四人の体からリンカーコアが現れる。

「ご苦労さま、といつても一瞬だったけど」

守護騎士達の魔力を蒐集しながら仮面の男状態でリーゼ姉妹が空から降りてくる。

「どうだ？」

「予定通り、あつちも始めたよ。それで闇の書は完成するよ」

俺達の足元には四人が苦悶の表情を浮かべ、地面に倒れ伏している。

「皆！ 政宗！ 止めて！」

先ほどの爆発音で正気に戻ったはやてが状況に気づき、俺に懇願してくる。

「さあ！ 仕上げだ！」

俺がそう言うのと闇の書から黒い触手のようなものが生えてくる。

「うわっ！ なにこれ!？」

驚いた仮面の男が闇の書から手を放してしまふ。

すると闇の書は浮遊し、はやての前に移動する。

「離れている、ついに目覚めるぞ」

「了解、別の場所で見とくね」

そう言つて仮面の男はその場から飛び去つた。

《自動防衛運用システム起動》

抑揚のない、機械的な音声と特徴でそう告げた闇の書は黒い触手で守護騎士達を拘束する。

「え？ 何をする気や……」

《それに伴い……》

「待つて、止めて……」

《守護騎士システムを……》

「止めてええええええええええ!!」

《消去》

何の抵抗もしない守護騎士達を黒い触手が貫く。

「あつ……アアアアアアアアアア!!」

はやての絶叫と共に地面に黒い光を放つ魔法陣が展開される。

《さあ、目覚めの時です》

闇の書のその一言と共にはやてが黒い閃光に包まれる。

閃光が晴れるとそこにいたのは……

「また、全てが終わってしまった……」

それを見た俺はガラにもなく叫んでいた。

「ついに目覚めたか!!」

闇の書の闇と言われる存在を前に俺は興奮を隠しきれなかった……

process30 姉妹の決戦！ フェイトVSアリ

シア！

「えい！」

立ち上がったアリシアがフェイトに向かって拳を放つ。

だが、フェイトはそれを軽く躲して見せる。

「はっ！」

「おっと！」

フェイトは攻撃を躲した勢いをそのままにバルディツシュを振るう。

それをアリシアは後ろに大きく飛ぶことで回避する。

「やっぱり、フェイトを相手にするには速さが足りないかな」

そう言つてエナジーアイテムの操作を開始する。

《高速化》《高速化》《マッスル化》《鋼鉄化》

高速化の効果でアリシアの速度が上昇する。

それを見たフェイトも速度を上げる。

二つの黄色の残像が接触する度に甲高い音を上げる。

「はっ!」

「グハア!」

黄色の残像の一つが空中で数回、回転しながら地面に叩きつけられる。

「嘘だ……こんな短期間でこんなに強く……」

地面に背を預けた状態でアリシアはそう呟いた。

「言つたでしょ? 『もう迷わない』って」

「成程ねえ……もう、私を倒す事に躊躇はしないんだ」

「うん、もう私は姉さんを倒す事を迷わない」

「あっそ……」

アリシアは再び立ち上がり、アイテムを操作する。

《回復》《回復》《回復》

エナジーアイテムで無理矢理自身の体を回復させる。

「だったら、私も本気の本気で相手したげるよ」

そう言つて三度エナジーアイテムを操作し始める。

《高速化》《高速化》《高速化》《マッスル化》《マッスル化》《マッスル化》《透明化》

エナジーアイテム透明化によりアリシアの姿が空気に溶け込む様に透明になる。

「……………」

フエイトはゆっくりと瞳を閉じる。

(音が聞こえる……)

足音が此方に物凄い速度で近づいてくる。

「ハーケンセイバーッ！」

フエイトはバルディッシュを大きく振るい、三日月形の光の刃を放つ。

光の刃は高速回転しながら進んでいく。

すると刃が空中で何かに命中し、消滅する。

「ギャン!？」

空間が歪み、そこからアリシアが姿を見せる。

超高速の勢いを殺しきれずにアリシアは前方に大きく飛ぶ。

フエイトの真上を超え、後ろの約二メートルの地点で地面に着地する。

「なんで……透明化は有効だったはずなのに……」

「いくら透明化でも音は消せないでしょ」

「流石だなあ……私の自慢の妹」

アリシアはフェンスを掴みながらフラフラと立ち上がる。

「作戦変更、真つ向から叩き潰す！」

そう言ってアリシアはギアデュアルを取り出し、ダイアルを操作する。

《KNOCK OUT FIGHTER!》

《The strongest fist! ” Round 1” Rock & Fire!》

「大変身」

《デュアルアップ!》

《Explosion Hit! KNOCK OUT FIGHTER!》

「いっくよー♪」

右手をぐるぐると回しながらフェイトに向かって歩いていく。

フェイトもそれに合わせて構えを変える。

「ほれ! ほれ、ほれ、ほれ!」

アリシアは続けて右左と拳を放つ。

アリシアの猛攻にフェイトは防戦を強いられる。

バルディッシュの柄を駆使して何とか攻撃を防いでいる。

「さっきまでの勢いはどうしたのかなア!」

「きやあ!」

ラッシュの最後に放たれた炎を纏った渾身のアッパーに耐え切れずにフェイトは空中に投げ出される。

そのまま地面に落下し、数回地面を転がる。

アリシアは倒れるフェイトに近づき、マウントポジションを取ろうとする。

「ふっ！」

そのまま地面を転がり、勢いを殺さずに立ち上がり、体勢を立て直す。

一方、アリシアは小ジャンプが不発となり、地面を転がるがフェイトと同じく体勢を直す。

「そう簡単にはいかないか」

「負けれないからね」

再び両者の距離が詰まり、アリシアのラッシュが始まる。

「私だって！ 負けたくないんだよ！」

「絶対に譲れない！ なのはや皆と約束したから！」

アリシアのラッシュに合わせ、フェイトも攻撃を繰り出す。

両者の攻撃はそのほとんどが相殺されていたが稀にダメージとなっていた。

「チッ！」

「クッ！」

数分間に及ぶ、一切勢いが切れない互いの猛攻にお互いに徐々にダメージが蓄積していく。

「オラアッ!」

「ハアッ!」

お互いの渾身の一撃がぶつかり合う。

お互いに相殺しきれずに大きく後退する。

後退した距離は両者ともにほとんど変わらなかった……

「はあ……はあ……はあ……」

「はあ……ハッ、ハハハ」

アリシア、フェイト共に肩で息をするほどに体力を消費していた。

そんな中、アリシアが口を開く。

「やっぱ、やりよるなあ……流石、我が自慢の妹だね♪ でもね……」

アリシアは腰のホルダーからギアデュアルを取り出す。

「私は絶対に負けられないんだよ」

「うん……私もだよ」

フェイトはアリシアのその一言で構えを戻す。

「次が最後だよ。どちらが強いのか、これではつきりする」

「分かった」

《キメワザ!》

「必殺一閃！」

《KNOCK OUT CRITICAL SMASH!》

「プラズマブレイドブレイカー！」

アリシアの炎を纏った必殺の一撃とフェイトの魔力のほとんどで形成した雷の刃が衝突する。

「姉さんは私が！」

「フェイトは私が！」

「止めるッ！」「倒すッ！」

激しい爆発と閃光が迸り、光と煙が周囲一帯を飲み込む。

「フェイトちゃん！」

なのはが閃光を両手で防ぎながら口を開く。

そして、少しの時が経った時、煙と光が晴れていく。

その時、なのはの目に映ったのは……

「こんなの酷いよー！」

「そんな……」

変身とバリアジャケットが解除され、地面に大の字で倒れるフェイトとアリシアの二人の姿だった。

「引き分けなんて白けるなあ」

「でも、私は良かったよ?」

「なんで?」

アリシアがそう尋ねるとフェイトは嬉しそうな笑みを浮かべて言った。

「秘密♪」

「えー、まあいいや。今日はおさらばするかな。んじや、チャオ♪」

そう言つてアリシアはその場から消滅した。

「フェイトちゃん!」

アリシアと入れ替わりでなのはがフェイトの元に駆け寄ってくる。

「なのは…ゴメン、引き分けだったよ」

「ううん、いいの。フェイトちゃんが無事なら」

なのははフェイトの手を握り、笑顔でそう言った。

「ありがとう。でも、いつまでもこうしてはられないから」

フェイトはふらふらになりながら立ち上がる。

「フェイトちゃん! 無茶したらダメだよ!」

「大丈夫。私にも戦わせて」

「でも……」

「なのはと一緒なら大丈夫だから」

フェイトはそう言っただけなのは手を強く握る。

「ホントに仲いいわねえ」

「うん、本当に」

なのはとフェイトが声のする方を向くと、そこにはバリアジャケット装着したアリサとすがが居た。

「アリサちゃん！　すずかちゃん！　もう大丈夫なの？」

「モチロンよ！　十分に休んだからね！」

「私ももう大丈夫だよ」

「そうなんだ、良かった」

アリサとすがが笑顔でそう言うとなのはも安心したように胸を撫で下ろした。

「なのは、時間がない。急ごう」

「うっ、うん！　皆、行こう！」

「「うん！」」

フェイトはバリアジャケットを装着し直し、四人は決戦の地へと赴いた。

process 31 政宗敗戦!? 最強VS最強!

ついに目覚めた闇の書を前に俺は転生してから初めて『畏怖』という感情を抱いていた。

「十六夜政宗、主や騎士達を苦しめた貴様に永遠の闇を与えてやろう」

「永遠の闇? フツ、下らんな。消えるのは貴様だ」

《Pause》

俺以外の全ての時間が停止する。

「いくら貴様でもポーズの前では無力……」

そう言いながらゆっくりと闇の書の闇に近づいていく。

「愚かだな、十六夜政宗」

突然、声が聞こえたと思うと俺は大きく後方に吹き飛んだ。

「グハあ!?!」

突然の衝撃に驚いたが何とか転倒せずに着地する。

「何故、停止した時間の中で動くことが出来る!?!」

「騎士達が貴様のその技を受けたことでナハトが自己進化したのだろう。貴様のその技

は私には通用しない」

「貴様如き、ポーズなくとも勝つことは容易だ！」

ジャンプで闇の書との距離を詰めた俺は攻撃を放つ。

「フンッ！」

「無駄だ」

俺の一撃を闇の書は左手で受け止める。

確かな感触はあったが即座に折れたであろう腕は元に戻る。

「無限再生機構か。鬱陶しいな、弱者の分際で……」

「だったら、私に勝てない貴様は雑魚以下という事になるな？」

「ほざけ！」

両者の強力なパンチとキックの繰り出し合いが続く。

俺の方はほとんど攻撃を相殺し、闇の書は受けた傷を即座に回復していた。

そして、俺の一撃で闇の書が後方に大きく動く。

「消えろ」

闇の書は突然空中に浮くと、右腕を掲げる。

右腕の中に黒い魔力の球体が生成されていく。

「永遠の闇に堕ちろ」

それと同時に周囲の町一帯に炎の塔が吹き上がる。

だが、炎の塔はポーズの影響ですぐにその時を停止させる。

「…成程、私は大丈夫でも魔法等は停止してしまうのか。ならば……」

闇の書はそう言うと突然、その姿を消す。

「転移か？ 何処に行った？」

「……だ」

声が出た方向を向くとそこにはゲーマドライバーのレバーを握る闇の書の姿があった。

「これが起動キーだろうか？ 解除させてもらおう」

そう言った闇の書はゲーマドライバーのレバーを展開する。

《Restart》

それと共に停止していた時間が動き出し、周囲の炎の塔も動き出す。

「馬鹿が、こんな大雑把な攻撃が当たるものか」

「知っているとも」

背後から放たれた魔力の鎖に俺は拘束される。

「ふん………！」

「なにッ!？」

闇の書はバインドの鎖をそのまま大きく振るい、俺を地面に叩きつける。
ダメージこそほとんどないが大分距離を放された。

「あつちは転移で移動できるが……こちらも裏技で行こう」

《Jet combat!》

◆◆◆

「おそらく、大したダメージにはなっていないだろうが……」

「分かっているではないか」

「ッ!？」

何かを悟ったのか闇の書は高速で低空飛行を開始する。

すると先ほどまで闇の書が居た場所には無数の弾丸が撃ち込まれた。

闇の書は引き続き低空飛行で俺の上空からの機銃の掃射を躲していく。

「これでは無理だな。切り替えだ」

《Giliigili chanbara!》

コンバットアーマーを解除し、ガシャットを切り替える。

《アガツチャ! ギリ・ギリ・ギリ・ギリ! チャンバラ!》

チャンバラアーマーを装着し、ガシャコンスパローを鎌モードで装備する。

「フン!」

「ッ……」

俺の両手に持った鎌と両脚の攻撃に闇の書の防御に入る。

「はッ！」

「グワッ」

闇の書の放った魔力弾によって距離が開いてしまう。

「ならば！」

《Gekitotu robots!》

チャンバラアーマーを解除し、再び武装を切り替える。

《アガツチャー！ ぶっ飛ばせ！ 突撃！ ゲキトツパンチ！ ゲ・キ・ト・ツロボツツ！》

ロボツツアーマーを装着した俺は左手のロボツトアームを射出する。

「無駄だ！」

それを闇の書は右手に装着されたパイルバンカーでロケットアームを粉碎する。

粉碎されたアーマーは周囲一帯に煙を蔓延させる。

《アガツチャー！ シヤカリキ！ シヤカリキ！ バッドバッド！ シヤカつとりキつと

シヤカリキスポーツ！》

スポーツアーマーを装着した俺は煙の中から闇の書を強襲する。

「くっ」

闇の書は不意打ちにこそ驚いたがすぐに切り返してくる。

「これでもどうだ！」

俺は右手側のタイヤを闇の書に投擲するが、闇の書はそれを片手で弾き飛ばす。

《アガツチャー！ ド・ド・ドレミファ・ソ・ラ・シ・ド！ OK！ ドレミファビート！》
ビートアーマーに切り替えた俺はターンテーブルを回し、メロディーを流す。

「ひっ！ ふっ！ はっ！」

流れる音楽に合わせ、リズムに合わせて攻撃していく。

徐々に攻撃力が上昇していったが闇の書に腕を掴まれ、投げられる。

「コンボが途切れたか……」

俺はビートアーマーを解除し、通常形態に戻る。

「もう、武装の切り替えはしないのか？」

「どれも通用しなかったからな」

「そうか」

闇の書は一気に距離を詰め、俺の懐に潜り込む。

「では、そろそろ終焉だ」

闇の書は俺に目にも止まらない速度で攻撃を加えていく。

「沈め！」

アッパーで俺を上空に飛ばし、闇の書が腕を向けると本体である本のページが自動でめくられていく。

やがて、本はとあるページで停止する。

「スターライトブレイカー」

高町なのはの得意技。

周囲の魔力を圧縮して放つ砲撃魔法。

俺はなすすべなく、その直撃を受けた……

「グハッ！ 馬鹿な……こんな事が……」

地面に叩きつけられた俺は変身が解除され、地に跪いていた。

周囲には粉々になった俺のゲームドライバーが散らばっていた。

「残念だったな。貴様では私には勝てない」

闇の書が俺から少し離れた場所でそう言い放つ。

「俺が……『負ける』？ この……私が……？」

地面に跪いたまま俺は呟くように口にする。

（負ける？ 誰が？ 俺が？）

「そんな馬鹿な事を信じられるか……」

俺は立ち上がり、手に持っていたゲームドライバーの破片を投げ飛ばす。

「私こそこの世界の管理者！ 負けることなどあり得ない！ この私が敗北するなど……認められるかあ！」

そう言つて俺はバグヴァイザードライを取り出す。

「なんだそれは……」

「もういい……『人』の身で勝てないのであれば……」

俺はバグヴァイザードライの銃口を自分に押し当てる。

「私は今！ 人を捨てる！」

バグヴァイザーからバグスターウイルスが注入される。

「ぐおおおおおおおおお！！」

俺の叫び声と共に周囲を閃光が覆いつくす……

「なんだこれはッ？」

闇の書も怯むほどの閃光が炸裂する。

やがて閃光が晴れると、そこには……

「成功だ、私は今、『人』を超えた……」

顔に血管が浮き上がり、瞳も赤の緑のオッドアイに変化したバグスター『十六夜政宗』がそこにいた。

「ゲムデウスウイルスを完全に我がモノにしたぞ！ ハハハッ！ ハハハハハハハ！」

俺は高笑いを上げ、バグヴァイザードライを構えた。

「さあ、第二ラウンドと行こうか？」

《バグルドライバードライ……》

《Kamen rider chronicle》

ガシャットはいつも通り自動でバグルドライバーに装填される。

「変身」

《バグルアップ！ 天を掴…ライ…！ 刻め…ロニ…！ 今…時…極まれり！》

いつも変身に黒い『何か』の影が現れるのを闇の書は見逃さなかった。

「なんだこいつは……」

再び、閃光が走り、俺の姿が変化する。

「酷いノイズだ。本来は変身用ではないのが問題か……」

だが、その姿は『仮面ライダークロノス』ではなかった。

「なんだ？ その姿は？」

色が変わり、両手に剣と盾をそれぞれ持つクロノスがそこにいた。

「これこそ、ゲームデウスと完全融合を遂げた私の新たな姿。その名は『ゲームデウスクロノス』！」

ゲームデウスクロノスへと変身した俺は自身の持つ剣、『デウスラッシャー』を闇の書へ

と向ける。

「さあ、絶望を教えてやろう」

process 32 闇の書戦第二ラウンド開幕！ 政

宗、共闘の提案？

政宗と闇の書が戦っている最中、なのは達は……

「あーもー！ どーなってるのよー！」

「アリサちゃん、落ち着いて」

アリサが叫び声を上げて怒りを露にし、それをさすがが静めている。

四人は闇の書が発動した魔法で放たれた炎の柱に遮られ、なかなか進めずにいた。

「このままじゃ……どうするなの？」

「このままゆっくり進んでいこう」

二人がこれからの事を話していると、突然炎の柱が一斉に消滅する。

四人が病院の屋上に目を向けると、そこには……

「この程度か……」

「…クツ」

闇の書の首元に剣を突きつける赤黒く変化したクロノスが居た。

俺が剣を振るおうとすると闇の書は右手でクロノスに正拳突きを放つ。

「クソが」

俺は後ろに少し後退するも即座に立て直し、盾を構える。

すると盾が変化し、まるで生きているように脈動する巨大な鞭が出現する。

「逃がすか!」

俺が盾を振るうと鞭が闇の書に向かって伸びていく。

鞭は闇の書を捉えるとそのまま闇の書を鞭で拘束する。

俺はそのまま盾を地面に叩きつけるように振るう。

それと同じように鞭も動き、闇の書は地面に叩きつけられる。

鞭は縮んでいき、やがて通常の盾の状態に戻る。

「どうした? さっきまでの勢いはどうした」

俺が一步前に進むと煙の中から発行する鎖が俺の剣に巻き付く。

俺は剣を握る力を強くする。

「この程度か」

「はあ!」

闇の書が俺の背後から蹴りを繰り出す。

だが、俺はそれを見ることなく仰け反るようにして躲す。

「なに!?!」

「詰めが甘いな」

俺はそのままバク転の要領で闇の書に蹴りを放つ。

それと同時に剣のバインドも解除される。

「そろそろフィニッシュだ」

俺がバグヴァイザーのボタンを押そうとする。

すると、突如空中から魔法弾が放たれる。

「邪魔を……」

俺が大きく後ろに後退すると突如、吹雪が俺を襲う。

その吹雪によって俺の両脚が拘束される。

「鬱陶しいな」

「やあ!」

左右からアリサとフェイトが迫ってくる。

「無駄な事を」

炎を纏ったアリサの剣を盾で、雷を纏ったフェイトの鎌を剣で受け止める。

俺を二人をはじめ返し、盾を構える。

すると再び盾から鞭が出現する。

「小賢しい! 消えろ!」

「きゃあ!?!」

俺を大きく盾を振るう、それと同時に鞭は俺の足元の氷を砕き、アリサとフェイトを吹き飛ばす。

鞭はそのまますすかの方に向かっていく。

「えっ!?!」

すすかを拘束した事を確認すると俺は大きく横に腕を振るった。

「しばらく空の旅でもしているがいい」

「きゃああああ!」

投げ飛ばされたすすかは彼方へと飛んで行ってしまふ。

俺はそれを確認せずに剣をなのはへと向ける。

「さあ、高町なのは。交渉といこうか」

「交渉?」

なのはは俺を問いかけに答えると警戒を解くことなく、ゆっくりと降下してくる。

「そうだ、貴様らは奴の中にいる八神はやてを救出したいのだろうか?」

「……そうだよ」

「一方、私は八神はやては助かろうが、死のうがどうでもいい。ほしいのは元よりあの

『闇』のみ」

「それで?」

「私と一時的に協力しようではないか」



俺はゆっくと闇の書の方へと歩んでいく。

「タイムアウト終了だ。再開と行こうか」

闇の書は一気に俺との距離を詰める。

その一撃を盾で防ぐ。

盾を押し返し、闇の書を後方に飛ばす。

その隙に俺を剣を上に掲げる。

すると闇の書の上空に巨大な魔法陣が出現する。

「砕け散れえ!」

剣を勢いよく振り下ろすと魔法陣は電撃を伴い、急降下する。

地面に接触した瞬間に魔法陣は大爆発を起こす。

「クッ!」

闇の書は吹き飛ばされるがすぐに形勢を立て直し、構え直す。

それと同時に俺は赤黒い粒子と共にその場から消える。

だが、すぐに闇の書の懐に再び姿を現し、腹部に剣を当てる。

「紅蓮爆龍劍……」

劍は炎を纏って、闇の書を切り裂く。

炎は龍のような形となって俺の周囲を回る。

俺が劍の切先を上に向けて構えると龍型の炎は劍に吸収される。

「フーン！」

劍を下から上へと振り上げると炎は再び龍の形となって地面から吹き上がる。

闇の書はこの一撃が直撃しても平然と立ち上がる。

「その回復力は面倒だな……さて」

俺は空に視線を移す。

「もういいだろう、さっさとしろ」

「アンタに言われなくても！」

俺が空に向かってそう言うとき空中からアリサが急降下してくる。

アリサは降りてくると同時に頭の上に構えていた炎を劍を振り下ろす。

闇の書はそれを受け止める。

「せい！ はっ！」

アリサはそのまま炎の劍を右・左と振るい、大きく後退する。

「散れ！」

闇の書がパイルバンカーをアリサに向けて放つ。

「させない!」

《INFINITY ZERO》

アリサの前に立ったはずが手をかざすと巨大な氷の盾が出現する。

氷の盾は闇の書の一撃を完全に防ぎきり、粉々に砕け散る。

「ありがとう、さすが」

「うん!」

「ちよつといいか?」

俺が声をかけると二人ははつとした様子でこちらに振り向く。

「何よ!」

「貴様らが勝手にいい雰囲気になってるからだ。あの二人は目的通りに動いたか?」

「はい、二人で目的地向かいました」

「ならいい」

「なんでアンタとなんかと……」

「これが一番効率的だろう」

文句を言いながらアリサは闇の書に剣を向ける。

「さて、行くのでしょうか」

process 33 正義と悪の共闘！ 八神はやてを

救い出せ！

俺は病院の屋上で闇の書との死闘を続けていた。

だが、先ほどまでの一対一ではなく、アリサ・バニングスと月村すずかがこちら側に引き込んだことで数的有利はこちらが取っているのだが。

「いや、参る」

「ッ!？」

混戦の中、盾を投げ捨て、剣を両手で持つて構える姿勢を取った俺に闇の書は驚きを露にする。

「貴様、武術の心得があるのか？」

「私ではない、私の『中』のモノが武術の達人なのだ」

そう闇の書の問いにそう言い放ち、俺は大きく踏み込んで闇の書との隙を詰める。

その瞬間、闇の書の懐に一瞬ではあるが隙が出来る。

「突きー!」

その隙を見逃さなかった俺は両手で持った剣で鋭い突きを打ち放つ。

一瞬ではあったものの、隙を突かれた闇の書の体勢を崩すことに成功する。

だが、闇の書はこれ以上隙を見せまいと後方に大きく飛び、俺の追撃を回避。

その後、バク転で立った状態に戻して構えを取って見せた。

「流石にこの程度では貴様を崩せんか」

隙をついた攻撃でもすぐに構え直して見せた闇の書を見ながら俺は剣を両手持ちから右手持ちに切り替える。

先ほどまで両手持ちだった為、切り替えたことで空いた左手を開いた状態で真横に構える。

すると左手に先ほど投げ捨てた盾が召喚され、左手を握りこんで盾を持つ。

「作戦変更だな。アリサ! すぐか!」

俺が呼ぶと空を飛んでいた二人は俺の近くに着地する。

「なに? 一人でやるって言ったじゃない」

「作戦変更だ。貴様らも協力して貰う」

「協力って……」

「すぐかが疑問を口するが……」

「話す余裕があるのか!」

構えを取っていた闇の書が俺達との距離を詰めてくる。

「自分で考えろ！」

俺はそれだけ言うと低空飛行で特攻してきた闇の書を盾で受け止める。

少しの間、盾で闇の書を抑えた後に盾を持った左腕を大きく上に払う。

その予備動作のみで行動を読んだ闇の書は拳を引いて腕が払われないようにする。

結果的に闇の書に隙を見せることになった俺は防御手段を失ってしまう。

闇の書がその隙を見逃すはずもなく、俺に向けて拳を放とうとする。

闇の書がその構えに入ったその瞬間、空中から猛スピードで振ってきたつららの雨に

気づいた闇の書は拳を引き、後方にジャンプする。

闇の書が空中に飛んだのとほぼ同時につららの雨が地上に衝突する。

衝突したつららのほとんどは先ほどまで闇の書が居た地点に突き刺さっていた。

「あれも躲されるなんて……」

「どんな化け物よ……」

アリサとすずかは闇の書が見せた驚異的な反応スピードに驚愕したが。

それ以上にその闇の書を上回る実力を見せつける政宗に対して明かな畏怖の感情を

抱いていた。

すずかの放った氷のつららが一切通用しないのを見たアリサは地上に降り、政宗に近

づく。

「どうするのよ」

「どうする? 知れたことを……」

「何を言ってる……」

俺の発言に疑問を抱いたアリサは俺の方へと瞳を向ける。

俺の姿を見た瞬間、アリサの体に寒気が走る。

アリサが見た俺は顔は仮面で覆われているため、その表情は窺えない。

だが、表情など見なくとも、全身から溢れだす尋常ではない『殺気』のみでアリサは

あることを悟った。

もしも、俺のみにこの先を任せてしまったら、闇の書の中のはやては確実に『死ぬ』と。

アリサは恐怖を唾諸共飲み込んで俺の前に立つ。

「アリサ、邪魔だ。どけ」

「いやよ。この先をアンタだけに任せたらはやてを殺すわ」

「そんな下手な戦いはしない。どけ」

「聞こえなかったの?」

アリサは恐怖を押し殺し、顔のみをこちらに向けて言い放つ。

「ここからはアタシも戦うわ」

「……まあいい。足を引っ張るなよ」

「そつちこそ！」

互いに挑発しながら俺とアリサは闇の書に向かって突撃した。

◆◆◆

一方、なのは達はというと……

「クロノスが言うにはここら辺に……」

「おーい♪」

「居た！」

フェイトが地上を指差す。

するとそこにはフェイトとの戦いの後に拠点に帰ったはずのアリシアの姿があった。

「姉さん。迎えに来たよ」

「アリガト♪」

なのはとフェイトが地上に降りてくるとアリシアは笑顔で二人を出迎える。

すると早速、アリシアはフェイトの首に腕を回して抱き着く。

「じゃ、よろしくね♪」

「うん」

フェイトはアリシアに抱き着かれたまま、お姫様抱っこでアリシアを抱える。

それを見ていたなのは……

「戦ってるとは思えないほどの仲良し姉妹なの……」

呆れのようななんとも言えない感情を抱きながらフェイトとアリシアの後を追った。

◆◆◆◆◆

場面は戻って、政宗とアリサコンビは闇の書と近接戦闘を繰り広げていた。

俺が突きで闇の書との距離を確保するとアリサが間に割り込み、そのまま攻撃を開始する。

それを確認した俺は後方に移動し、剣を掲げる。

すると、どこから無数の小型飛行ユニットが此方に招集される。

俺が剣を振るうと小型ユニットは闇の書とアリサの方へと隊列を組んで飛んでいく。

闇の書の上空に到達した小型ユニット達は闇の書の周囲を囲むように低空飛行を開始。

「ちよつと!? アタシもいるんだけど!?!」

「一斉掃射開始!」

アリサの言葉は無視し、容赦なく俺は小型ユニット全機に指令を下す。

それを聞いた小型ユニット全機がアリサの存在を一切考慮せずに一斉掃射を開始する。

四方八方から放たれる弾丸の雨によって舞い上がった雪によって視界が失われてい

く。

雪によって小型ユニット達の姿が見えなくなる頃、突如として衝撃波が辺りに走る。その衝撃波によって小型ユニット達は吹き飛ばされ、地面に強く接触。

バチバチと電気を走らせながら数十秒の間、もがいていたが全ての機体が小型の爆発を起こして碎け散る。

「やはり、この程度では無理か」

舞い上がった雪が晴れるとそこには平然とした様子でそこにいる闇の書と。

「アンタねえ！ 死にかけてたじゃない！」

鬼の形相でこちらに近づいてくるアリサの姿があった。

「そんなに元気なら大丈夫だな」

「何ですって！」

俺はアリサを完全に無視して闇の書の方を睨みつける。

さて、本当の勝負はこれからだ……

process 34 闇の書の闇VS政宗・なのは同盟

!勝利を掴むのは!?

闇の書の闇と近接戦で激しい戦いを繰り広げる俺とアリサ。

一方、すずかは後方で俺とアリサの支援を行っている。

「ふん!」

その途中で俺が大きく剣を振るうと闇の書は大きく後退する。

「そろそろか」

「ええ」

俺のその言葉にアリサは頷く。

すると、空中から二色の魔法弾が闇の書に向かって放たれる。

闇の書はその攻撃の直撃を受け、再び怯む。

そちらの方へと目を向けるとそこにはなのはとフェイトとアリシア（パラドクス）の姿があった。

「到着!」

「お姉ちゃん……」

高すぎるアリシアのテンションにフェイトは苦笑いを浮かべている。それを尻目になのはは此方に近づいてくる。

「どうですか？」

「微妙だ。貴様等次第だな」

そういうと俺は剣と盾をしまい、後方へと下がった。

「何の真似だ……」

「貴方の相手は私達です」

「ほざけ！」

フェイトのその一言に闇の書は俺以外の五人の方へと突進していく。

《鋼鉄化》

「ふん！」

他の四人が空に飛ぶと闇の書のその一撃をアリシアが真正面から受ける。

「遊びましょ♪」

「ふざけるな」

アリシアのその一言に怒りを見せた闇の書が拳を繰り出す。

アリシアもそれに対応し、攻撃を回避していく。

闇の書が突如、平手を構えるとゼロ距離で魔法弾が放たれる。

その一撃でアリシアは大きく後方に吹き飛ぶが……

「はあ!」

入れ替わるように両サイドからアリサとフェイトが挟撃を繰り出す。

「無駄だ!」

それに気づいた闇の書が両腕を二人の方へとそれぞれ向けると二人の攻撃は魔法障壁に阻まれる。

そして、カウンターで放たれた魔法弾が二人に直撃した。

「きゃあ!」

「くっ!」

その攻撃によって周囲が煙に包まれる。

闇の書が煙を払おうとしたその時だった。

闇の書は突如、二色のバインドによって拘束される。

「視界を奪えばバインドは通る!」

「この程度!」

「本命は此方だ」

バインドに気を取られていた闇の書は声に気づき、そちらに振り向く。

するとそこに居たのは先程後退したゲームデウスクロノスだった。

「散れ」

俺が右手を闇の書の懐に構えると魔法によって爆発する。

俺と闇の書は爆風に飲まれる。

その煙の中で闇の書が俺に向かってくる。

俺は身構えるが闇の書は俺の肩に手を置くと、先程とは異なる声が聞こえてくる。

「……政宗」

「はやてか」

その声は現在、吸収されているはやてのものだった。

「お願いや。この子を助けて」

「面白いな。自らを陥れた者に懇願するか」

「この子を助けるためならどんな事でもできるよ……」

「ははは！ 面白い！ では少し、苦痛を耐えてもらおうか！」

俺は闇の書を蹴り飛ばすとその反動で煙の中から脱出する。

「なのは！ フェイト！」

俺が二人を呼ぶと、二人は此方に近づいてくる。

「どうしたの？」

「はやての意識が回復した」

「ホント!？」

「ああ、だが直に乗っ取られる。だから、君達の自慢の知将に作戦を立ててもらえ」

俺はそれだけ言うとその場から立ち去ろうとする。

「何処に行くの？」

「私はここで退散させてもらう。面倒事はいやでね」

俺はそれだけ言うとその場から立ち去った……

◆◆◆

その頃、グレアムは管理局の一室で拘束されていた。

そこにやってきたのは……

「クロノス、戦いはどうした」

「逃げてきた。流石の私もこの先の展開を一人では乗り切れん」

「自慢の側近はどうした」

「アリシアか。あれではフェイト・テストアロッサを抑えるのがやつとだ。なのは、守護騎士、管理局を同時に相手取るほど馬鹿ではない」

グレアムの座るソファの背もたれの上に座りながら俺は会話をしていた。

「だが、時期が近付いている。もう少しさ」

「そういうえ、君に聞きたいことが……」

グレアムが俺に何かを問おうとするが、言葉を止めた。
何故なら、もうそこには俺の姿はなかったからだ。

「君は本気で世界を傾けるつもりか……」

グレアムは誰に言うわけでもなくそう呟くとゆっくりと瞳を閉じるのだった。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

俺は戦いの行方を見守る為、海の見える場所へと移動していた。

「勝者はこの俺だ」

俺が不敵な笑みを浮かべ、そういうと海に黒い半球が生成された。

おそらく、闇の書が本気を出したのだろう。

「後はアリシア次第だな」

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

時は一気に進み……

「「ブレイカー！」」

なのはとフェイトとはやての一撃が闇の書の闇を穿つ。

「ツ?!」

闇の書の闇は声にならない叫びを上げ、コアのみとなる。

「「転送！」」

ユーノ達のその一言で闇の書の闇のリンカーコアが軌道上へと転送される。

その瞬間、アルカンシエルの砲台がコアへと向けられる。

「発射！」

リンデイの一言でアルカンシエルから放たれた砲撃はコアを跡形もなく消滅させた。

「終わりつと。さっさとおさらばー」

行く末を見届けたアリシアは隙を見てその場からそくさと逃走した。

転移したアリシアは俺の元へとやってきた。

「お兄さん。終わったよ」

「ああ……詰めが甘いな」

「ふえ？」

アリシアが間拔けな声を上げると後ろに振り返る。

するとそこにはクロノの姿があった。

「クロノス。いや、十六夜政宗か」

「はやてから聞いたのか？」

「貴様は何を企んでいる？」

「質問には質問か」

「答えろ！」

俺が呆れたような態度を取るとクロノは怒気を高める。

俺はやれやれと言った様子で話を始めた。

「私は世界を変えるのさ」

「世界を……」

「以上だ。それでは」

「待て！」

俺はクロノの制止を無視すると拠点へと帰還した。



「後日、本作戦の最終目標を達成する」

「OK♪」

俺の一言にアリシアは嬉しそうにそう答える。

それ聞きながら俺は目の前の培養槽へと目を向ける。

「さあ、機は熟そうとしている。世界の破滅のな」

培養槽は全部で三つあり、その中にはそれぞれ少女が浮かんでいた。

「闇統べる王とその臣下。君達の力を見せてもらおう」

process 35 闇の書編、決着。政宗の最終目標。

ゲムムコーポレーション社長室にて。

「さあ、何の事でしよう?」

「惚けないでいただきたい! ゲムムコーポレーション社長、天ヶ崎恋殿!」

社長室の椅子に座る恋の前で声を荒げているのはクロノだった。

「私は十六夜政宗などという人物は存じませんし、我が社がそのような人物に協力しているという事実もありません」

「しらを切る気ですか!」

「しらを切るもなにも、知らないモノを知っているとは言えませんよ」

クロノの問い詰めに恋は一切動じることなく淡々とした様子で返答していた。

恋はクロノに背を向けて立ち上がると窓から外の景色を眺める。

「お話は以上ですか? ならば、お引き取りを」

「待つて……」

「これ以上! ありもしない事で我が社を陥れようとするようならば、こちらも相応の対応をさせていただきます」

「……ッ!? わかりました」

クロノは恋のその一言を聞くと会釈をして社長室を後にした。

クロノが出ていったのを確認した恋はおもむろに携帯を取り出し、電話を掛ける。

『……もしもし』

「ああ、私だ。そちらに頼みたいことがあるんだが」

『手短にお願ひします』

電話の相手は恋を急かす様にそう言い放つ。

「ハハハ、厳しいね。やはり、忙しいのかね？」

『手短にと言いました』

「すまない。管理局のお坊ちゃんが我らの事を上に進言するかも知れない」

『心得ました』

「話が早いね」

『此方で手回しします。それでは』

それだけ言うのと電話の相手は一方的に電話を切ってしまった。

恋を思わず携帯の画面を見てしまう。

「生きることに急ぎ過ぎではないかな? いや、もう“死んでいた”んだったね」

恋は微かに笑うとそう言うのと電話をしまい、再び社長席に座った。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
恋からの電話を切った、その人物。

その人物は黒いパンツスーツに身を包む女性。

髪は紫のロングストレートでその出で立ちは何処か不思議な雰囲気を漂わせている。その女性は電話をしまおうと目的地向かって歩を進めた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆
一方、その頃。

政宗は拠点の椅子に腰かけ、来るべき時を待っていた。

ちなみにその近くのソファにはいつもの様に寝転がるアリシアの姿もある。

「お兄さん、まだ〜?」

「まだだ」

「退屈だよ! 私に“新しい力”をくれるんでしょ!」

「それはもつと後だ。今は作戦の事だけを考えろ」

余りに退屈だったのかアリシアが珍しく駄々をこねだした。

俺は軽くそれをあしらうが……

「もう! 出かけてくる!」

逆に俺の態度に腹を立てたのかアリシアは拠点を飛び出してしまった。

だが、俺は特に何をするわけでもなく時の流れを待ち続けた。

◆◆◆◆◆
時は流れて……

夜の暗闇が町を包み、白い雪が空から降り注ぐ海鳴市を一望できる小高い峠。

ここにはなのは・フェイト・アリサ・すずかの四人に加えて。

闇の書の意志改め、リインフォースと守護騎士一同が集結していた。

「そろそろ始めようか、夜天の魔導書の終焉だ……」

「それは困るかな♪」

「この私の所有物になってもらうまではな」

その場の全員がそこに現れた人物に視線を向ける。

そこに居たのは人間状態の政宗とアリシアだった。

「お前たちは！」

「クロノス！」

ヴィータが俺の名を叫んだと同時に俺はバグヴァイザードライの銃口をリインフォースに向ける。

「回収させてもらおう」

「くっ！」

俺がそう言うのとリインフォースは金色の粒子となってバグヴァイザーに吸収される。

「リインフォースさん！」

「目的は達成した。撤収する」

「おっけー♪」

「待て！」

俺はその呼びかけを無視してその場去ろうとする。

だが、そんな俺達の動きを止める声がある。その場に響いた。

「待ちい！」

突然響いたその声は無意識のうちに俺をそちらの方向に向かせていた。

なんとそこには現在、休養中のはずであるはやての姿があった。

「はやて……」

「政宗、リインフォースをどうする気？」

俺に呼びかけるはやての声はかつての友人としての声ではなく、家族を守る一家の大黒柱としてのプライドや敵を見据える剣豪のような覇気が宿っている。

その声に宿る気迫はこの俺さえ微かに感情が揺らぐ程だった。

「話す必要はないな」

「リインフォースを返して！」

「アリシア」

「おっけー」

「待ち!」

はやての言葉を無視して俺は久しぶりに感じた「恐怖」という感情に従い、即座にその場を立ち去った。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「はやてに恐怖を感じた? この俺が?」

「お兄さん?」

「……まあいい。アリシア、時は来た。ついに我々が本格的に動く時だ」

「ついに世界をひっくり返すんだね♪ 楽しみだなあ」

喜んで辺りを飛び跳ねるアリシアを尻目に俺はリインフォースを入れたバグヴァイ

ザーをパソコンに繋げる。

『一体なにをする気だ』

「君を私の所有物にするのさ」

そのまま俺はパソコンを操作すると勢いよくエンターを叩く。

すると、バグヴァイザー内にバグスターウイルスが放たれ、リインフォースを蝕んで

いく。

『ガアアア！』

バグスターウィルスに蝕まれていくリインフォースは徐々にその姿を変えていく。

「誕生おめでとう。" グラフファイト"」

ウィルスに蝕まれ、完全にバグスターへと変化を遂げたリインフォースは上級バグスターの一体" グラフファイト"へと姿を変えたのだった……

Reflection / Detonation 編

process 36 新章開幕。始動する政宗の最後の

計画。

——海鳴市上空、X月XX日。

夜の海鳴市の上空に飛行する二つの影。

一人は高校の制服を着た、若干ウエーブのかかったピンクの髪の少女。

もう一人はオレンジのサイドテールの少女だった。

海鳴の夜空を飛びながら何かを話す二人の姿を遠くから見ている一つの影。

その影の主はラブリカと話していた、あの紫髪の女性だった。

黒のパンツスーツをきっちりと着ており、顔にはお面が付けられている。

「政宗様の予測外の事とは……報告の必要がありそうね」

女性はまだ一言そう言うのと、その場から姿を消した。



その数日後、俺とアリシアが住む、本拠点に全戦力が集結していた。

せつかなので、おさらいしよう。

まず俺、十六夜政宗を筆頭として。

仮面ライダーパラドクス、アリシア・テストロッサ。

ラヴリカ・バグスター、天ヶ崎恋。

元夜天の書の融合騎、現グラファイト・バグスター、リインフォース・アインス。

そして、紫髪の女性。

総勢五名、これが現在の全戦力だ。

「それで、本日は何故我々が集められたのですか？」

恋が口を開くと俺は紫髪の方を向いてこう言った。

「それは『風魔』がこれから説明する」

「はい」

風魔は立ち上がると一枚の写真を机に置く。

「昨日の夜にここ海鳴市の上空で発見しました」

写真に写っていたのは二人の少女だった。

俺は前世の記憶を呼び覚ます。

前世の記憶を頼りに思い出すと一人、ピンクの髪の少女は『キリエ・フローリアン』で

あることは思い出せた。

だが、もう一人のオレンジ髪のサイドテールの方は一切記憶になかった。

「こいつらは何者だ？」

「こんな子達が私達の計画に影響あるのかな？」

アインストとアリシアが続けて口を開く。

「元々、想定になかった存在です。どのような影響を及ぼすのか不明な為、警戒が必要かと」

「成程……」

俺は風魔の一言に頷くと写真を手取る。

俺の記憶にもない新たな存在か、面白くなってきたな。

「今後、この者達の監視を風魔に一任する。他の者は通常通りだ」

「「はっ！」」

「はーい♪」

全員が俺のその一言に了承の意を示すとアリシア以外の三人がその場から消えた。

三人が消えると同時にアリシアがこちらに近づいてくる。

「ねえ、お兄さんはあの二人をどう思う？」

「さあな、敵ならば潰すのみさ」

俺は立ち上がり、アリシアを置いて、その場を移動する。

移動した先には俺が闇の書から引きずり出した永遠結晶の姿があった。

「キリエ・フローリアンは必ずこの永遠結晶を狙っているはず、という事は次は高町なのは達と接触するだろう」

俺は携帯を取り出すと風魔に通信をかける。

『私です』

「発見したか？」

『いいえ』

風魔がそう言うのと俺は笑みを浮かべながらこう言った。

「では、八神はやてを見張っておけ。そうすれば奴らは姿を現す。姿を現したら俺を呼べ」

『了解しました。では』

話を終わると風魔はすぐに電話を切ってしまった。

「アイツは仕事は確かだが、正確に難があるな」

「お兄さん？」

俺を心配したのかアリシアが上層から降りてくる。

「アリシア、今日は楽しくなりそうぞぞ」

「ホントに!?! やったー♪」

アリシアの喜ぶ表情を横目に俺は今夜の事を考えていた。



その日の夜。

風魔ははやての乗る車を追跡していた。

その時、突如として目の前のトレーラーが爆発を起こす。

一機の重機がはやての乗る車の前に止まる。

その重機は普通の重機と比べても遥かに巨大であり、様々な重機の特徴を併せ持っていた。

その重機の上に現れたのはオレンジ髪の少女。

だが、その少女の姿は投影されたホログラムであった。

更に背後には無数の改造された重機が控えている。

「夜天の書の主、八神はやてね」

「確かにうちが八神はやてです」

二人がやり取りを始める、風魔はその様子を遠くから眺めていた。

すると、背後から何者かが風魔に迫る。

「ッ！」

それに気づいた風魔はキックで即座にカウンターを放つと大きく後退する。

風魔が襲撃者の方を向くとそれはオレンジ髪と一緒に居た、ピンクの髪の少女『キリエ・フロリアン』だった。

「あなた、何者？ さつきからずっと私達の事を見てたみたいだけど」

「……………」

「えーつと？ 大丈夫？ 言葉通じてるかしら？ あれえ…………おかしいわね」

「…………通じてる」

風魔がいきなり口を開くとキリエは驚いた様子で。

「うわっ！ ビックリした…………喋れるなら初めから話してよ」

風魔は視線を目の前のキリエからも近場で話すはやて達からも離す。

「あの…………ちよつと？」

「…………来た」

風魔がそう言うとはやて達二人以外がない道路の奥から一台のバイクが走ってくる。

そのバイクに乗っているのは一人の少女。

その少女は長い赤髪を後ろで三つ編みに纏めている。

「アマタ!？」

「知り合いですか…………」

「あなたはとりあえず後！」

キリエは風魔にそう言うときアミタと呼んだ少女の方へと向かっていった。

キリエが言った事を確認した風魔は物陰に隠れて携帯を開く。

「政宗様、発見しました」

『ご苦労、なのは達はラヴリカ達に足止めさせている。貴様もそちらに向かえ』

「了解です」

風魔は携帯を閉じると即座に目的地に向かった。

成。 process 37 始まる戦い！イリス・政宗同盟結

海鳴市の郊外にある潰れたボーリング場。

俺とアリシアはそこに居た。

俺達二人は現在、ある人物と向かい合っている。

その人物はキリエとオレンジ髪の少女『イリス』だった。

さて、何故こんな状況になったのか説明しよう。

それは数時間前に遡る……



風魔からの報告を受けた俺はアリシアと共に準備をすると目的地へと移動した。

瞬間移動で目的へと到達した俺は現状を確認した。

こちらはイリスとキリエが無数の重機を従えてはやとと相対している。

一方、増援に来ると思われるのはとフェイト、アリサ、すずか達の方へはグラフィアイトを、ヴォルケンリッターの方へはラヴリカと風魔を向かわせている。

「さて、手短に行こうか」

「はいはい♪」

《今こそ時は極まれり!》

《PERFECT PUZZLE!》

変身を終えた俺達はキリエ達の間割り込んだ。

「誰ですか!?!」

「政宗!?!」

アマタと呼ばれた少女とはやてが驚愕の表情を浮かべる。

だが、俺はそれを気にせずアリシアに。

「はやて達は任せる。こっちは話があるからな」

「了解♪」

アリシアは一言そう言うたアマタ達の方へ向かっていった。

「さて、お話をしようか」

「どういうつもり?」

「さあな?」

「……いいわ、聞きましょう」

「イリス!?!」

「そっちは話が分かるようで助かるな」

キリエは納得していないようだが、なんとか話しに持ち込めた。

「ここでは、なんだ」

「成程ね、じゃあ場所を移しましょう。いい場所があるわ」

「では、そこで」

イリスの案内で話し合いの場に場所を移した。

◆ ◆ ◆

一方、アリシアはアミタと戦闘を行っていた。

アミタは両手の銃からアリシアに向かって光弾を発射する。

《鋼鉄化》

それをアリシアは鋼鉄化で防御力を上昇させることで防いだ。

「強いねえ、心が躍る」

「退いてください! 私はキリエを止めないといけないんです!」

アミタはアリシアから距離を取る。

「どうしたの?」

「このままやっても、あなたを突破できそうにありませんので」

「だから?」

「切り札で! 強引に! 突破させていただきます!」

アミタがそう宣言すると銃をさっきまでの二丁の拳銃から一丁のスナイパーライフルへと変化させる。

そして、アミタは懐からあるモノを取り出す。

それは……

「へえ、面白いモノ持つてるね……誰から貰ったのかな？」

「私に協力してくれてる科学者の方です。あなた方に対抗するために」

なんとアミタが取り出したのはガシヤットだった。

アミタは取り出したガシヤットの上部を叩き、起動させる。

《カーン！》

そして、起動したガシヤットをライフルのスロットに装填した。

《マキシマムガシヤット！》

「必・殺！」

《マキシマムマイティクリティカルフィニッシュ！》

ライフルから発射された光弾はアリシアへと向かっていく。

「アハハ！」

アリシアはエナジーアイテムを操り、自身へと付与する。

《鋼鉄化》《鋼鉄化》《鋼鉄化》

光弾はそのままにアリシアに命中する。

「きゃあああああ!」

光弾が命中したアリシアはピンク色のエネルギーのドームに包まれると全身にノイズのようなものが走る。

すると、アリシアの体から光の粒子が霧散したかと思ったら強制変身解除に追い込まれた。

「なにをしたのかなア?」

「あなたを『リプログラミング』しました。これであなたは変身できません」

「ふざけないでよ……」

変身解除の生身の状態でアミタに殴りかからんとするアリシア。

アミタに向かって行こうとした、その時。

『アリシア、帰ってこい』

「いやだ! あいつは絶対……」

『帰ってこい』

「……クソツ」

アリシアはアミタに対して踵を返すと渋々、その場を立ち去った。



「(づ)苦勞」

「……………」

俺の元へと帰ってきたアリシアに声をかけるが、アリシアは無言のままだ。

「アリシア、これは都合が良くなった」

「……………どういうこと」

「俺はずっとリプログラミングの事を考えていたという事だ」

俺はそう言うのと懐から前まで使っていたゲームドライバーを渡した。

「これでもっと強くなれる」

アリシアは俺からゲームドライバーを受け取ると微かな笑みを浮かべた……………

process38 ラヴリカ&風魔VSヴォルケンリッター!

アマタとアリシアが交戦している最中、はやての元へと向かうヴォルケンリッターの四人。

その前に立ちふさがる者が居た。その人物はゲンムコーポレーションの社長である『天ヶ崎恋』だった。

「……そこ退いてもらおう」

「いくらレディのお願いでも、それは出来ませんね」

恋はそう言ってバグヴァイザーを取り出す。

「培養」

《Infection!》

《レッツゲーム! バッドゲーム! デッドゲーム! ワッチャネーム!?》

《ザ・バグスター!》

「ザファイラ、シャマル。お前たちは先に行け」

「ああ、分かった」

「お願いね」

「ボクが行かせるとしても？」

「邪魔すんじゃないええ！」

先に行こうとするシャマルとザフィーラを妨害しようとするラヴリカにヴィータの一撃が命中する。

《MISS!》

だが、ラヴリカを邪魔は出来たがダメージを与えることは叶わない。

「無駄無駄、カモン！ ラヴリーガールズ！」

ラヴリカがそう言うのと突然、数名のメイド服を着たバグスターが出現する。

ラヴリーガールズは嬉々としてラヴリカに手を振っており、ラヴリカも軽く手を挙げ対応している。

「舐めてんのか!？」

「まさか、彼女達は応援団だよ。ボク専属のね」

「せい！」

ラヴリカがそう語るとシグナムがラヴリカに剣を振るう。

《MISS!》

「ボクは『恋愛ゲーム』のバグスター。ボクのゲームにおいて暴力はバツだよ！」

ラヴリカの腕から薔薇の蔦のようなものが伸び、ヴィータとシグナムに放たれる。

だが、蔦は敢え無くシグナムによって切り捨てられた。

「お前は攻撃できんのかよ！」

「ボク程美しい男ともなるとどんな事しても許されるのさ」

ヴィータの問いに対してラヴリカは何処からか取り出した鏡で自分の姿を見つめながらそう答えた。

「さて、ではしばらくお相手願おうかな」

「チッ！ シグナム、こいつはアタシに任せて先に行ってくれ」

「分かった！ 任せるぞヴィータ！」

ヴィータのその言葉を信じ、シグナムはラヴリカをヴィータに任せて先を急いだ。

一方のラヴリカは邪魔する様子もなく、シグナムを向かわせた。

「邪魔しないのかよ？」

「必要ないね。何故なら、ボクは時間稼ぎだからさ。さて……」

「君がこれからボクの相手をするのかい？」

ラヴリカのその問いにヴィータは敵意剥き出しの笑顔で答えた。

アイゼンを構えるヴィータを前に余裕を崩すことなく、ラヴリカは言った。

「怖いねえ、ボクは粗暴な奴は……大嫌いだよ！」

「アタシもお前みたいなのは大嫌いだ！」

ラヴリカの手の平から放たれた花吹雪がヴィータに向かっていく。

ヴィータはそれを振り払い、一直線にラヴリカに突進した。



一方、先に向かったシグナムの前に今度は一人の女性が立ち塞がった。

その女性は紫の長髪と顔の仮面が特徴的な女性、『風魔』だった。

「誰だ？ 貴様もクロノスの仲間か!？」

「……………」

風魔は一言も発することなく右手に持ったゲームドライバーを腰に装着する。

すると、懐から一本のガシヤットを取り出す。

《HURRICANE NINJA!》

《ガシヤット!》

「十六夜と同じベルト! やはり……………」

「……………変身」

《ガツチャーン! レベルアップ! マキマキ! 竜巻! ハリケーンニンジャ!》

風魔が変身を終わると六人の忍者プレイヤーが姿を現す。

そのうちの四体がシャマルとザフィーラの居る方へと向かっていった。

「行かせるか!」

「……………」

忍者プレイヤーの方に行こうとしたシグナムの頭部にいつの間にか距離を詰めていた風魔の刀が振るわれる。

シグナムはその一撃を何とか回避するが即座に放たれた風魔の蹴りはシグナムの腹部に命中する。

「ガッ!?!」

腹部への一撃で怯んだ隙に黒いオーラを纏った風魔の回し蹴りが続けざまにシグナムに放たれる。

シグナムは横に大きく吹き飛ばされるが受け身を取った事ですぐに復帰する。

「強いな……………」

風魔の実力を知ったシグナムはシャマルとザフィーラを信じる事にした。

それは隙を見せればシグナムを以ってして容易に撃破されるからだ。

気を引き締め直し、シグナムは目の前の敵の撃破に集中することにした。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

「どういう事? ゲームドライバーは……………」

「そう、ゲームドライバーはバグスターであるお前には使えない。前までならな」

俺は自分のバグヴァイザーを取り出し、アリシアに向けてボタンを押した。するとアリシアはバグヴァイザーに吸収される。

『いきなり何するの!』

アリシアが抗議の声を上げているが無視してノートパソコンに繋がっている機械から一本のガシヤットを引き抜き、バグヴァイザーにセットした。

《ガシヤット!》

ガシヤット内部のデータがバグヴァイザーに移動し、内部のアリシアにインストールされていく。

『何々!? 何なの!?!』

「黙って終了を待て」

『いやいや! 無理だよ!』

アリシアのセリフにため息をつきながらも事情を話してやることにした。

「今、お前にはリプログラミングで組み替えられたデータの再調整とバグスターウィルの再インストール、そして、とあるデータのインストールが行われている」

『自分の体だから何となく分かるけど、何のデータを入れているの?』

アリシアのその問いに俺は笑みを浮かべ、言った。

「フェイト・テストロツサからコピーした、『人間の遺伝子』だ」

process 39 新たな敵、グラフィイト・バグスター参上!

シグナムと風魔は道路の上で激しい剣戟を行っていた。

風魔は回転しながら後方に跳び、その最中に光を放つ手裏剣を三つ、シグナムに放つ。

シグナムはそれを全て切り捨てて、構えを取り直した。

「……やはり、大した事ない」

「何、ここからだ!」

シグナムは剣を構え、再び風魔に向かっていく。

風魔はその一撃を躲し、シグナムに蹴りを放つが……。

「貴様なら、こうすると思っていた」

「……馬鹿な」

なんとシグナムは左手で剣の鞘を持ち、それで風魔の蹴りを防いでいた。

「一閃!」

驚愕で油断した風魔にシグナムの渾身の一撃が命中する。

シグナムの一撃で風魔は吹き飛ばされ、ガードレールに直撃する。

ガードレールは砕け、周囲を土煙が覆う。

少しすると土煙を引き裂いて風魔が姿を現した。

「良い攻撃だったけど……無駄」

「これでも駄目か」

再び二人の戦いによる剣戟が始まろうとした、その時だった。

『風魔、私だ』

「……政宗様」

突如、政宗から風魔に通信が入ってきた。

『作戦は一時終了だ。帰還しろ』

「……御意」

そう言つて通信を切ると風魔は変身を解いた。

「なんのつもりだ？」

「……あの方から帰還命令、速やかに帰還」

風魔は一言、そう言うとその場から姿を消した。

「結局、時間を稼がれてしまったか」

シグナムも静かに刀を鞘に納めた。



一方、ヴィータは……。

「ハハハ！ もっと楽しもうじゃないか！」

「うっせー！」

完全にラヴリカの戦いに翻弄されていた。

そもそも、ラヴリカに対して有効打を持たないヴィータではラヴリカを倒す事は出来ない上にそもそもその相性がかなり悪い。

戦況は圧倒的にヴィータに不利だった。

「ハッ！」

「クッソ！」

ラヴリカは放った蔦がヴィータのアイゼンを捉え、拘束する。

「受け取り給えー！」

そう言ってラヴリカが空いている左手をヴィータに向けると左手から花吹雪が放たれ、ヴィータに直撃する。

「ぐうううううううう！」

ヴィータは花吹雪の直撃を受け、後方に吹き飛ばされてしまう。

小さな体は地面に叩きつけられ、数回地面を転がった。

「そろそろかな。それじゃあ、ボクはこれで」

ラヴリカはそう言ってお辞儀をするとその場から消え去った。
ヴィータは拳を地面に叩きつける。

「クソ！ クソ！ こんなんじや、はやてを守れないじゃんか……」

道路の上でただ一人、ヴィータは自分の不甲斐なさを噛みしめていた。

◆◆◆◆◆

時は遡り……。

なのは達もまた、はやての元に向かっていた。

「はやてちゃん……」

なのはが不安そうな表情でそんな事を呟いた。

するとフェイト達は笑顔で。

「きつと、大丈夫」

「そうよ！ はやてだったら、きつと無事よ」

「だから、急いで助けに行こうね」

と、なのはを励ますように言った。

それを聞いたなのはは吹っ切れたように一回頷き、こう言った。

「うん、そうだね！」

なのはのその言葉に三人も笑顔を見せる。

その直後だった、なのは達の前に一つの人影が立ち塞がった。

「誰!？」

なのは達の前に現れたのは……。

「リインフォースさん……?」

「うそ……」

そこに居たのは消滅したはずのリインフォースだった。

そんなリインフォースの手にはバグヴァイザーが握られている。

「なんで……」

「こういう事だ」

リインフォースはそう言つてバグヴァイザーを構えるとボタンを押した。

「培養」

そう言つてリインフォースは予め手に持っていたグリップにバグヴァイザーを装着する。

《Infection!》

《レッツゲーム! バッドゲーム! デッドゲーム! ワッチャネーム!?!》

《ザ・バグスター!》

リインフォースの体が赤黒いノイズのようなものに包まれる。

ノイズが晴れるとリインフォースの姿は大きく変化していた。
その姿は……。

「……グレングラフアイトバグスター、参上」

「グレングラフアイト……」

再び敵として目の前に立ち塞がったりリインフォースの姿を四人は呆然と見つめる。

「いざ、参る」

リインフォース改めグレングラフアイトは自身の武器である『グレングラフアイトファン
グ』を構える。

一気に距離を詰めたグレングラフアイトは槍の一撃をなのはに放つ。

一瞬反応が遅れたなのははもろに攻撃を受けてしまい、ガードレールに叩きつけられ
てしまう。

「はああああああ！」

その隙に両サイドからフェイトとアリサが迫ってくる。

「甘いー」

フェイトの攻撃をファングで受け止め、アリサの攻撃は身を引いて回避。

その後、アリサに対して蹴りを放つ事で吹き飛ばし、フェイトにはファングを持つ手
とは反対の腕で拳を放った。

反撃を受けた二人もなのはと同じようにガードレールに直撃した。

「せいー!」

それを見たさすがが何本かの氷の槍を生成し、グラフィイトに向けて放った。

「効かん!」

だが、その攻撃をグラフィイトはファンングを高速で回転させることで受け止め、すずかに向かつていく。

距離が一気に詰まり、グラフィイトはすずかにファンングの薙ぎ払いを繰り返す。

すずかは辛うじてその手に持ったスノートライデントでその一撃を受け止めるが。

「良い反応だ。だが!」

グラフィイトはすずかが薙ぎ払いを受け止めて怯んだ隙を突いて放った蹴りを受け、三人と同じようにガードレールに叩きつけられた。

グラフィイトはファンングを軽く振るい、構え直すとなのは達の方へと向いた。

「私は……主より貰ったこの名を返還する!」

グラフィイトはファンングを胸の前に突き出し、宣言した。

「今の私はドラゴナイトハンターZの竜騎士グラフィイト! お前達の敵だ!」

グラフィイトはそう言ってその場から姿を消した。

なのはがグラフィイトに向けて差し出していた手は空を切り、ぱたりと地面に落ちて

しまう。

「リインフォースさん……」

四人はただただ呆然とさつきまでグラフィアイトの居た場所を眺めていた。

◆◆◆◆◆

「終わったぞ」

「アリシアちゃん、ふっかーっ！」

そんな事を言いながら、アリシアは嬉しそうに右腕を掲げる。

俺は復活したアリシアにゲームドライバーを差し出す。

「これでお前は更に強くなった」

「やったー♪ これでもっともっと、フェイトと遊べるんだあ……」

ゲームドライバーを受け取ったアリシアは心底嬉しそうな表情を浮かべる。

「さて、色々やらなくてはな」

「ねーねー！」

「妹と遊ぶのは今度にしろ」

「そんな殺生なあ……」

アリシアの抗議の声が聞こえるが無視して俺は準備を進める。

イリスとの話し合いの為、俺は指定された場所に向かった。

process40 結成、新たなる同盟。イリスに秘められたモノ。

「では、話し合いをしようか」

俺は近くにあったソファにしつかりと腰を下ろすと右足を上げて足を組んだ。

向かい側には軽くソファに腰かけたキリエと二つのソファの間に置かれたテーブルの上に置かれた液晶の端末のようなものから映し出されたイリスのビジョンがあった。

ちなみに俺の両側にはアリシアとグラフィイトが控えている。

ついでに言うると他の連中は別の任務に向かわせた。

ラヴリカは会社の業務を風魔には向こう側の監視を任せている。

さて、話を戻そう。

俺がソファに腰掛けるとイリスが話を始めた。

「それで、私達と同盟を組みたいってどう事かしら?」

というイリスの問いに私は。

「言葉通りだ」

とただ一言返した。

それを聞いたイリスは小さなため息をつく。

「話を変えましょう。私達が貴方達と組むとどういうメリットがあるのかしら？」

「我々は障害となる管理局のデータを持っている。当然、実力も」

「それ以外には？」

「貪欲だな。そうだな……」

俺の話聞いてイリスが少しずつ目を細めていく。

そして、俺の次の一言でイリスのみならず、横で聞いていたキリエも目を見開いた。

「君達がお望みの永遠結晶は私が持っている」

◆ ◆ ◆

「さて、データも十分に集まりつつありますね」

ラヴリカは会社の地下に備えられた研究所に居た。

壁際にはいくつものスーパーコンピュータが並べられており、それらは一つのガシャットに接続されている。

「“世界の神をも超える力”。その膨大なデータを耐えうるハードがついに完成しました。後は蓄積したデータをインストールするのみ」

そう言ってラヴリカはガシャットやスパコンに接続されているパソコンのEnterを押した。

するとデータベースに蓄積された膨大な戦闘や能力のデータが一本のガシヤットにインストールされていく。

「さあ、政宗様に報告しなければ」

そう言っつてラヴリカは研究室を後にした。

◆◆◆

「永遠結晶を貴方が……!?!」

「そうだ」

俺がそう言うのとイリスとキリエは明らかに驚愕の表情を浮かべていた。

一方で俺は依然冷静なままであった。

まあ、自分の事なので当然なのだが……。

「……わかったわ。協力を受け入れる」

「イリス……」

「物分かりが良くて助かるね。それと、もう一つ」

「何かしら?」

折角同盟になったのだから、俺は気になっていた事を頼む事してみた。

「君の内部データを見せてほしい。非常に興味深い」

「なんだか、解剖させてくれと頼まれているようで嫌なんだけど……」

「そんなこと言わずに」

「……はあ、いいわよ。別に」

イリスはそう言うのと先ほどまでそこに居たビジョンが消滅した。

おそらく一時的にスリープ状態に入ったのだろう。

俺はテーブルの上の端末を掴むと操作を開始した。

「さて、私は少し外すね。ピンク髪のお姉さん、一緒にどうかな？」

「いいわよ。私もちよつと外の空気を吸いたくなっちゃった」

そう言ってアリシアはキリエを連れて外に出て行った。

それを見届けた俺はすぐに作業に戻る。

流石にかなり情報量が多く、中々に苦労をすることになった。

だが、あるデータが俺の目に入ってくる。

「記憶データ：イリスは分かるが、こちらのMというのはなんだ？」

俺はそのデータを開こうとする。

しかし、データには嚴重なロックがかかっているとしてもこの設備ではこじ開けられないと判断した。

「面白いものがあつたな」

「面白いものがあつたな」

俺はそのデータに興味を惹かれていた。

必ずこのデータには何かあると俺は確信めいたものを感じていた。



一方で風魔は管理局に忍び込み、情報収集をしていた。

「……………」

風魔が一つの部屋の前を通りがかった。

すると、目の前から二人の少女が歩いてくる。

一人は金髪の少女、アリサ・バニングス。

もう一人は紫の髪の少女、月村すずかだった。

風魔は急に立ち止まり、二人の様子を眺め始める。

まるで、二人を見守っているかのように……………。

はっとして、風魔はすぐに自分の任務に戻っていく。

彼女の感情は消えたはずなのに、何故か。

彼女の心には何かがつつかえたような奇妙な感覚が芽生えていた。

process 41 マテリアル誕生。暗躍する影、政宗ともう一つ……

「さて、それで気分はどうかかな？」

「上々だね、感謝するよ。マサムネ君、まさかこの世界で君のような者が居るとは、いい誤算だったよ」

デスクの椅子に腰かける政宗の前には一機のタブレットが置かれている。

タブレットの画面は電話の通話状態のような画面になっている。

そこから聞こえるのは穏やかな雰囲気のような男性の声だった。

「君には近いうちに顔を出せるだろう。期待していてくれたまえ」

「ハハハ、いいだろう。期待しておくよ」

俺の笑い声を聞いた男性もまた小さな笑い声をあげた。

「それでは……話し合いといこうか」



一方で政宗が謎の男と話している最中。イリス達は別の作業をしていた。

「こっちだよ」

イリスとキリエはアリシアに案内され、拠点の地下に移動していた。

そこには三つの培養槽があり、そこには三人の少女がそれぞれ浮かんでいる。

「お兄さんにはこの三人は動かしていいって許可貰ったからね。動かしてよ」

「それじゃあ、起動させるわ」

イリスは特に意見することもなく、三基のマテリアルの起動に取り掛かった。

少しして、イリスの足元に魔法陣が展開させる。

するとマテリアルが起動し、培養槽が碎け散る。

起動した三基のマテリアルはゆっくりと着地し、閉じていた瞳を開けた。

「さて、こちらの準備もばっちりだね♪」



あれから少しの時が経ち、政宗は夜の海鳴の町をビルから眺めていた。

背後には俺の部下が一堂に介している。いよいよ開戦の時だ。

「イリス、そちらはどうだ」

『いつでもいいわ』

俺がイリスに進捗を聞くと割り込みで三人が会話に入ってくる。

『早くしてよ！ ボクはもう待ちきれないよ！』

『我慢してください。もうじきですから』

『我らの準備は万全故、早く指示をださんか。早くせんと一人が暴走を始めるぞ?』
全く騒々しい奴らだ。

「作戦開始。邪魔する者は薙ぎ倒せ」

『了解したわ』

イリスはそう言うのと回線を切る。

それと同時に海鳴の町から火の手が上がり始める。

それを見た俺は背後に控える部下たちに指示を送る。

「さて、我らは予定通りだ。アリシアはレヴィと共にフェイトを討て」

「はいさー♪」

俺の一言にアリシアは嬉しそうに腕を上げ……。

「風魔はアリサとすずかを担当しろ」

「御意」

風魔が頭を垂れ……。

「グラフィアイトは守護騎士を止めろ」

「心得た」

グラフィアイトが肯定の意を示し……。

「ラヴリカも守護騎士の方に付け」

「ええ、分かりました」

ラヴリカがお辞儀をする。

俺は全員の反応を聞くと立ち上がり、海鳴の街を見下ろしながら言った。

「さあ、始まりだ！ 弱者を蹂躪しろ！」

「「了解！」」

その叫びと共に部下たちは一斉に各々の持ち場へと向かっていった。

「さて、イリス。いつ、裏切る？」

俺は笑みを浮かべながら、しばらくこの戦いをここから傍観することにした。

◆ ◆ ◆

アリサとすずかはなのはとフェイトと別れ、機兵の相手をしていた。

「キリがないわね！」

「確かにね！」

無駄口を叩きながら二人は機兵達を粉砕していく。

その背後から一機の機兵が二人に向けて攻撃をしようとする。

「邪魔」

だが、その機兵は突如現れた風魔によって両断され、爆発四散した。

アリサとすずかも風魔の存在に気付き、三人は対峙する。

「風魔……」

「気を引き締めていくわよ。さすが」

「うん」

二人は気を引き締めて己が武器を構える。

そして、風魔もまた武器を構え、戦闘態勢に入った。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆

一方、グラフィアイトとラヴリカはヴィータとシグナムと相対していた。

「ここより先は行かせません」

「退いてくれ！ アタシは……」

「ヴィータ」

ヴィータはグラフィアイトに必死に呼びかける。

だが、シグナムに呼びかけられると武器を構えた。

「ヴィータはあつちの男を頼めるか？」

「解った……でも」

「解っているさ。必ず連れ戻す」

シグナムがそう言うのとヴィータは力強く頷き、ラヴリカと向き合った。

「行くぞ！」

「きたまえー！」

ヴィータの一撃に吹き飛ばされ、ラヴリカはその場から飛んでいき、ヴィータもそれを追いかけた。

この場にはグラフィアイトとシグナムがただ黙して互いの得物を構えている。

「行くぞ、グラフィアイト」

「来い、烈火の将」

お互いの初撃が衝突し、周囲には衝撃波が走る。

二人の戦いも始まりを告げた。

◆ ◆ ◆

その頃、ある場所には。

「さあ、フェイト。お姉ちゃんと遊ぼう！」

「ずるいよ！ ボクも混ぜて！」

「えーつと……」

いつもお調子つぷりを発揮するアリシアとそれに同調するアホの子のレヴィ。

そして、それをちよつと呆れたような困ったような様子で眺めるフェイトが居た。

「じゃあ、始めよう！ そして、誰が強いかはつきりしよう」

「うん、行くよアリシア……」

「ボクもやるぞー」

三人の奇妙な姉妹対決もまた始まろうとしていた……。

process 42 アリシア覚醒!究極のパラドクス

!

アリシア達の戦場は海上から水族館のステージへと場所を移していた。

「せいー!」

「なんのー!」

フェイトのバルディッシュの一撃をレヴィが自らのバルニフィカスで防ぐ。

攻撃を放ったことで隙が出来たフェイトに、パズルゲーマーとなったアリシアが回し蹴りを放つ。

しかし、アリシアの一撃をフェイトは身をよじることで回避し、そのまま空中回転することでその場から離れ、レヴィ達と距離を取った。

「もー! 邪魔しないでよね!」

「そつちこそ!」

レヴィは標的をフェイトからアリシアに切り替えるとアリシアに向かって攻撃を放つ。

対するアリシアは鋼鉄化を獲得し、レヴィの攻撃を受け止める。

そのまま空いた方の腕を拳を繰り出すが、レヴィは咄嗟に後ろの下がることでこの攻撃を回避した。

すると今度はフェイトの方がアリシアに奇襲を掛ける。

気付いたアリシアは大きく後ろに仰け反る事でフェイトの横なぎを回避し、そのまま後方に手をつく事で上空のフェイトにムーンサルトキックを繰り出す。

フェイトは身を引くことでこの攻撃は回避するが、キックアウトの要領で放たれたアリシアの連撃は躲せず、直撃。

直撃を受け、少し怯んだが即座に復帰。バルディツシュを大きく振るいアリシアを引き離した。

「やるね。流石フェイト」

「アリシア姉さんも前より強くなってる」

「ボクを無視するな！」

目にも止まらぬ速さで接近したレヴィの一撃がフェイトに放たれるが、フェイトはそれを受け止める。

「邪魔すんなって」

「ッ！」

今度はアリシアの攻撃がレヴィに向かって放たれる。

レヴィはアリシアの攻撃を一度は柄の部分で受け止めるが、そのまま押し切られ、吹き飛ばされた。

だが、レヴィは空中で体制を立て直すと吹き飛ばされた勢いのまま壁を蹴ってアリシアの方へと跳んだ。

「せいや!」

「ふんぬ!」

勢いの乗ったレヴィの一撃を鋼鉄化の重ね掛けで受け止めようとしたが……。

「ツー!」

受け止める事が出来ず、アリシアは後方に吹き飛ばされて地面を転がった。

変身も解除され、アリシアは地面に倒れた。

「一撃必殺! やっぱりボクって強いなあ!」

「調子乗んな」

アリシアはふらふらと立ち上がり、レヴィを睨みつける。

「無理しない方がいいよ。ボクの一撃をまともに受けたんだから」

「ちえ、本当はアンタなんかに見せるためのものじゃなかったのに」

「?」

アリシアは隠し持っていたゲームドライバーを取り出し、構えた。

「ドライバー……？　でも姉さんはドライバーは使わないはず」

「今更、そんなベルトを付けたらどうにかなるとでも思ってるのか？」

「当然！」

アリシアはドライバーを装着し、ギアデュアルを構え……。

「見せてあげるよ、フェイト。レベルアップした私の姿を」

ギアデュアルをゲーマードライバーにセットした。

《デュアルガシャット！》

《The strongest fist! What's the next st

age?》

「マックス大変身」

《マザルアップ！》

《赤い拳強さ！　青いパズル連鎖！　赤と青の交差！》

《PERFECT KNOCK OUT！》

「さて、反撃開始といこうかな」

《ガシャコンパラボレイガン！》

音声と共にアリシアの手に小さな斧のような武器が握られる。

《高速化》

アリシアは高速化を用いて一瞬でレヴィの背後に回り込む。

レヴィは反応できず、アリシアの攻撃をまともに受けてしまう。

フェイトよりも更に装甲が薄いレヴィに今のアリシアの一撃は致命傷にも匹敵する。

一度で大ダメージを受けたレヴィは怯む。

アリシアはそのまま回し蹴りを放ち、レヴィを壁に叩きつけた。

「強い……」

「さあ、フェイトやろうか♪」

その時のアリシアの表情は仮面で隠れていてフェイトには見えない。

しかし、その声色は歓喜に満ち溢れていた。

process 43 アリシアとフェイト

アリシアの攻撃で壁に叩き込まれたレヴィはゆっくりと立ち上がる。

立ち上がったレヴィは若干よろめきながらもアリシアに向かって行こうとする。

「くっそー！ ぜったいにゆるさないからなー」

『レヴィ、帰ってきてください』

「シュテるん!？」

レヴィを呼び止めたのはシュテルだった。

「なんで!？」

『なんでもです。早く帰ってきてください』

「ぶー！ わかったよ、今行くよー」

シュテルに呼び出されたレヴィはその場を後にした。

■ ■ ■ ■ ■

パーフェクトノックアウトゲームに変身したアリシアとフェイトが睨み合い、しばしの静寂が訪れる。

静寂を破る為、ドーム状の屋根の端から落ちる一滴の水。

その水滴はぼちやん。とプールという大きな水溜りに落ち、波紋を広げながらかすかな音を立てた。

その一瞬、フェイトとアリシアは同時に動いた。

二人の獲物が火花を散らしながら幾重にも重ねられる、行きつく暇もない剣戟が繰り広げられる。

均衡を破ったのはアリシアだった。

「せーいー」

武器での攻撃の途中でアリシアが放った蹴りはフェイトの隙を突き、彼女を仰け反らせた。

獲物でしか攻撃できないフェイトとは違い、アリシアは全身が武器となる。

遠距離も中距離も近距離も互いが全てに対応できる中でこの差は非常に大きいものであった。

一瞬の隙でフェイトは一転、防戦に回ることになってしまった。

「ほらほらほらあー！」

「つく……」

攻撃と素早さを得意とするフェイトは防御をあまり得意とはしていない。

いや、正しくは装甲の薄さ故に防御に回るべきではないのだ。

だが、アリシアとの闘いではそうもいっては居られないことはフェイト自身がよく知っている。

だからこそ。

「はあー！」

「へ!？」

フェイトはアリシアの横に払う攻撃をしゃがんで回避し、アリシアの足を払った。足を払われたアリシアは当然転倒しないように手を突こうとする。

フェイトはそこを狙った。

「せいやあー！」

「っ!？」

フェイトは転倒しないように手を突こうとした事でアリシアの防御が薄くなったのを見逃さなかった。

フェイトは鎌を大きく振り払いアリシアを吹き飛ばした。

「ちっー！」

アリシアは空中で体制を立て直し、地面に着地した。

しかし、着地したアリシアのすぐそばにフェイトが接近する。

今度はアリシアはしっかりと防御し、フェイトを押し返した。

「……」

「……」

再び二人が睨み合いに入る。

今度、静寂を破ったのはフェイトだった。

「アリシア姉さん……」

「なあに？」

「姉さんは本当に私と戦わないといけないの？」

疑問だった。姉であるアリシアがフェイトと戦わなければならないのが。

その理由が知りたかった。

「当たり前じゃん。だって、フェイトよりも私の方が優れてるって……」

「誰に証明するの？」

「へ？」

「母さんは姉さんが殺したんだよ？ だったら、誰にそれを証明するの？」

「それは……それは……」

あれ？ 何で私はフェイトと戦ってるの？

いや、私はフェイトと戦って勝たないといけない。なんで？

証明するためだ。誰に？ 母さんハもういなイ。

ナンデカアサンはイナイノ？ ダツテ、ワタシガころシタ。
ジャア、ナンデふえいとトタタカウノ？

「ワタシハ……」

「姉さん！」

「ナンデワタシハふえいとトタタカウノ？」

アリシアの手から武器が落ち、アリシアは崩れるように座り込んでしまう。
変身も解け、アリシアは完全に戦意を失っていた。

「ナンデ……？ ナンデ……？」

瞳からは光が消え、魂が抜け落ちたように放心状態に陥ってしまった。

彼女は壊れた人形のようにアリシアはただ同じことを繰り返すだけ。

「ナンデ……？ ナンデ……？」と誰に問いかけるわけでもなく。

「姉さん……」

フェイトもバリアジャケットを解除すると壊れたアリシアをゆっくりと抱きしめた。
アリシアの体は怯えるように小刻み震えていた。

「ふえいとオシエテヨ……ワタシハナンデカアサンヲコロシタノ？」

「姉さん、大丈夫だよ。私がついてる」

壊れてしまったアリシアの瞳から一筋の涙が頬を伝い、地面に落ちた……。

「くだらない結末だったな」

アリシアの様子を遠くから眺めていた俺の口からはそんな言葉がこぼれていた。

「いけないいけない。つついっ口から出てしまった」

「いいのではないかな？ たまには……」

俺の背後の闇から声が響く。新たな俺の“協力者”の声だ。

「そういうわけにもいかないさ」先生“

「ははは。よしてくれ、ガラじゃない」

「貴方の趣味に合わせるような性格じゃない」

「ごもつとも」

その人物は闇からゆっくりと姿を現した。

「計画通りだね。政宗君」

「そうですね先生。いや、“ファイル・マクスウエル所長”

「やめてくれ。私はもう所長ではないよ」

闇から姿を現したのは温和そうな顔をした男性。

今は亡き惑星再生員会の所長、ファイル・マクスウエルだった。

process 44 最高神の力

「さて……」

俺は少しの間の留守を先生に任せ、かつて住んでいた海鳴の町を歩いていた。

我々との戦いから引き離す為に管理局が警察を装って住民を既に避難させたのだから、 “人” の気配はまるでない。

しかし、俺からすれば好都合だ。おかげでゆっくり相手が出来る。

「出てくるがいい。こういうのには慣れてないと見えるぞ」

「……………」

俺がそういうとその男は姿を現す。そこに現れた『ユーノ・スクライア』によく似た男だった。

しかし、俺の知っている奴とは背丈も外見の年齢も全然一致しない。

「どういうわけだ？ 新しい変身のお披露目でもしたかったのか？」

「……………まさか、ボクは変身なんてしてないよ。これが今のボクの姿さ」

「ほう……………どういうトリックかは知らないが、一体私になんの用かね？」

俺が尋ねるとユーノは腰の後ろに手をまわし、俺を見据える。

「お前に滅ぼされた未来”からお前を倒しに来たのさ”」

「プツ……ハハハハハ！ お前が私をか？ フハハ、未来では冗談の一つでも言えるようにでもなったのかね？」

「冗談なんかじゃないさ」

「……やってみろ」

俺はバグルドライブを装着し、ガシヤットを取り出し、構える。
すると、ユーノもまた腰の裏に回していた手をゆつくりと表に出す。

なんとその手には『ゲームドライバー』が握られていたのだ。

「……何？」

「まさか、ボクが何の策もなしに未来からやってきたと思っていたのか？」

「そうか、アミティエ・フロリアンのガシヤットも貴様の仕業か」

「彼女とは縁があつてね。協力してもらってるんだ」

「そうかね。では、彼女の元に君の亡骸でも持っていくとしよう」

《仮面ライダークロニクル！》

「ボクが君を倒して”あの未来”を変えて見せる」

《マイティアクションX！》

ユーノはドライバーを腰に装着し、ガシヤットを構えた。

「グレード0……」

「変身！」

《バグルアップ！ 天を掴…ライ…！ 刻め…ロニ…！ 今…時…極まれり！》
 《レベルアップ！ マイティジャンプ！ マイティキック！ マイティー！ アク
 ショーン！ エックス！》

「コンティニューしてでも、クリアする！」

ゲムデウスクロノスへと変身した俺はユーノの方へと走り出す。

そして、仮面ライダーゲムムへと変身したユーノも俺の方へと走り出した。

二人の距離が縮まった瞬間。俺は剣を振るい、ゲムムを切り裂く。

HIT!の文字と共にゲムムに甚大なダメージが入る。やはり、力量差は明白だ。

「ぐああー！」

一撃で致命傷のダメージを受けたゲムムは地面を転がる。

俺は思わずため息をついてしまった。

「……やはりこの程度か」

「まだだ。やっぱり、レベルゼロじゃ君の相手はできない。……これじゃないとね」

そういつてユーノは一本のガシヤットを取り出す。

そのガシヤットはマキシママイティに似た形状をしているが、紫主体のカラーリン

グはゲンム仕様。

俺の知らないガシヤットだ。

「私の知らないガシヤットだど？」

「お前を倒す。その為にボクの生涯をかけて作った”究極のガシヤット”だ！」

そういうと、ユーノの瞳が紫に輝き、その雰囲気は一変した。

「思い知るがいい、”最高神”の力を……」

《ゴッドマキシマムマイティー！ エーツクス！》

「グレードビリオン、変身！」

《マキシマムガシヤット！ ガッチャーン！ 不ウ滅ウ！》

すると、すぐさま拳でガシヤット上部のボタンを押す。

《ゴッドマキシマムエーツクス！》

「ビリオン？」

「最高神たる『私』のレベルは……十億だ」

「十億とは、笑わせてくれる！」

俺は盾を振るい、触手での攻撃を繰り返す。

ゲンムは触手での一撃をもろに受けるが、まるでダメージが通っている様子がない。

「馬鹿な……」

俺は何度も何度も触手を振るうが、何度やっても結果は変わらない。
ゲムムにダメージは通らない……。

「最高神にこんなものは通用しない」

ゲムムはゆつくりと俺の方へと歩みを進める。

俺は剣をベルトの前に構え、ポーズの構えを取る。

「コズミッククロニクル、起動」

《PAUSE!》

その音声と共に世界は停止し、俺のみが動くことを許される世界へと変化する。

「流石に貴様もポーズの前では無力……」

俺は剣を構えながら、ゲムムへと近づいていく。

剣が届く距離にまで接近し、俺は剣を振り上げた。

「少し驚いたが、これで終わりだ」

そうして、俺が振り上げた剣を振り下ろそうとしたその瞬間。

俺の腕が停止しているはずのゲムムに掴まれる。

「何!？」

「私が貴様のポーズへの対抗策を用意していないとも思っていたのか! ふん!」

ゲムムの拳が俺の顔面に直撃する。

その一撃の衝撃はマスターマインドガードの機能で全身に拡散される。

だが、それでも衝撃を消しきれず、俺の体は上空へと投げ出される。

(なんだ、何が起こった?)

一瞬、理解が追い付かなかった。ゲムムがポーズの中を自在に動けるなど、あり得ない。

すぐに空中に投げ出された俺の体はすぐに重力によって地面へと叩きつけられた。

《RESTART》

「ガハッ……!!? 馬鹿な」

「まだ序の口だ」

ゲムムはそう言って腕を天に掲げる。

すると空から無数の隕石が俺に向かって落ちてくる。

「何?!」

俺は咄嗟に回避行動をとるが、隕石相手にそんな事が通用するわけもない。

直撃こそ免れたが、その衝撃は俺に甚大なダメージを与える。

「ぐあああああ!」

俺は再び空中へと投げ出され、次々と隕石が衝突したことによる衝撃が俺を襲ってくる。

俺は地面を数回転がり、剣を支えにしながら立ち上がる。

そして十数秒が経過し、俺のライフは全快する。

もしも、追撃されていたら俺のライフ確実になくなっていた。

今のゲムムはそれほどまでに圧倒的な力を持っている。

「その力は……」

「私が起動したゲーム。コズミッククロニクルは宇宙崩壊の危機から地球を救うゲームだ」

「なんだと……」

「そう、私は宇宙にコミットした。そして宇宙は、時の概念を歪める……」

ゲムムはその巨体に似合わぬ速度で俺との間合いを詰める。

ゲムムの右手に紫のオーラが収束し、強力な一撃を放つ体勢となる。

その右手から放たれた一撃は俺を遥か上空へと吹き飛ばした。

するとゲムムも足の裏からジェット噴射しながら、俺の後を追ってくる。

ゲムムの一撃により、俺は宇宙空間にまで吹き飛ばされる。

「馬鹿な……宇宙空間だと」

そしてゲムムもすぐさま宇宙空間へと至り、俺の前に立ちはだかる。

「ぬうん！」

よく見るとゲムムの腕が遙か遠くへと伸びている。

ゲムムはその腕を振るい、俺に一撃を叩き込もうとしている。

俺はガードの体勢を取り、ゲムムの腕を受け止めようとした。

しかし、その攻撃は俺の想像を遙かに超えた一撃を叩き込むために振るわれていた。

その腕は俺達が地上からいつも地上から眺める存在、月を掴んでいたのだ。

ゲムムは月をまるでバレーボールか何かを扱う様にして俺へと叩きつける。

その規格外の一撃を防ぎきれぬわけもなく、俺は再び凄まじい勢いで吹き飛ばされた。

今度は宇宙空間から地球へと戻され、地上へと落下した。

宇宙空間から地球まで吹き飛ばされる衝撃は俺の体から地面へと伝わり、地面には巨大なクレーターが形成される。

続いてゲムムも宇宙空間から地球帰還する。

その際の衝撃は足の裏のジェット噴射によって相殺される。

「私は望むままにゲームを作り出し、世界のあらゆる概念を変える事ができる。貴様に勝ち目はない」

馬鹿な。俺が負けるだど？ ふざけるな。

俺は……こんな所で……。

「とどめだ……」

そういつてゲナムがゲーマドライバーのレバーに手をかけた瞬間。

ゲナムの体に紫色の電流が迸る。

「グウ……今はこれが限界か……」

今は逃げる他ない。俺はその場から姿を消した。

その直後にユーノの変身は解除される。

「まだ、ボクの力では時限式の力か」

ユーノはゴッドマキシマムのガシヤットを握る。

「必ず、ボクが奴を倒す」

■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■ ■

まさか、未来で奴があれほどの力を手に入れているとは……。

「これは急がなければ……」

俺は少し痛む体を押して拠点へと帰還する。

「お帰り政宗君。随分なダメージを負ったようだね」

「先生、首尾は？」

「問題ないさ。手駒はだいぶ減ったけどね」

「気にするな。あいつらは元々頭数になんて入ってない」

俺は椅子に腰かけ、足を組む。
「急ぎ、究極のガシヤットを完成させなければ」

p r o c e s s 4 5 アリサ&すずか v s 風魔

なのは達の元に向かうアリサとすずか。

その前に立ち塞がったのは仮面の女『風魔』であった。

「そこをどきなさい！」

「否。主命故、出来ない相談」

「だったら倒します！」

すずかの言葉に対し、風魔はゲーマドライバーを装着し、ガシヤットを構える。

《ハリケーンニンジャ！》

「……変身」

《レベルアップ！ マキマキ！ 竜巻！ ハリケーンニンジャ！》

仮面ライダー風魔へと変身を遂げた風魔は二本の刀を構える。

「参る」

次の瞬間、風魔は一瞬でアリサとの距離を詰め、刀を振るう。

アリサはなんとかその一撃を防ぎ、後方へと飛ぶ。

すると、すずかが無数のつららを風魔に向かって放つ。

風魔は動じることなく、つららを一本残さず切り落として見せる。

距離を取ったアリサとすずかは再び構えなおした。

「どうする？ アイツ、かなり強いわよ」

「そうだね。私がバックアップするからアリサちゃんは切り込んで」

「OK！ 任せて！」

その言葉と共にアリサは風魔に向かって行く。

風魔も迎撃体勢を取り、アリサと剣戟と繰り広げる。

アリサの炎を纏った剣は風魔に徐々にダメージを与えていく。

しかし、アリサも風魔の攻撃を受けきれず徐々に削られていく。

「アリサちゃんー！」

すずかの声が響き、アリサは咄嗟に風魔に蹴りを入れて後方に飛び退く。

すると上空から巨大な氷塊が風魔へと落ちてくる。

風魔は咄嗟にガシヤットをキメワザスロットに装填し、ボタンを押す。

《キメワザ！ ハリケーンクリティカルストライク！》

二本の刀を高速回転させる事で生み出された竜巻が氷塊を粉々に砕く。

砕けた氷塊の間からアリサが姿を現し、風魔に炎を纏った強烈な一撃を放つ。

流星の風魔も予期せぬ攻撃を防御が間に合わず、アリサの攻撃をもろに受けてしま

う。

アリサの一撃でライフが減少するが、風魔は風を纏った回し蹴りを放つことでアリサを引き離す。

「よし、結構いいのが入ったわ」

「……少し効いたっ？」

突如、風魔の視界にノイズのようなものが入る。

同時に目の前の敵アリサとすずかに謎の親近感を覚えていた。

それはまるで、“自分の家族”を相手にしているような感覚。とても不思議な感覚だ。

「せえいー！」

風魔が少し不思議な感覚に浸っていると炎の剣を振り上げたアリサが目の前に接近していた。

その一撃を風魔は剣をクロスして受け止める。

しかし、剣に纏われた炎が徐々に風魔のライフを削る。

風魔はクロスした剣を大きく左右に振るい、アリサに少しの隙を作ろうとする。

しかし、アリサはその前に剣を振る上げ、一回転するように風魔の胴体を狙って剣を振るう。

それを読んでいた風魔はそのままバク宙のように空中へと跳びあがりアリサの一撃を躲す。

更にそのままムーンサルトキックへと持ち込み、アリサに一撃を叩き込む。

「ぐうー！」

風魔の蹴りはアリサの左肩に直撃し、アリサは苦悶の表情を浮かべる。

だが、苦悶しながらアリサは左肩の風魔の脚をがっちり掴み取る。

「すずかー！」

「うんー！」

アリサの掛け声ですずかが前方へと躍り出る。

すずかはその手に持ったハルバードのような三又の槍を振るう。

風魔は体を捻じり、拘束された左足を軸に回転し、右足で槍を蹴り飛ばした。

だが、すずかは蹴り飛ばされた槍をそのままにし、左手に装着された爪で風魔に向かって手刀を繰り出した。

流星にこの手刀を躲し切ることはできず、すずかの攻撃を受けてしまう。

すずかの攻撃が入ったのを確認したアリサは風魔の左足を放し、距離を取る。

距離を取ると再び風魔の脳内にノイズのようなものが走る。

「お……ちゃんきよ……は……にをして………」

頭に“懐かしい”声が響く。……懐かしい声？

不思議な気持ちになる。嬉しくて切なくて……悲しい。

何故だろう？ わからない。

風魔はすぐに思考を切り替え、ニンジャプレイヤーを複数、召喚する。

召喚されたニンジャプレイヤーは縦横無尽に大地を駆け、アリサへと迫る。

ニンジャプレイヤーの攻撃が四方八方からアリサを襲う。

アリサはなんとかニンジャプレイヤーの攻撃を防ぎ、凌いでいる。

「鬱陶しいわねー」

「せいー」

すがすがが左手を地面に付ける。

すると大地が氷り始め、地面を走っていた者も空中を跳んでいる者も地面に足が着い

た瞬間に足が氷結。

結果、全てのニンジャプレイヤーが氷によって氷結される。

しかし、これはアリサも例外ではない。アリサの足も氷によって拘束されている。

だが、炎を自在に操る彼女のデバイス“フレイムアイズ”の前ではこんな氷の拘束な

ど大した問題にならない。

アリサの構える剣の炎はどんどんその勢いを増していく。

「セイヤー……」

回転切りのように振り払われた炎の剣はその刀身を鞭のように変化させ、氷の範囲を薙ぎ払う。

アリサの一撃でニンジャプレイヤー達は上下に両断され、足元の氷は炎の熱と薙ぎ払いの衝撃で粉々に砕け散った。

攻撃直後のアリサに風魔が迫るが、風魔の攻撃はすずかの生み出した氷の盾に阻まれてしまう。

その攻撃を防ぐと氷の盾はすずかの手によって砕かれ、その背後からアリサの剣が振るわれる。

風魔は初撃を後方にバク宙をすることで回避し、二回目、三回目の攻撃も防ぐ。

防御をしている間も風魔はアリサを隙を探る。そして、発見した。

三回目の攻撃を受け止めた際に発生したわずかな隙。風魔がそれを見逃すはずもなく、蹴りの一撃を放とうとする。

「甘っ」

しかし、風魔の一撃がアリサに命中することはなかった。何故か。

風魔の足は動かなかった。——否、動かさなかった。

「捕らえた」

風魔の両足は先程のニンジャプレイヤー達と同じように氷結させられていたのだ。

だが、先程のように大味ではない。すずかはピンポイントに風魔の足元のみを氷結させている。

「誰か一人を」対象から外す」のは無理だけど。一人を凍らせるのは訳ないよ。アリサちゃん！」

「OK！ ナイスよ、すずか！」

一瞬、風魔の注意は足元に向いていた。そして、次の瞬間。

顔を上げ、目の前の敵に目を向けた風魔の目に飛び込んできたのは、

先程とは比較にならない程に巨大な炎の剣を構えたアリサの姿だった。

「喰らいなさい！」

アリサはその巨大な炎の剣を風魔に向かって振り下ろす。

風魔は咄嗟に両腕をクロスして防御の体勢を取るが、そんなもので防げるような攻撃ではない。

「炎華の剣！」

炎の剣は瞬く間に風魔を飲み込み、そのライフのほとんどを吹き飛ばした……。



——あの日以来、私は長い夢を見ていたような気がする。

あの日、突然現れたアイツに私は……。

そのから先の夢で、私はアイツや周りの人達から風魔って呼ばれている。

私は忍者みたいな姿に変身出来て、変わった格好をしたアリサちゃんやすずかと戦っていた。

でも、アリサちゃんの炎の剣に飲み込まれたかと思っただら……。

あれ、この先はどうなんだっけ？

「月村……」

聞き覚えの声が聞こえる。振り向くとそこには高町君が居た。

高町君は目を離れたら今にも消えてしまいそうで私はそんな彼から目を離せなかつた。

「また、いつか会おう……」

待って。その言葉を言う暇もなく、高町君の姿は黄色の粒子状になって霧散した。

彼に向かつて伸ばした私の手は何も掴むことなく、空を切った。

■ ■ ■ ■

「……ん」

「目を覚ました!」

「お姉ちゃん!」

風魔……否、『月村忍』が目を開く。

ドライバーもガシヤットも修復不可能なレベルに壊れている。

そして横には先ほどまで付けていた仮面もまた碎けて散らばっている。

「お姉ちゃん、大丈夫？」

「うん、大丈夫」

「今、救援をお願いするわ」

忍の看護にはさすがが付き、アリスは少し離れて管理局と通信を図る。

そして、忍は先程の夢を思い出していた。

「……高町君、すぐ会えるよね」

process 46 シグナムvsグラフィイト

シグナムとグラフィイト、二人の剣と牙が何度も何度も衝突。

その度に甲高い音を上げてながら離れては再び衝突。

それは互いに一步も引かない剣戟が繰り返り広げられている証であった。

「フッ！」

「ハッ！」

一体、何度目の衝突だろうか。

数十……百にも及ぶかも知れないと思われ頃、突然シグナムが口を開く。

「……リインフォース。いや、グラフィイト」

「何だ？」

「お前は何故主を裏切った。お前は我等よりも遙かに主を……」

シグナムが“それ”を言い終わる前にグラフィイトは牙を振るう。

咄嗟の事であったが、シグナムを剣を受け防いで見せた。

「止めろ。……止めてくれ」

そういうグラフィイトの牙を握る手には先ほどよりも力が入っている様に見える。

「私はドラゴナイトハンターZの竜戦士グラフィイト！ 戦う理由はそれだけで十分だ！」

グラフィイトは吼え、目の前の敵シグナムに向かって駆けた。対するシグナムもかつての仲間を迎え撃つ体勢に入り、待ち構えた。

「ハア！」

二人の剣は、牙は、今までとは比較にならない程に強くぶつかり合う。

その衝撃は周囲に砂埃を巻き上げ、地面を割らんとする程であった。

すぐに再び二人によって剣戟が繰り広げられる。

だが、グラフィイトに先程までの勢いはなく、徐々にシグナムの剣を受け始めている。

「グ……………」

状況を鑑みたグラフィイトはすぐにシグナムと距離を取る。

だが、シグナムはそれを許さない。

すぐに距離を詰め、三度剣戟が繰り広げられる。

やがてグラフィイトはシグナムに押し切られ、剣の直撃を何発か喰らってしまう。

数個のHIT!の文字とともにグラフィイトは倒れる。

しかし、すぐに立膝の状態まで復帰し、牙を構える。

「グラフィイト！ 今なら戻る。戻って来い！」

「くどい！ 烈火の将、貴様はそんな奴ではなかったと思つたがな」

「……主はやての影響だろうか」

シグナムは剣を構え直し、グラファイトを睨む。

「お前は私が止める！ そして、引き摺ってでも主の元に連れ帰る！」

「やってみろ！」

シグナムが剣を振るうと剣は蛇腹剣の様に伸び、グラファイトに迫る。

グラファイトはそれを容易く弾き、シグナムが再び剣を振るう。

そんな攻防を数回を繰り返すとグラファイトはシグナムに向かって走り出した。

それを見たシグナムは剣をすぐに元に戻し、剣を上段に構えた。

「一閃！」

シグナムの掛け声とともに振るわれた剣からは魔力の刃が放たれる。

グラファイトは咄嗟に牙を両腕で持ち、シグナムの斬撃を受け止める。

剣と牙の衝突した甲高い音とともに周囲の地面が割れ、クレーターが出来上がる。

「……ハア」

流石に堪えたのかグラファイトは息を吐く。

だが、即座に牙を薙ぎ、シグナムへと攻撃を繰り返す。

シグナムは跳躍し、それを回避。

そのまま空中で体勢を変え、グラファイトへと剣を振るう。

しかし、グラファイトをそれを容易く防ぐ。

攻撃の勢いを利用し、グラファイトから少し離れた場所に着地した。

二人の視線がぶつかり合う。

姿こそ変わろうとも永い時を共にした仲間同士、言わんとする事は自然と通じた。

それは「次で決める」という確固たる意志。

シグナムは鞘を掴み、剣の柄頭と鞘の上部を接触させる。

すると剣と鞘は一本の弓へと変化する。

シグナムは弓を構え、ゆつくりと引き絞っていく。

対するグラファイトは勢いよく地面を叩き、牙を回転させながら構えを取る。

その過程で牙は紅い炎を纏う。

「ズドズドズドズド……」

「翔けよ、隼！」

S t u r m f a l k e n

「紅蓮爆竜剣！」

紅蓮爆竜剣

シグナムとグラファイトが放った渾身の一撃はそれぞれ炎の隼と竜となって放たれる。

炎の隼と竜は急速に距離を迫り……二人の間で激突。

周囲に想像を絶する衝撃波と爆炎が撒き散らされ、辺り一帯が火の海と化する。

激突地点には一際巨大な炎が燃え盛っている。

隼と竜は対消滅したかに思われた。

だが……。

巨大な炎から隼が不死鳥の如く蘇り、グラファイトに向かって翔ける。

爆炎を突き破る度に大きくなり、最後には元の二倍近くの大きさにまで達する。

竜をも喰らった炎の隼がグラファイトに衝突した。

「グアアアアアアアアアア！」

尋常ではない衝撃と爆炎がグラファイトを襲う。

その衝撃でグラファイトは遙か後方へと飛び、地面を転がる。

竜戦士としての姿は解除され、元のリインフォースの姿へと戻された。

「ハア……ハア……」

「私の勝ちだ。……リインフォース」

「そのようだな」

シグナムも弓を下ろし、ゆっくりとリインフォースの方へと歩み寄る。

だが、リインフォースはそんなシグナムを手で制する。

「私は主を裏切ってしまった。もう、戻れない……」

「そんな事はない。皆がお前を待っている」

「……………」

「戻って来い」

シグナムの言葉にリインフォースは顔を伏せる。

「私は……」

■ ■ ■ ■

「何故私を……」

「君には利用価値があった」

バグヴァイザーの中に閉じ込められたリインフォースと政宗は向かい話をしている。

「リインフォース、いやグラフィアイト。君には私の手駒になってもらう」

断る。政宗の言葉をそう断じようとした瞬間、政宗が言う。

すると画面のプログラムが一気に流れ、パソコンに繋がれた一本のガシヤットにインストールされた。

真つ白だったガシヤットは白い炎のような光に包まれると炎はやがて金色の粒子となつて霧散する。

残されたガシヤットは黒と金を基調としたモノへと変化した。タイトルラベルは未だ存在していない。

「ついに完成した。究極のガシヤットが……」

政宗がガシヤットが手に取るとラベル部分から再び白い炎が上がる。

すると炎が消えた部分から徐々にタイトルラベルが現れていく。

「これが、仮面ライダーラグナロク！ ついに私が究極の存在となるのだ！ ハハハハハハ！」

政宗の笑い声が研究室に木霊した……。

process 47 ヴィータvsラヴリカ

「オラア！」

ヴィータが何度もラヴリカに向け、グラーフアイゼンを振るう。

しかし、何度打ち付けようともラヴリカには通用しない。

少しよるめいたりする様子は見えるが、ダメージには一切なっていない。

彼の能力によって、空中に発生する「MISS」の文字と共に彼女の攻撃はその全てが無効化されている。

「何度やっても無駄だよ。君みたいな暴力的なガールにはボクは一生倒せない」

「うるせえ！」

ラヴリカの様子を見て、ヴィータは思考を巡らせる。

どうすれば、自分が彼を倒すことが出来るのかを。

（相変わらずふざけた奴だが、能力は確かに厄介だな。ダメージが入らないのも結果とかそういう類でもなさそうだ……）

ヴィータが思考をまわしていると、それを遮るようにラヴリカが口を開いた。

「でも、女の子にやられっぱなしもいい男としてはどうかと思うからね。少し反撃させ

てもらおうよ！」

そう言ううとラヴリカは右手から薔薇の蔦をヴィータの方へと伸ばす。

ヴィータは咄嗟にアイゼンを構え、蔦が自身に巻き付くのを防ぐ。

ラヴリカの蔦はアイゼンの柄にがちり絡まり、そのまま引つ張り合いとなる。

「ボクはパワーには自身がないんだけどね……」

「じゃあ、蔦を解けばいいじゃねえか」

「でも、女の子に力負けていうのはどうかと思ってしまうんだよね」

ヴィータとラヴリカのアイゼンの引き合いは中々決着が付かない。

確かにヴィータは攻撃力は高いが、それがイコール筋力も高いという訳ではないのだ。

この均衡を破ったのはヴィータであった。

先程まで柄の中間部分を握っていた手を一瞬放して両手で柄の先端、すなわち持ち手をしっかりと握る。

「アイゼン！」

その声と共にアイゼンの変形、頭部が一方が鋭く尖った形状にもう一方が噴射口へと変化する。

《L a k e t e n H a m m e r》

「まづいー！」

ラヴリカが危機を察知し、鳶を放そうとしたときにはもう手遅れだった。

アイゼンはその噴射口から炎を噴出し、ヴィータを中心として高速回転を始める。

「あああああああああああああああああああああ!?」

アイゼンに鳶を絡ませていたラヴリカもそれに巻き込まれ、高速で振り回される。

「銀河の果てまで吹っ飛びやがれ！」

ヴィータはそう言うのと回転を急停止。

「ちよっ！」

急停止の衝撃に耐えられず彼の鳶が千切れる。

するとラヴリカは回転の勢いのまま遙か彼方まで飛んで行った。

「うわあああああああああああああああああ!?」

「今回はこれで勘弁してやる」

ヴィータは飛んで行ったラヴリカ見ながら、アイゼンの柄頭を勢いよく地面に付けた。

■ ■ ■ ■ ■

「あああああああ……」

ヴィータに吹き飛ばされたラヴリカは町の何処かのビルに衝突し、やっと停止した。

「気持ち悪い」

ラヴリカはふらふらと立ち上がり、気分が悪そうに口元を抑える。彼が少しの間そうしていると誰かがラヴリカの元へとやって来る。

否、俺がラヴリカの元へとやってきたのだ。

「おっと！ これはこれは政宗様」

「ラヴリカ、今までご苦労だった」

俺はラヴリカにそう言うとかグールドライバードライを腰に装着。

一方で状況が呑み込めていないラヴリカは明らかにうろたえた様子を見せている。

「政宗様？ 一体それはどういう……」

「仮面ライダーラグナロクにはありとあらゆるデータが必要になる……」

状況が分かっているラヴリカに俺は優しく、ゆっくり、そして静かに説明をする。

「あらゆるジャンルのゲームから、事象や生物といったものまであらゆるデータが……」

「残るは君の恋愛シュミレーションのデータのみなんだ」

そういつて、俺は一本のガシャット構えた。

「最後のデータの提供とテストプレイが君の最期の仕事だ」

《Kamen Rider Ragnarok》

ゲームが起動すると背後には荒廃した世界を映しだしたこのゲームのタイトル画面のウインドウが現れる。

不穏な音楽をバックに赤黒いオーラを発しながら、ガシヤットは宙を舞いドライバーのソケットへと自動で装填される。

「……変身」

《バグルアップ》

《天を超えしライダー！ 起こせラグナロク！ 世界は今、終わりを告げる……》

基本的な容姿はクロノスと変わらないが色はゲムデウスクロノスに近く赤黒い。

クロノスの時から装着していた腰のマントと新たに装備した上半身を覆うローブをたなびかせ、その新たなる姿を現した。

「では、始めるか」

俺は左の掌を上に向ける。

すると、掌から無数のエネルギーアイテムが周囲に拡散されていく。

少しすると最後にはアイテムが一つ残り、それを獲得した。

《光速化》

動きの軌跡を残しながらも、目にもとまらぬ速度でラヴリカの背後に回る。

その最中にまたアイテムを取得する。

《金剛化》

《マツチヨ化》

硬度と筋力を強化した拳でラヴリカに攻撃を加える。

拳がラヴリカの背中に直撃した一瞬に俺はまた能力を発動させる。

《Option》

仮面ライダーラグナロクの力、触れた相手の能力等を自由自在に書き換える無敵の能力。

これでラヴリカの攻撃無効を消去し、防御力もゼロに。

俺の拳をラヴリカは防ぐことが出来ずに直撃し、そのライフポイントのほとんどが消失飛んだ。

「ぐああああああー！」

ラヴリカは地面を転がる。

身体には既にノイズが走っており、いつ消滅してもおかしくない状態である。

「ぐう……」

「ラヴリカ、今まで本当にご苦労だった。では……」

《キメワザ》

「さようなら」

《CRITICAL CREWS—AID》

足元に投影された時計の針と共に回転蹴りを放つ。

俺の必殺の一撃によってラヴリカは消滅した。

ドライバーをラヴリカのいた位置に向け、そのデータを回収する。

回収したデータはそのままガシャットへとインストールされていく。

すると俺の変身が強制的に解除された。

「ふむ、未完成のデータだところなものは」

俺はドライバーとガシャット仕舞い、その場を後にした。

最後のデータを調整し、仮面ライダーラグナロクを真に完成させるために。